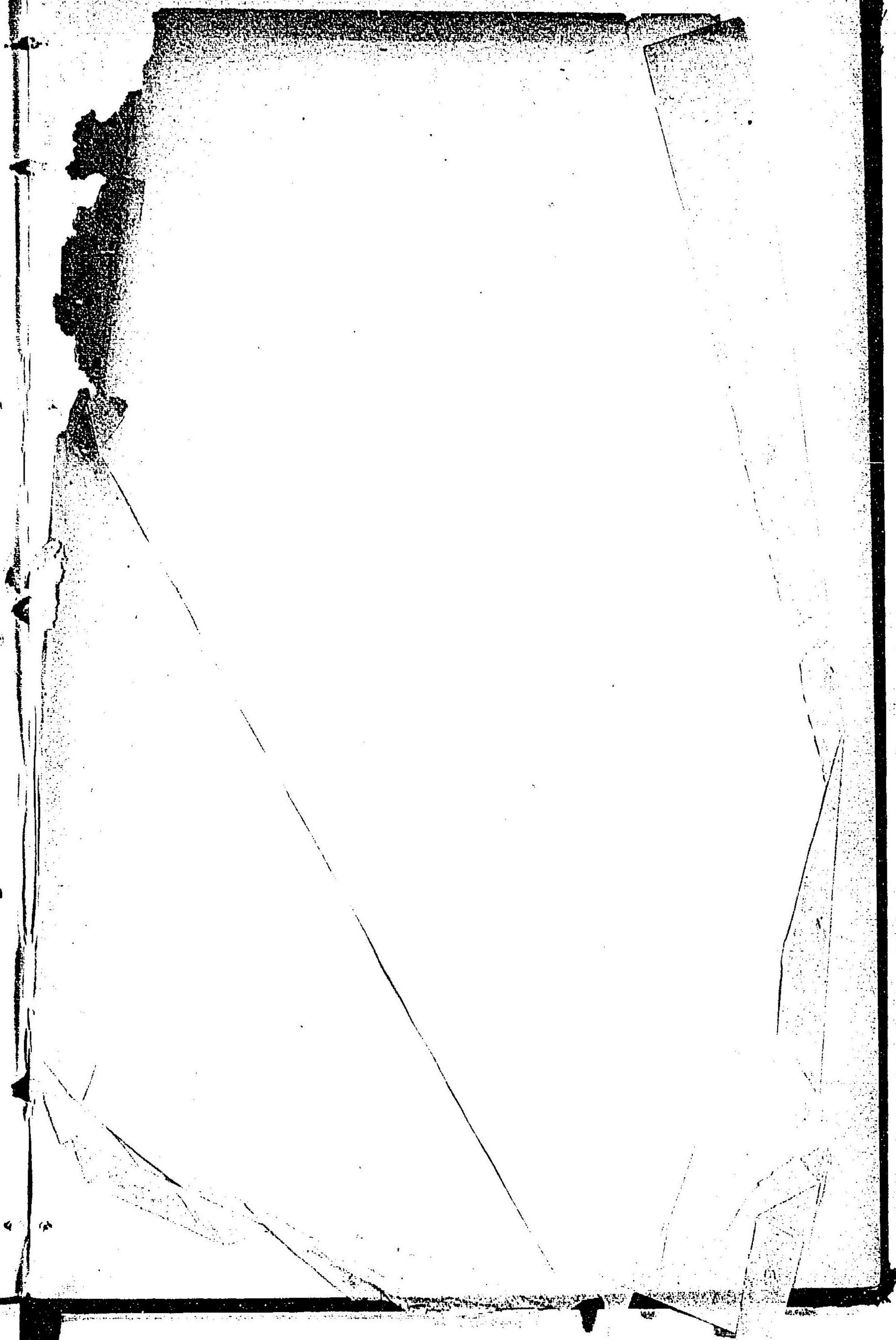


古賀龍孝著

東遊日集

蒼菴舍藏

完



自序

交天下之豪俊。讀天下之奇書。探天下  
之名地舊蹟。亦是人世之快事也。余年  
甫二十三。出而奉職。委身於教育之業  
者有年矣。一朝斷然脫羈絆。逍遙文學  
之園。摘英拾華。不復知世之功名利達。  
雖未得交天下之豪俊。而粗得讀天下

之奇書。然鬱陶之氣。自磅礴於胸裏。欲漏而不漏。於是常以探天下之名地舊蹟爲心。會叔翁市謙有東遊之舉。余亦起焉。今夫海有瀛船。陸有瀛車。黑煙一騰。瞬間百里。雖日子有限。其所歷覽。不爲不多矣。其詳於此。而畧於彼。勢之所不免也。故東遊日乘。亦不能無憾矣。然

如東都之繁華。如日光之壯麗。如鎌倉之幽迹。如伊勢之大廟。如西京之故都。如巖島之奇景。余之所豫期。目命筆應。既飫大宰。復奚問其他。是此行之所以爲主也。嗟乎。余讀天下之奇書。探天下之名地舊蹟。人世之快事。已得其二焉。交天下之豪俊之快。其亦將至矣。頃者

門生相謀。印刷此篇。欲代謄寫之勞。併  
以便世之同望者。然是一身之日乘耳。  
非敢公大方者也。讀者其察之。

明治廿四年八月 古賀龍巷 撰

東遊日乘

例言

一本篇の第三稿を経て成る。余漫遊中常に鉛筆と手簿とを携へ、目も解  
を心も感ずることおぼせば、一一筆して、記憶に資す。是を第一稿とす。毎  
夜客舎に達し、更深け人眠を、殘燈耿々の下、兀坐勞を忍び、綴りて口乘  
となり、二三日おとに家郷に郵送す。是を第二稿とす。歸後郵狀机上に  
堆きを見る。即ち嚮の日乗あり、更各書籍と參考し、務めて正確を期  
し、稍々潤色を加ふ。是を第三稿とす。然れども猶且つ多少の謬筆ある  
を免むざるべし。

一本篇己稿を脱するや、借覽と請ふ者多し、會々門生岸原氏等相謀り  
之を聚珍に附せんとす。余之を賛し、加盟者亦立るに二百餘名あり。是  
に於て乎速も其の目的を達せると得たり。

一余并て鎮西の諸勝を探ぐる。毎小記するに漢文を以てす。今や本篇を  
綴るも漢文を以てせずして、漢字交りを以てするもの漢文と簡古を

主とて、事實の詳細を顕表する能いざると、通讀に便ならざるが爲めなり、

一 漫遊中自作の詩なきにあらず、今本篇に載せき、故に古人の吟詠を引く所以の者、讀者を以て想古の情を起さしむるの一端となさんとす、

一 跋文の及門諸子の手に成る、且つ同學成松氏亦一篇を寄せらる、皆過稱敢て當らざる所あり、然れども列擧して、其の厚意を謝す、

一 本篇印刷に當り、再三校正を加ふると雖も、活字の異動、到底免る能はず、故に正誤を卷尾に附き、

明治辛卯仲秋月白風清之夕

蒼篋舎主人 龍卷 謹

東遊日乗

目録

上の卷

自五月五日

發熊本。經大分。航海赴讚岐。尋至神戸。乘瀛車過大坂西京。航琵琶湖。赴長濱。乘瀛車經東海道。入東京。

中の卷

自全十二日

東京。及日光。

至全廿三日

下の卷

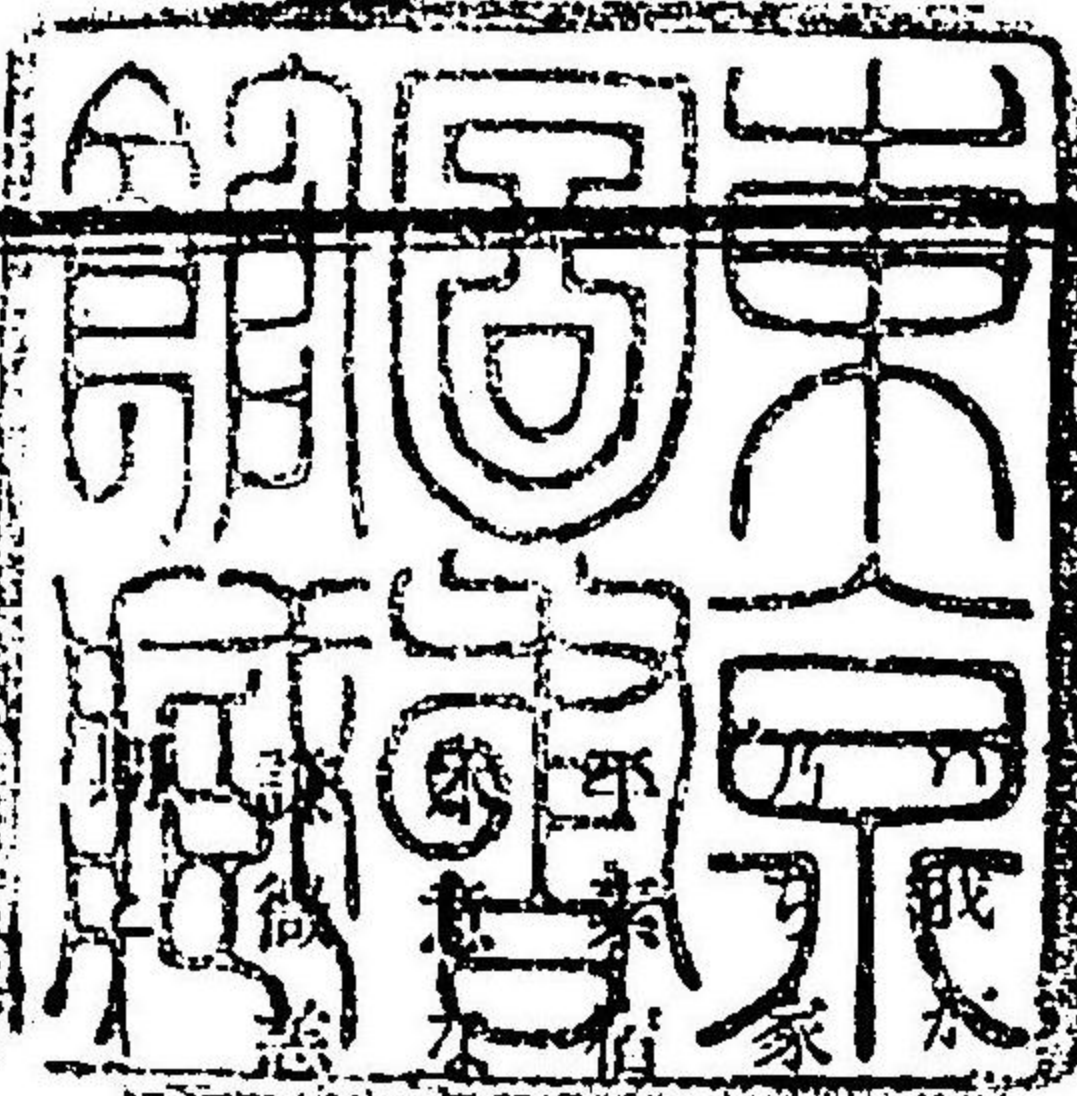
自全廿四日

發東京。乘瀛車至尾張。航海赴伊勢。再出追江。入西京。乘瀛車至大坂。航海赴嚴島。尋至小倉。經博多。歸熊本。

至六月十一日

東遊日乗上の巻

東肥 龍巻散史 著



明治廿二年四月三日、家君託麻郡元三村なる蟻穴亭を訪はる、亭  
叔翁岩崎氏の居あり、時叔翁市下貴謙と東遊の約あり、  
君に託言して予か行を誘はる、余欣然として諾し、以爲く  
望の機至せり、此の上と嵐山墨堤の花期を失とざるこ  
れと、直ちに書を両家に飛ばして、勿々上途を促せ、會々市  
の報來る、遂に因循日を送り、漸く五月三日を以て上途の  
大分行の馬車を約す、期に先つ一日、叔翁市謙來車あり、此  
の夜雨大小至ど、明旦猶は歇まず、又空しく一日を過せり、叔翁本  
年七十一、頗る嬰鏢さり、市謙ハ上益城郡龍野村の人、亦我が親戚  
なり、

五月五日夢覺め忽ち閉く窓外雨聲頻りなるを、肩を盛めて、獨り思ふ、本日も亦發軔する能はざるかど、頃くありて雨稍々歇みぬ、乃ち下婢を走らしせ、馬丁も照會を歸り報じて云く、直に發せんと是に於て予等結東し、一家團樂して出途の祝盃を舉ぐる時、己に馬車轡をとして、門前不至る、乃ち家君に辭し、午前八時二十分を以て發せ、龍田口に至り、馬丁一鞭、馬足を進め、見る間、龍田の山、小嶺の橋も跡にならば、削陣内を過りて、瀬田に至れば、地勢頗る高く、混々たる白川の流も眼下に見落せり、去年の夏、予阿三友と、桐木温泉に浴するや、此の地を經たり、道路修造半ばにして、頗る崎嶇を覺えり、今や馬車猶ほ容易に通すべし、午後一時合志郡立野に達し、丸岡店にて、午食す、此より又馬足を進めて、阿蘇郡に入ると、永脚宮地を經て、六時半、坂梨驛園田客舎に泊せ、抑も阿蘇の郡たるや、高山峻嶺、四境に駢立し、中間の原野廣漠たゞ、地勢極めて高く、所謂阿蘇の五岳、阿蘇の中央に聳え、山勢左右に走り、噴煙颯騰常に絶え、余嘗て岳頂に登り、天を仰ぎて、慨然吟嘯す、忽ち曠世の氣象勃如として、胸裏に充滿

を覺えたり、此の日、白雲山々を擁し、天氣濛々、鎮國の山時々其の腰脚を露らし、蒼翠僅に見るべきのみ、雨大、小至らざるに、實に幸あり、六日朝陰、午前六時五十分、馬車より上り、坂梨驛を發せ、一大坂あり、目前、當る、左右山勢突兀とし、樹木群立す、坂下より馬車を下り、之字の如く、曲折しく登る、凡そ半里許、實に絶險たり、余叔翁の背を擁せんと、ま、叔翁曰く、年老ひ稍々苦と覺ゆるを、雖も、未だ背を擁するに及ばずと、坂頂、小茅店あり、茶を煮て之を供す、時、七時四十分、此より地勢漸と以て下る、即ち馬車の上る、馬勞する、穿くして、車の轉する疾し、道の左右と往々山原と開拓し、菜花盛に開く、而して冷風衣を襲ひ、氣候頗る異なるを覺ゆ、笹原を經て、八時五十分、大分縣直入郡菅生村に入る、坂梨驛を距る三里二町、此より穴井迫に至るの間、斷崖絶巖森々、並び、崎つ、新道の、其の半、腹を開鑿し、紆餘屈曲、頗る人工と窮め、大概一方、數千仞の、雌谷、小臨、み、日駭き、心怵く、馬丁一たひ、馭術を失すれば、予等四大粉、筆、倭、ち、長、夜、の、鬼、と、なる、と、危、を、を、叔、翁、市、謙、一、聲、々、々、危、を、呼、び、己、ま、す、馬、丁、の、注、意、と、促、

す、馬丁、夷然として、毫も心に經ざるもの、如し、十時廿六分、若く園村に至り、馬丁の宅、小憩を、更に馬をかへて發し、玉來町を経て、一里許、竹田驛に抵る、竹田の絶壁四面を圍繞し、地勢低窪、宛然鍋底の如く、一川溶々其の間を横り、實に天然の城郭を形作る、山間の一小都會なり、會々、三宅兩村を過ぎて、大野郡朝地村に至る、坂井迫より又山路漸く仰ぐ、馬丁此を鞭と加へ、車と驅りて上る、一里許、池田村三津留店にて午饭、已に午後一時三十分なり、栗林、島田、梨小諸村を經る、皆是深山幽谷にして、新道は左曲右折、其の間を貫通し、菅生穴井迫間、小勇影より而して、溪水一、山に沿ふて流れ、忽ちにして溶漾、紆餘、忽ちみして雷轟、雲奔、近くは咫尺の間、小在り、遠くは數千仞の下に臨む、奇石、樹道の左右を彌縫し、家立ち、龍臥し、象蹲り、鵬驚る、萬籟、時小至り、空翠、袖小滴る、宛然耶馬溪中の趣きあり、温見より又地勢漸く下る、今市に至れば、兩山稍々開け、天忽ち濶なるが如し、時又天氣快霽、一點の曇り無く、心氣頗る爽なるを覺ゆ、此地の竹田驛を距る五里半に、大分市までの折半ありと、此より大分

郡上、下原各村を經て、野津原驛に至る、日已に没し、星斗爛然、十時三十分、大分市に入る、舊松平候の治所よて、維新後大分縣廳と置き、全國を治す、明治九年、豊前下毛、宇佐二郡と併治す、日本紀に、景行帝十二年十月、帝、碩田速見邑に至ると、碩田の大分なり、地形廣大あるを以て、碩田と名く、又豊後風土記に云く、景行帝海部宮部泊す、此の地に女子あり、速津媛と曰ふ、酋長とて、帝至るを聞き、迎へ奉り、奏言す、土賊五人あり、衆を恃み強暴、皇命に従えずと、是を於て、帝兵を遣し、之を誅去、因りて名けて速津媛國と曰ふ、後人速見と改む、碩田速見後皆郡と爲す、本國に屬せり、高濬港此を距る五六町、直ちに馬車と馳せて、同港に至り、丸金店にて讃州多度津航の中等乗券と購ひ、店主の案内、隣店港榮社に泊し、汽船の至るを待つ、主人云ふ、明午前三時、第二宇和嶋丸着港、直ちに多度津へ向ふ、此れ船之宇和嶋運輸會社の所有、よて長さ二十八間、多度津まで百里、二十三、四時に達すると、隣室俗に客數人あり、津妓と呼ばひ、三絃を弄せしめ、喧騒頗る甚し



七日午前三時十五分、寸夢未だ成らぬ、遙、小流、笛、瀾、を聞く、頃、あり、店主、人、張、灯、を、提、げ、く、階、下、に、來、り、呼、ぶ、云、く、今、國、千、保、丸、入、港、す、と、俄、に乗、船、を、勸、む、是、に、於、く、宇、和、島、丸、を、待、ち、直、ち、小、結、束、去、端、艇、に、乘、り、く、本、船、小、至、る、人、員、已、に、充、け、時、早、や、宇、和、島、丸、至、る、即、ち、端、艇、を、廻、り、し、く、同、船、小、移、り、四、時、二、十、五、分、滿、浦、港、に、發、り、別、府、港、に、至、る、別、府、の、即、ち、速、見、郡、に、屬、ま、し、時、小、天、明、け、旭、日、光、り、と、放、つ、甲、板、上、よ、り、港、内、を、望、み、千、百、櫓、と、連、綿、鶴、見、山、邑、西、に、峙、せ、り、蓋、ま、噴、火、山、に、て、山、を、繞、る、諸、邑、の、温、泉、沸、騰、し、其、の、泉、清、澈、に、ま、て、硫、磺、の、二、氣、を、帶、ふ、と、三、代、實、錄、に、貞、觀、九、年、太、宰、府、言、ふ、鶴、見、山、の、頂、に、三、池、あ、り、其、の、一、の、泥、水、小、ま、て、色、青、く、其、の、一、の、色、黒、く、其、の、一、の、色、赤、く、正、月、池、震、ひ、動、聲、雷、に、如、く、磐、石、飛、亂、大、き、る、者、方、丈、小、ある、者、斐、の、如、し、池、中、温、泉、沸、騰、流、れ、く、河、水、小、注、く、魚、醉、死、ま、る、者、其、の、幾、千、萬、ある、を、知、ら、ず、と、云、へ、る、是、ら、八、時、日、出、港、と、經、る、舊、木、下、候、の、治、所、に、し、く、文、政、天、保、の、間、に、博、學、能、文、を、以、て、名、と、西、海、を、振、ひ、し、萬、里、帆、足、翁、の、桑、梓、あり、國、東、郡、小、屬、ま、后、豊、と、海、水、東、よ、り、國、の、中、央、に、入、り、て、國、東、郡、

と、其、の、北、に、限、り、佐、賀、關、の、其、の、南、に、突、出、し、て、一、大、灣、を、あ、り、滿、浦、別、府、日、出、諸、港、と、皆、灣、内、に、位、を、灣、を、出、れ、を、則、ち、硫、黄、灘、と、す、會、々、風、濤、相、逐、ち、奔、雷、地、小、鳴、り、白、涌、た、碧、翻、り、矯、び、て、龍、と、爲、り、噴、き、て、霧、と、さ、る、船、稍、々、動、搖、す、同、室、六、十、餘、名、横、臥、頭、足、相、觸、る、枕、邊、俟、ち、嘔、の、聲、あ、り、始、め、と、一、人、尋、る、二、人、而、云、く、三、四、人、而、ト、く、五、六、人、予、亦、頭、岑、々、と、し、く、心、下、煩、悶、す、乃、ち、囊、裝、を、探、ぞ、く、黄、丸、を、取、ぞ、之、と、服、し、眼、と、閉、ぢ、齒、と、切、ぞ、強、ひ、く、之、小、耐、ゆ、午、後、四、時、豫、州、三、泚、ク、濱、を、經、て、九、時、今、治、港、に、抵、る、今、治、の、越、智、郡、に、屬、し、舊、松、平、候、の、治、所、に、ま、て、小、都、會、た、り、本、郡、古、と、國、あり、應、神、天、皇、の、時、饒、速、日、命、の、裔、孫、子、致、命、を、以、く、國、造、と、爲、ま、其、の、後、分、れ、て、越、智、河、野、氏、と、爲、る、其、れ、族、土、居、得、能、二、氏、あり、南、朝、小、仕、へ、て、功、あり、聞、く、此、の、地、小、城、壁、あり、高、さ、數、丈、樓、堞、已、小、毀、ち、壕、堦、の、猶、は、存、ま、即、ち、松、平、氏、の、居、し、所、に、して、應、長、中、藤、堂、高、虎、の、築、く、所、あり、と、以上、各、港、を、經、る、每、小、輪、を、休、む、乘、客、或、之、船、と、出、る、者、あり、亦、船、小、入、る、者、あり、到、底、同、室、六、十、餘、人、を、滅、せ、ず、頗、る、局、促、さ、り、傍、ら、小、僧、都、某、あり、小、説、血、遠、磨、と、讀、む、我、舊、藩、事、に、係、る、

故に叔翁に對して屢々疑義を質す、某の嵯峨關の人、各地の聘ふ應じ、天刑疾を治すると云ふ、

八日午前三時二十分、香川縣多度津港より上る、所謂宿引てふ者、各々張灯を提げ、口々に家號を呼りて客を引く、乃ち虎屋支店に投せ、天明け戸を開きて之を望めば、樓海に面して山に對し、風光最も佳なり、六時より金刀比羅社に赴く、社に此を距る三里、舊道を取て、腕車を馳する一里許、石華表あり、此れ間左小幡谷を望む、弘法大師の行せし所と云ふ、右に飯山を見る、俗に多度津富士と云ふ、己にして遙に五階層樓樹林の間に顯る、七時四十分善通寺に詣る、此の地の多度郡大麻村に属す、寺門に入る、右に大樓あり、額に大寶樓閣陀羅尼の七字を記し、釋迦佛を安置す、相對して五階層樓あり、櫓に樹林の間に顯る、者是あり、中門に善通寺と云へる額を掲ぐ、門内左右に寄附金氏名を石に刻せしもの併列を、石橋を渡せば奥門とす、又遍照金剛閣と云へる額を掲げ、左右に仁王像を置く、尋で本堂あり、又額して弘法大師誕生之場と云ふ、香火の氣人を薰

蒸せるを覺ゆ、堂の左右、松樹數十株、蔭映頗る幽趣あり、又堂の前に一方池あり、石を以て之を登み、二大松樹峰嶽繁茂せり、傳に云ふ善通寺之空海生長の地にしく、其れ誕生せし所の多度津屏風浦と云ふ、堂後より高敷を登る、上小一小祠あり、佐伯祖廟と云ふ、地勢高峻にして眺望あり、旁らの一山青松群立し、翠色隠々掬すべし、此を去り、善通寺門前より左折右轉して新道不出づ、弓兒車を擁り來り、群々錢を乞ふ、大喝之を掃ふも去らず、頗る五月蠅けき、九時三十分金刀比羅に達す、市中に一水あり、架さる小橋を以てて、屋を設けて之を蓋ふ、形ち關道に如し、呼びて室橋と云ふ、之を渡せば内町あり、街衢稍々廣く、左右旅肆を連綿り、金刀比羅社と象頭山は半腹にあり、高さ數百丈、山貌象の頭に似たり、故に名く、石級を拾ひ、鐵華表に入る、又百七十級を拾ふて、第一樓門あり、琴平社の額を掲ぐ、此間も市肆駢列し、オヨリナサイ、賽錢カヘマセウ、守札オカヒナサイ等の聲、喧嘩耳を煩ひ、門前小金刀比羅崇敬講社本部、並小金刀比羅崇敬教會本部あり、二箇は表札を掲ぐ、門に入ると、石燈七級を拾へば、左右に

石燈籠併立す、此を過ぎて、石華表に入り、四十五級を上り、稍々平地あり、是を櫻馬場とす、兩側に櫻樹を植う、又四十級を経て、社務所並に皇典講究分所の前に至る、此れ間左小庭あり、神馬三疋と繫ぐ、左に折るをば、内務省下附金五百圓、其の他宮内省、華族紳商、及び外國人等、此當社保存會協賛姓名録の掲札あり、其の上には躑躅さしかゝり、花々爛發して頗る美麗あり、又二十三級を上れば、茶店の設けあり、右に折るをば、寶物拜觀所あり、此より數十級の間、石標道を夾む、皆金幣と奉納する者の姓名、及び金額を鐫る、凡そ三百名許、攀ち盡きて平地を得る、鹽水あり、其れ旁ら小庭あり、石燈籠あり、西南の役に死せし者の事を記せり、又三十一級を経て平地あり、偶々宏壯偉麗なる一層閣と見る、是を旭社と名、右に折れて銅華表に入り、十五級と上り、賢木門に入り、數十歩にして、鐵石兩側に對立する、各々散語と刻す、此より盤折して行く、旁らに小碑あり、

はなのかげまゝりにかはるまゝるかばら

と云へる芭蕉の發句を鐫る、石燈籠二基對立す、從四位行侍從兼對馬守

平養和の獻納する所あり、石橋と渡る、下看數千仞、此の間五六の小社あり、左に折れ、石華表に入る、從四位下行侍從兼讚岐守源賴儀獻納の銅燈兩基あり、又石燈百三十級と登る、山下より此に至る、燈道凡そ六百餘級、始先て廣庭に達す、幣殿あり、其の後を本社とす、大己貴命と祀り、崇徳帝を配祀し、國幣中社と列す、聞く維新前、佛號と奉し、祭祀は佛者の手より出で、殿宇丹碧煌耀目を奪ふと、近年素材を以て改造し、規模宏壯、自ら神威は赫々たるを覺ゆ、銅燈數基あり、其の右にあり、一字と御饌所とす、其れ下深淵に臨む、遠く丸龜地方と望見す、所謂多度津富士兀然として、田中央に聳え、満山老杉森々として、眺望は地僅に此の一方あり、其れみ、幣殿は前と過ぐれば、右に回廊あり、左に樂殿あり、三穗津姫の社に詣る、姫と大己貴命を配に、社も亦宏壯あり、社の南にある二字は額殿、繪額を掲ぐる、其れ幾許を知らず、又大鏡石と奉するあり、殿の旁らに銅馬を飾る、其れ大馬の如し、姫の社前より燈道を下れば、旭社の旁らに出づ、此より前路を踏み、寶物拜觀所に至る、每室陳列せる物品

此概畧を擧ぐれば、

○第一室、燒物細工人形、鏡山初女、馬丁神馬と牽く、飛彈甚五郎京人形を造る。○第二室、三十六歌仙、筆者不詳、生駒家寄附。全上、狩野尚信、同守信、同安信筆。○第三室、珍器、(一函)卷物、掛幅、(諸名家筆)。○第四室、大判、甲州金、(一函)見石不動尊、崇徳帝金銀鏝、金阿彌陀佛。○第五室、神輿、(新製、粧燦爛)。○第六室、源氏物語屏風一雙、(土佐、光起筆)。○第七室、甲冑、(諸家寄附)琵琶、琴、雄刀、(二箇)鎮西八郎の矢、(一對)。○第八室、奥庭眺望。○第九室、佛木像、(古物)古書幅、刀劍、(諸家寄附)卷物、短冊、(一函)。○第十室、象頭山、十二景掛幅、(狩野法眼、同時信、同永信筆、林家詩贊)。○第十一室、唐鞍、(本社傳來)。

十二時半、虎屋本店に至る。社下居民五千五百、皆本社を待つて火を擧ぐる者、而して虎屋の其の巨壁より、家の規製頗る宏整にして、内樓と新築とを経て、未だ久かたず、乃ち午食を命じ、午後三時四十分、腕車を馳せ、新道を経て、多度津客舎へ還る。途上遙に丸龜の故城を見る、又金倉寺路旁に

而して、寺中松樹森然、土人云ふ、智證大師降誕の處と、按まると本州之維新後、香川縣を置き、全國を治ま、其の後愛媛縣に屬し、客年再び香川縣を置く、縣廳は香川郡高松にあると云ふ、歸後神戸航は汽船を待つ、既にして客舎主人報して曰く、即刻備前丸解纜す、中等室の己に充ると、乃ち下等乗券を購ひ、勿々船小上る。時ふ七時あり、船長さ十八間、中等室十六疊、同乘三十人許、蓋し都合ありて下等乗客と中等室に操り上げり、前日の乗船に比すれば、甚だ窮屈からず、大に便利を得る、九時二十分、汽笛一聲耳を穿つ、衆云ふ、今高松を經ると、此の夜雲霧を風無く、孤月天に在り、海上殊に穩ち、神戸の多度津を距る五十里と云ふ、九日早起、甲板に上る、時ふ大陽一谷の山旁に出で、海面小映し、宛然畫に如し、予覺えず、快を呼ぶ、淡路嶋を右にし、明石舞子濱を左にし、兵庫神戶を向ひて、船駁々進む、舞子の白砂、一帯翠松、羅列、風致頗る愛すべし、一谷の北、川柳、鉢伏、坂、崎、越、小連、川、瀬、海、洋、々々、たゞ、予、其、の、舊、墟、と、船、員、に、質、し、叔、翁、と、古、昔、と、追、憶、し、て、指、點、し、つ、つ、平、家、の、城、郭、と、構、へ、て、多、く、

赤旗を春風に翻し、いよいよ専途と望め、いひ彼處から九郎義經、太夫黒  
といふ馬に乗せ、かへく鹿の通路の馬の馬場なるを落せ、々々下知を  
なし、馬の尻足引敷せ、一鞭加へて、眞逆に流落させ、たゞ三千餘の  
兵ども、大將軍についで、白旗三十旒城中へ打靡せ、手綱ういくと、笠  
踏り、目を塞た馬を任せて、劣く下り、いと彼處から、杯語る中  
に、船と早や兵庫を経て、神戸港に達す、時に七時十五分なり、内外國大小  
の漁船の港内に、及び、連櫓林の如く、一目、本港の盛んなるを知るべし、直  
ちに榮町池田客舎に投せ、休憩之に久し、予主人に遊覽の順路を質し、叔  
翁市謙と共に、先づ外國人居留地に至る、道路脩潔にして、洋館屹然軒を  
列、紛聖峻々、殊小壯觀たり、而、玄て紅髮碧眼、徒右往左行、的面に外國  
貿易地たるは、情況を露りせり、此を過ぎて、小野濱海軍造船所、抵る、例  
に參觀する者の必ず、導者を用ふ、乃ち某店に就き、導者を雇ふ、導者造船  
所、於て一一説明す、家屋は宏大、器械の結構、頗る人目と驚す、之を要ま  
る小器械の皆車仕掛し、して、一の本車あり、之と運轉せしむれを、各棟に

備付の各種の器械の、其れ餘力を假せ、一時に運轉し、其の業と始む  
人力と費を穿く、く、功と成を最も大あり、水雷船四隻、製造半々に係る、  
見畢り、道を轉して、生田森に至り、生田神社に謁せ、稚日女尊を祀る、社内  
樹木森然、梶原の井籠の梅、敦盛萩、社に左右あり、願ふに、平家の東の生  
田森を城門とし、河原兄弟、生田森の先、駈し、く、討死せしかば、梶原平三、私  
黨は、殿原不覺にて、河原兄弟と討せ、ふと寄せ、や々々と、五百餘騎、生田  
森の逆茂木と、取除させ、城中へ喚て、かゝる、次男景高、父の語も、顧みず、な  
ほ、も先を駈け、れを、平三の平次討する、景高討すな、續けやとて、兄の源太  
同に、三郎引具して、五百餘騎、敵の中へ突入し、颯と引て、出で、た、源太  
の、見え、ず、平三、涙を、浮べ、源太、討せて、吾命生た、ま、とて、何かせんと、又、引返  
し、予の、梶原平三、景時とて、東國に、一騎、當千と、呼れ、し、兵を、我と思、ん、殿  
曹に見、參せんと、呼り、つ、敵兵を、蹴散ら、し、源太、何處に、有やらんと、眼  
を、注げ、ば、源太の、馬を、射させ、歩立に、あ、盛の、紅梅と、籠に、さ、し、大童と、あ  
り、五人の、敵に、取籠ら、せ、面も、振ら、せ、働け、ま、平三、急、死、馬より、飛、ひ、下、り、い

か小源太景時、いかに在り、父子して五人の敵を三人討取り、二人よ手負せり、今昔の夢とて、梶原景時が二度の蒐、源太景季の籠れ、梅とて、生田森と共に其の名をぞ傳へたる、華表前より左に折せ、五六町を経て、生田川に至る、摩耶山其の上に峙つ、摩耶山の元弘中赤松圓心が據守せし城址、小去く、其の麓、小布引瀑あり、下流之即ち生田川あり、是より支徑と上る、茶店あり、徑上、屋を架す、雌谷に沿ひ、盤旋しく行く、二三町許、忽ち瀑布を見る、進く佛堂に至る、額しく布引觀世音と云ふ、一拜して、瀑前に出づ、兩雌、架して、茶亭を構へ、瀑布を觀る所とす、瀑山間より、洶然、然一齊、瀉た下る、高さ六七丈、一激、一怒、雲、倏ち、涌き、霧、倏ち、生、ト、勢、ひ、雄、壯、かり、是を雌瀑とす、此を距る三町許にして、雄瀑あり、子孤、身勇を、鼓、し、透、逆して、山徑を攀づ、流、江、瀉、瀉、と、至、ま、ば、則、ち、一、匹、の、練、壁、頂、に、懸、り、高、さ、雌、瀑、に、倍、し、府、々、相、承、け、六、級、と、な、り、忽、ち、急、に、緩、に、緩、々、然、瀉、々、然、深、潭、小、墜、つ、山、風、横、さ、ま、に、射、ま、ば、飛、ぶ、者、雪、を、捲、き、飄、る、者、花、を、散、ら、し、最、も、風、致、あり、然、ま、も、雄、壯、と、雌、瀑、不、及、バ、き、亦、瀑、前、に、當、り、て、茶、亭、を、構、へ、觀

瀑の所とて、予愛を割き、一茶して下り、雄瀑の風致、雌瀑に勝ると説く、叔翁市謙、往かざるを悔ゆるもの、如し、嗚呼、内外交易、は俗地、不接して、此の幽邃、閑雅、れ、奇景あり、宜なり、土人、れ、珍重する所となるや、腕車を馳せ、市街を縦横して、淡川神社に詣る、楠公を祀る、明治四年、別格官幣社、不列せらる、神門及び華表あり、又石表對立す、高さ二丈許、力士陣幕の寄附に係る、拜殿の後を本社とす、旁らに神池あり、龜魚浮游す、地勢、ハ市街と平線とみせり、拜し畢じ、城内を巡り、水藩義公の建らまじ、穹碑を探る、之と翠松環植れ、中、得る、堅三尺九寸、横一尺六寸、厚一尺の青石、よて、龜、跌、前に向ふ、中、壘、二尺五寸、横五寸、下、壘、五尺、横一丈、共に白石を、碑、面、鳴呼、忠臣楠子之墓、八字ハ、八分字にて、義公の親筆に係る、碑陰の贊ハ、則ち明遺臣朱之瑜の撰、所なり、屋と構へて之を覆ふ、神門の外、廣遠を開た、市座道を夾み、晝夜人肩相摩し、極めて繁盛なり、西馳、淡川に至る、淡川の神戸兵庫、其境、在り、平時ハ、一勺水なく、唯一條の砂礫の、左塘ハ、松樹、右塘ハ、榎樹、翠色、隠々人と擦め、一厨の風致、お、楠公正成ハ、腹背に、敵を、

受け、今、近きぬ處ぞと七百餘騎を前後に立て、弟の正季と大勢の中へ、  
進入し、七離七遭殆んど直義と獲んとす、尊氏悪手を入替へて下知を  
六千餘騎、淡川に東へ出で、跡を切らんと取巻きける、正成、兄弟馬を同  
らしく之に當り、血戦十六合、餘を所僅に七十三騎、猶ほ圍を潰すべきも、  
正成京を出しより世の中、是迄と思ふ所存あれば、一足も引か  
ず戦ひ、機已に疲まければ、淡川の北の民舎に走り入り、鎧を釋く、我身  
を見るに、十一劍と被れり、顧みて、正季に向ひ、死して、何を爲すと問ひ、  
れば、正季笑ふて、願くは七生まる人間に生きて、朝敵を滅さばやと、正成  
欣然として、是吾心と獲たりと、兄弟差違へて、同一枕、不臥しに、なる此の  
地の昔思遣られて、憐なり、淡川を渡り、兵庫に入と、和田岬は抵る道に住  
吉神社あり、域内に十三厨の石塔婆あり、土人云ふ、平相國清盛の塔と、兵  
庫の古より有名は良泊なれば、應保中清盛經嶋と築きて舟泊は利を謀  
り、事あざ、和田岬の其の西よと出で、大灣を抱く、一祠あり、和田神社  
と云ふ、白砂地に満ち、青松列立、社前一橋と架す、干満橋と稱す、新田足

利相持つて、未だ戦はざる處に、本間資氏、黄瓦毛なる馬の太く、進しきに、  
紅下濃の鎧著て、只一騎、和田の岬に波打際に馬打寄せて、澳ある船に向  
ひ、大音聲に、將軍西來定め、津妓を召其せ、くれん、其の爲め、珍しくしき、下  
物一つ進らせんと云ふま、小弓、小矢を注け、鴉は魚を攫みてあふる、と  
望み、小松の陰よ、馬を駈出し、追、様にあきて、之を射、故ら、小其、其、隻翼  
を斷つ、鴉は魚を攫み、あふる、敵の舟中よ、落ちける、阿軍、譁呼、資氏、一世  
の譽を顯いせり、腕車と廻らし、經島來迎寺に至る、經島の又築嶋と稱せ、  
築島人柱三十人身代と、松王小兒の墓、及び小兒入海の跡あり、松樹を植  
えて之と表せ、小兒の讚州香川の城主太井民部の嫡子、當年十七なりと、  
又清盛の愛姫、妓王、妓女の墓、本堂の前に在り、寺に古物を藏す、此の地は  
史傳と徴すべしと云ふ、池田客舎よ還る、夫を神戸の山を負ひ、海に面し、  
市街整備、所謂五港の一にして、慶應二年始免、此港を開き、互市場と  
す、東は生田川を限り、西は淡川を夾みて、兵庫と相連り、市坊九十七、居民  
四萬九百、維新の後、兵庫縣廳を置き、本州五郡を治す、九年播磨、但馬、淡路、

及び丹波二郡を併治す、其の繁盛畿甸に在り、埤浦と相すると云ふ、午後六時三宮停車場に至り、瀛車券を購ふ、己小末て車發す、瞬息の間、住吉、西の宮、神崎の三停車場を経て、七時六分大坂梅田停車場に達す、此の間、三陸道、三鐵橋あり、停車場を出づるや、車夫群集し、喋々乗と勸む、叔翁大嗚掃ひ去る、西成郡會根崎村高橋客舎に投ず、舍翁熟々叔翁を視て曰く、僕人を相する多し、而も君の容貌の如たど見え、百歳の壽券を折きて証せん、叔翁曰く、予疑に東上の吉凶と占ふ、時に卜者予に許すに、長壽の相を以てす、今予れ言と符を合せる如し、果して百歳は壽筵を開くに至らば、予遙かに一大樽を呈して謝する、あらんと、一坐自ら談興お入る、余再び停車場に至り、明旦は發車を照會す、場吏云ふ、午前七時梅田を發し、午後九時濱松へ着すと、

十日微雨後、午前六時四十分、市謙電報を弟質に發し、云く、コンヤハママツ、アヌユフシンバシ、マテヨ、質四五年前お東遊し、今ハ第一高等中學に入學せり、七時五分梅田停車場お至り、乗券を購ふて瀛車お上り、二

鐵橋を経て、茨木停車場お至る、又た二鐵橋を経て、高槻停車場と過ぎ、山崎停車場に至る、即ち山城攝津の境界たり、天正中、羽柴、秀吉、早くも、天王山を指し、左右に謂て曰く、今日ハ戰敵として先づ此を獲せしむ、吾利お非る、ありと堀尾吉晴に命じて先登せしむ、吉晴應へて起ち、單騎馳せ向ふ、賊兵先づ登る者千餘人、己おいへ、吉晴は全兵堀秀政と皆至る、大呼奮撃、賊兵山をすて、去る、遂に山崎ハ一戰お秀吉全勝を占め、期業此より去く、就る、八時五十分京都七條停車場お至る、瀛車を乗替へ、九時全所を發じ、稻荷停車場と過ぐ、稻荷神社、朱色燦爛、山腹樹林は、間に顯り、次ハ山科停車場とす、山科ハ赤穂義士大石良雄、主家斷絶ハ後、潛居此地あり、次を大谷停車場とす、之を過ぐせば、則ち相坂山なり、古へ關あり、今山を穿ち、陸道を造る、瀛車ハ陸道お入るや、暗黒咫尺を辨せず、陸道を出せば、倏ち渺々たる大湖を見る、追江の琵琶湖是なり、大津停車場に至り、瀛車を下る、十時卅分小輪船に乗り、湖水と渡る、同船數十人、大觀田翁野廻、口々上棟式ハ有難きを語る、予途おて聞く、昨九日大谷派本願寺



本堂上棟式あり、信佛連遠近よと群集せしと、蓋し其の歸郷する者あり、  
 余與に語るべき者あり、獨り甲板上に在り、四望を遙に左に當りて、辛  
 崎堅田の洲汀、紫迴わり、其の上、お峙ちて、山勢西に走り、駢然馬嶺の如く、  
 牛背の如き者、を比叡山とす、童緒にして、白礫を雜へ、堆阜峰と爲し、峻然  
 雪を帶る如き者、を比良嶺とす、又遙に右に當りて、三上山、嶺然と平坦の  
 際、に直立し、翠色隠々、所謂追江富士是也、後と、則ち三井寺の飛閣、高く  
 雌嶺に憑り、旌幟飄々たり、倏ち一氣船突、烟坊揚、遠きよりして、來るあり、  
 兩船相近く、や、汽笛を鳴らし、相應せ、湖上風、無く、烟波、恬靜、船北に向ふ、  
 て進む、一望際、無く、眞に、決々乎、たる、大觀あり、十二時、廿分、沖嶋を過ぎ、  
 遠く、多景嶋を望む、二嶋、の、水の中心、おあり、己にして、一城、巍然、高丘、樹  
 林、の、間に、顯る者、を彦根城とす、又一峰、比良嶺と斜に、湖と隔て、聳拔、宏  
 壯の勢、を爲して、相對するあり、所謂、懸吹山、是也、尋で、竹生嶋を、湖北  
 隅、お見る、此の嶋、岩石、相重り、く、四面、絶壁、雌下、小洞門、及び、屏風、岩、材、木、岩  
 等の、奇勝、あり、と、湖水と、南に、流せ、く、大津、粟津と、過だて、勢田川と、ある、南

北十五里、周回七十四里、其の幅、東北の頗る廣くして、六七里に及び、西  
 南に至ると、堅田今濱、れ間よと、兩岸漸く狭くし、く、一二里に過れば、其  
 の形、ち琵琶、お似すと、故よ、名く、全國第一の大湖とす、所謂、追江の八景は、  
 比良の暮雪、堅田の落雁、唐崎の夜雨、三井の晚鐘、粟津の晴嵐、矢橋の歸帆、  
 勢田の夕照、石山の秋月、是かり、然を、と、粟津、矢橋、勢田、石山、の、湖の、南端、  
 に、位し、或、お數里と、隔て、八景の、地、一、嶋の、中、よ、選、く、す、る、能、い、を、現、ん、や、四  
 時の、佳興、の、如、た、行、旅、れ、得、て、其、れ、味、を、盡、く、す、所、に、あ、ら、さ、る、あ、り、午後二  
 時十分、長濱、お着、き、長濱、湖東の、要津、おして、美濃、れ、大垣と、直路、十里、舟船  
 れ、出入、大津に、次、げ、と、時、お二時、發の、汽車、將に、長濱、停車場、を出、で、ん、と、き、  
 衆皆、倉皇、船と、下、と、先、と、争、ふ、て、停車場、に至、る、汽車、己に、發、す、遅、る、者、十  
 六、七、是、に、於、て、三時十分、臨時、發、車、あり、予等、之に、乘、り、同、停車場、を出、で、  
 懸吹山に、循、ふ、て、馳、す、沿、道、れ、田、地、菜、花、方、に、開、た、宛、然、黄金、界、の、如、し、春、照  
 停車場、と、過、ぎ、山林、の、間、を、經、て、三時五十分、關ヶ原、停車場、に、達、す、此、の  
 地、の、濃、州、不破、郡、に、係、る、所謂、不破、の、關、址、の、原、の、西、隅、今、須、驛、お、あり、と、云

ふ、關ヶ原の古の所謂不破野にして、又青原と稱す、後此に關あるを以て、關ヶ原の名あり、西の膽吹山は麓に亘り、東北の池田山、金生山等相圍む、應長中東西兩軍龍關虎爭れ地を、輻輪矢の如く、一一探討する、暇あらざ、垂井停車場を過ぐ、法艸花田は滿ち、宛然赤甍を布くが如く、而して松樹列立、青紅相映す、四時五十五分、大垣停車場に至り、瀛車を下り、安八郡高屋村湊客舎に投ぎ、己にし、大垣、守郭を巡視す、大垣の舊戸田侯の治所、市坊四十、人口一萬餘、岐阜と相伯仲す、今日に至り、岐阜縣治あるを以て、其の繁盛大垣の右に出つると云ふ、此れ日長濱午後二時の發車に遲き、濱松に達する能は、俄此の地一泊とありぬ、十一日晴、午前七時十六分、瀛車の上り、大垣停車場を發し、鐵橋を渡り、岐阜停車場に至る、岐阜の稻葉山は據り、長良川に臨み、東南は各務野を帶ぶ、中央の一都會あり、稻葉山の齋藤道三の據りし所、其の孫龍興に至り、織田信長に滅さる、信長更、城樓を増築し、改めて岐阜と名く、又鐵橋を渡り、木曾川停車場を渡る、木曾川の信濃より來り、飛彈川と併せ、西流

し、太田に至り、大河となり、勝山の麓より尾張の境に沿ふ、南に環じ、伊勢の内海に入る、瀛車己、尾州に入る、一の宮、清洲二停車場を過り、名護屋停車場に臨み、一城を左に見る、所謂名護屋城是なり、嘗て聞く、金剛てふ者、雲表に、焔燿と、まて、實、小、壯、觀、ありと、今、車、窓、よ、之、を、仰、ぐ、焔、耀、れ、色、を、失、ふ、もの、如、し、予、竊、小、恠、め、す、次、と、熱、田、大、高、大、府、三、停、車、場、と、す、次、と、參、州、刈、屋、停、車、場、と、す、此、と、經、て、一、大、河、と、渡、る、所、謂、矢、矧、川、是、あり、本、州、の、五、川、凡、を、三、つ、太、平、と、云、ひ、豐、川、と、云、ひ、矢、矧、を、併、せ、く、三、と、ある、三、河、と、名、く、る、所、以、あり、而、ト、て、矢、矧、最、も、大、なり、其、の、流、二、十、二、里、信、濃、よ、り、發、して、美、濃、の、境、を、限、り、轉、て、南、下、り、足、助、川、を、併、せ、岡、崎、を、過、り、内、海、入、る、九、時、五、十、九、分、岡、崎、停、車、場、不、至、る、岡、崎、の、舊、本、多、候、は、治、所、不、し、て、名、護、屋、と、相、距、る、十、里、德、川、氏、の、舊、國、なり、初、め、家、康、此、の、一、城、に、據、り、大、國、は、間、不、間、關、崎、嶮、大、小、四、十、餘、戰、卒、に、能、く、禍、亂、を、戡、定、し、三、百、年、の、霸、基、と、肇、創、せ、り、蒲、那、停、車、場、と、過、り、右、に、入、海、を、按、ず、る、に、三、州、の、國、た、る、東、南、不、一、大、長、岬、を、指、す、其、の、頭、處、を、伊、良、胡、崎、と、名、西、南、志、摩、に、

對す、岬半の一角大地れ角と對して、灣を包み入海す、即ち是あり、一陸道を  
 を抜け、海に沿ふて馳す、二停車場を經る、一を御油、一を豊橋とす、豊橋の  
 即ち灣れ當中あり、豊川の東北より來り、豊橋を過りて灣に入る、其れ上  
 流東に、鷺巢山あり、西に長篠あり、長篠の武田徳川の古戰場たり、此の地  
 舊名吉田、維新後今れ名に改む、舊松平候の治所あり、豊川村此と距る一  
 里許、稻荷祠あり、棟宇宏麗、拜展する者陸續絶えざる、己にして一廣原  
 あり、左の百鳥は原、右の高瀬原とす、道は左に怪巖峭拔す、巖頭に銅像の  
 觀音を安き、窟觀音と云ふ、鷺津停車場を經る、己に遠州に入る、乃ち荒井  
 驛と右に、濱名湖を左に見る、湖の東西四里、南北五里許、沿回二十里、中  
 小猪鼻、引佐、細江、佐鳴湖あり、而して高師山、本坂山等、西岸に並び、風光、明  
 媚にして、近江の湖水と併稱す、故に國名亦相對しく、遠江と云ふ、蓋し遠  
 近の俱に京都と以て的とあす、古への湖水一條の川とありて海に注ぐ、  
 明應八年、大地震に震ひ、湖口壊決一里餘、是より湖水且に通せし、世稱トク  
 今切とせ、一大鐵橋を架せり、舞坂停車場を過りて、濱松停車場に達す、予

倉皇、瀛車を下り、東京迄の乗券と購ふ、時己に十二時、壯丁兩三輩、車外を  
 奔走し、折詰辨當を賣る、乘皆錢と投し、之と求む、濱松の静岡縣に屬し  
 兩京間、れ半途なま、濱松を發し、天龍川と渡る、又鐵橋を架す、長さ五百八  
 九十間、天龍川の信州諏訪湖の下流にして、直ちに南に流せ、秋葉山は西  
 麓を過り、國の中央を貫き、分れて大天龍、小天龍とあり、共に掛塚港に注  
 ぐ、湖口より海口に至る六十里、水流緩ふして、舟船上下、富士大井の湊  
 に似せりと云ふ、中泉停車場を越え、又二鐵橋と渡り、袋井停車場を過ぎ、  
 陸道を抜け、掛川停車場に至る、掛川の舊太田候の治所なり、又陸道を經  
 て、堀内停車場を過ぎ、又陸道を經て、午後二時四十分、大堰河を渡る、大堰  
 河ハ駿遠に界して、源を信甲群寮の間に發し、南流四十里、平時ハ水甚だ  
 少し、秋水時不至れ、而淡の間、牛馬を辨せず、故を以て、街道第一ハ大河  
 たり、昔之土人、游泗板輿を以て人を涉せ、大雨とに旅客滯留、動もすれ  
 ば、數日と費せ、明治七年橋を架す、長さ七百五十三間、瀛車道ハ天龍川と  
 同じく、近頃一大鐵橋を架せり、島田、藤枝二停車場を通り、次を焼津停車

塙とす、日本武尊東征に際、土賊火を原野に放ち、尊を害せんとす、寶劍の  
 餘徳反て奇勳を奏せらる、即ち此の地あり、故に焼津に名今に存  
 せど、聞く焼津村に焼津神社と云へるあり、日本武尊を祀ると、此よど海  
 岸に出で、二陸道を抜けて、安倍川を渡り、静岡停車場に至る、久能山の東  
 南海邊に在り、此を距る三里許、東照公は廟あり、朱斐麗棟、塗桀は滑澤、采  
 章の煥燦、日光廟に亞ぐと云ふ、江尻停車場と經る、南遙に三保松原を望  
 じ、三保の久能より東北に向ふて、海面に斗出し、形ち象鼻の如く、東西一  
 里、南北之、半し、自砂翠松相連り、風光明美、おして、有名の勝地たり、其れ  
 海内と清見瀉とす、即ち田子浦は西濱に當せり、此の日午後陰雲班駁、富  
 士岳何邊あると知らず、嗚呼富士岳の日東無雙の名山、予等數百里を  
 踏みく、此に至り、富士岳の半面とも窺ふ能はず、天何ぞ無情あるやと、か  
 まちつ、清見寺を打過ぎて、興津停車場に至る、此の地の右の所謂清見  
 關あり、已よして一嶺海小瀕しく屹立せ、之を薩陀嶺とせ、横さま小嶺下  
 を穿ちく、二陸道を造る、岩淵停車場を過るや、同乘某忽ち叔翁に告ぐて

曰く、君よ、よ、富士岳君等の遠行を慰する爲め、己に半面を顯はせ、予  
 乃ち叔翁と車窓より首を延して之を望む、唯々雲烟の茫々たるあるの  
 と、某又指示して曰く、彼、お在り、と、仰け、ば、則ち、半峰以上雲烟中より突然  
 としく聳え立ち、有るが如く、無きが如く、茫乎として、眼に、觸る、予、乃ち、呼  
 ぶて曰く、富士岳、己に、半面を、顯はせ、其の、全姿を、顯はさずして、可か  
 らんやと、富士川鐵橋を渡る、湍流迅疾、箭を放り、が如し、羽前最上川、肥後  
 球摩川と三急河の稱あり、甲斐よと來り、富士岳の西麓に沿ひ、南流して  
 海に入る時、不陰雲漸々と露れ、富士岳の三尖、玲瓏たる白雪を戴きて、蒼  
 穹を摩するは、狀、歴々見るべし、予又呼ぶく曰く、眞個に、一幅の、活畫、石火  
 山の所謂

白扇倒懸東海天

能く、狀すと謂ふべし、嗚呼富士岳の天地秀を鍾め、靈を聚る所以、  
 實に我神洲の一大鎮なり、直立一千四百丈、八峰並列し、四面其の  
 形を同じくせど、世界萬國中、巍々たる山、嶽無きよ、あらざるも、其の優美

に。く。愛。ま。べ。く。慕。ふ。べ。き。も。の。恐。く。と。我。が。富。岳。の。上。に。出。る。も。の。あ。ら。ざ。る。べ。し。鈴。川。停。車。場。を。經。く。富。士。の。裾。野。と。望。む。裾。野。の。廣。原。六。里。に。互。り。愛。鷹。山。其。の。間。に。屹。立。し。富。士。沼。其。の。麓。に。在。り。此。よ。り。南。田。子。浦。に。至。る。ま。で。を。浮。島。原。と。も。浮。島。原。を。見。て。ハ。梶。原。景。季。の。高。み。に。控。え。て。群。馬。と。視。流。し。屏。墨。に。増。る。ハ。無。き。や。と。嬉。しく。思。ふ。處。ハ。高。綱。の。僕。池。月。と。牽。き。來。れ。バ。景。季。安。か。ら。ぬ。こ。と。か。な。同。様。に。召。仕。る。景。季。を。佐。々。木。に。見。替。ら。る。こ。と。を。遺。憾。お。れ。我。寧。彼。と。刺。違。へ。く。鎌。倉。殿。に。二。良。を。喪。ハ。い。ゆ。ん。と。刀。を。扣。え。て。待。ち。け。る。を。高。綱。何。心。なく。歩。せ。來。り。智。辨。を。以。く。景。季。を。欺。き。物。笑。と。お。り。ト。事。や。又。富。士。沼。を。見。て。ハ。平。將。維。盛。を。始。免。と。し。て。其。の。夜。半。バ。か。り。富。士。の。沼。に。舞。う。け。る。水。鳥。が。何。よ。か。驚。き。けん。一。度。に。む。つ。と。立。ち。か。り。羽。音。ハ。夥。し。か。ど。ける。に。眠。り。と。覺。し。す。ハ。や。敵。ハ。寄。せ。さ。る。ぞ。取。籠。か。ま。て。ハ。叶。ハ。ト。と。取。物。も。取。回。へ。ず。我。先。に。と。落。行。か。る。こ。と。杯。を。想。ひ。つ。い。あ。る。中。に。右。小。當。り。て。濃。翠。綿。互。帳。の。如。き。と。觀。る。是。と。千。本。松。原。と。も。平。氏。の。亡。る。や。維。盛。ハ。子。息。六。代。執。へ。ら。れ。將。に。誅。せ。か。ま。ん。と。す。僧。文。覺。助。命。書。を。携。へ。單。騎。

鞭。を。揚。げ。て。馳。來。る。即。ち。此。の。處。な。ぞ。此。よ。り。沼。津。停。車。場。を。過。り。て。佐。野。停。車。場。に。至。る。富。士。岳。流。車。の。轉。輾。す。る。に。隨。ひ。漸。々。方。位。を。變。じ。初。め。岩。淵。を。經。て。富。士。岳。を。望。む。や。愛。鷹。山。と。富。士。岳。の。右。ハ。見。る。此。ハ。至。り。て。ハ。己。に。富。士。岳。の。左。に。有。と。富。士。岳。の。景。色。一。直。線。に。見。え。渡。り。氣。象。自。ら。豁。然。た。る。を。覺。ゆ。已。に。相。州。に。入。り。左。ハ。廣。原。と。見。る。右。ハ。兩。山。と。仰。ぐ。御。殿。場。た。や。ま。兩。停。車。場。を。經。く。山。間。に。入。る。一。溪。道。ハ。沿。ひ。流。水。石。を。縫。ふ。て。來。り。深。々。然。と。し。て。聲。あり。七。陞。道。六。鐵。橋。と。越。え。く。山。北。松。田。國。府。津。三。停。車。場。を。過。り。海。濱。小。出。る。大。磯。停。車。場。よ。り。平。塚。停。車。場。に。至。る。時。ハ。七。時。家。々。己。に。燈。を。點。す。次。に。藤。澤。大。船。戸。塚。三。停。車。場。を。經。て。一。陞。道。を。抜。け。又。程。谷。停。車。場。を。過。り。武。州。横。濱。停。車。場。小。達。す。港。内。艦。檣。林。立。燈。火。散。星。の。如。し。横。濱。の。我。邦。第。一。ハ。埔。頭。に。し。て。人。口。八。萬。九。千。灣。内。水。深。く。大。艦。巨。船。常。に。雲。集。せ。と。安。政。六。年。始。め。て。外。國。五。市。場。を。開。く。街。市。ハ。灣。の。南。岸。小。臨。み。北。ハ。灣。を。隔。て。神。奈。川。驛。と。相。對。し。灣。の。中。央。に。鐵。橋。を。布。け。り。直。ち。小。車。を。輾。し。神。奈。川。を。經。て。一。鐵。橋。を。渡。り。又。品。川。停。車。場。を。過。り。て。東。京。新。橋。停。車。場。に。達。

す、已九時、乗客皆汽車と下る、市質群衆を排き、停車場の口に至り、予等を待つ、是、小於て互に無事を祝す、此の夜と芝口田中客舎に泊り、仰も、汽車の物たる、一番、小蒸氣機關を据え、之、小次きて、乗室を二十箇、或は三十箇も、聯續せし、炎、上、中、下の三等に分つ、發車に至る、汽笛一聲、黒煙室に靡き、一瞬、數里、山川、往き、田畦、走り、風景、千變、應、接、暇、あ、ら、せ、人、を、し、て、快、を、呼、び、い、ひ、而、去、て、軌、道、を、人、道、と、異、に、い、東、海、道、の、如、た、大、抵、海、道、左、右、に、裏、手、なる、郊、野、の、間、に、通、せ、り、故、に、五、十、三、驛、は、狀、况、詳、に、領、する、を、得、ず、各、停車場、を、經、る、毎、小、車、吏、號、笛、と、鳴、ら、し、て、地名、を、報、ず、休、輪、僅、も、五、分、間、乗、客、已、に、待、合、ひ、新、舊、交、替、を、雜、沓、頗、る、甚、し、

東遊日乗卷の一終

東遊日乗中の卷

東肥 龍巷散史 著

十二日晴、朝食後、田中客舎を發し、鐵道馬車に乗じ、銀座通を經て、京橋に至る、此間の道路は、人道車道を分ち、松櫻柳を植ゑ、境界とす、人道は悉く煉瓦と敷き、又左右の人家と皆煉瓦造りよまき、東京隨一の良街あり、次に日本橋を過ぎ、神田通、萬世橋、小至り馬車を下る、日本橋の諸縣各港へは、里程と定むる起首にして、晝夜人行絡繹、府下第一の繁盛地たり、左折河に沿ひ、舊聖堂ある高等師範學校の前を經て、九時本郷區元町二丁目土屋某の家に着す、即ち市質の寓居あり、午後市質予等を拉して、上野公園、小遊園、内廣淵、小まき、杉樹、森々、天に聳え、一大池園は、西南位を擁し、山水の觀を供へり、園を忍岡と云ひ、池を不忍池と云ふ、櫻樹は、幾百章となく、園の左右、小群立し、芙蓉、幾千根となく、池は、一面を掩蔽す、若夫れ

春岡上に登れば、全園彌望、恰もは一團紅雲、惠風颯蕩、二芳香馥郁、  
たり、秋池面に入を、碧繼葉上紅白相繡、恰も是美錦、三如く、彩雲の如  
く、加之夏の納涼に適し、冬の觀雪は景あり、盛都紅塵の中にあり、  
四時の勝を鍾む、宜あま官此の區を修、四公園とあま、五而トて、教育博  
物館、勸業博物館、美術展覽會、動物園等、六設けあり、又處處に、茶亭、或は料  
理店あり、逍遙の間、隨意に休憩すべし、京中行樂の地少からざるも、實  
此の園を以て最第一とす、故に都人の遊樂常々絶えず、車馬の者も往き、  
杖履の者も往き、民僭に樂みて、其の大なるを知らざるが如し、春秋は候  
殊に盛んかりと云ふ、予等先づ不忍池の邊に至る、池の四周に木柵を繞  
らし、遊人群り擁せ、又中央に一大高樓と構へるあり、階上階下亦皆人な  
らざるのちし、市賣云ふ、本日ハ競馬の定期に屬すと、高樓に即ち馬見所  
なり、頃く頃く五六名紅白の頭巾と被り、馬上に鞭を加へ、一齊に走  
出で、各々先後しく輪贏を争へり、行く々々傍觀し、不忍池に沿ふて東照  
宮に詣る、東照宮の園の西にあり、木華表に入り、石階七拾四級を上り、又

石華表に入り、左に折るを、宮殿あり、壯嚴善美なり、明治六年七月東京  
府社に定めたる、社前に徳川氏三家、及び國持大名献備の銅燈數十基あ  
り、表鳥居と社前より一直線の地位ニありて、二百六十餘の大名より献  
納せし石燈籠數百基、兩側に排列す、又大石燈籠あり、高さ二丈餘、寛永八  
年佐久間大膳亮の寄進にして、日本三燈籠の一なりと、社旁の五層塔ハ  
朱塗にして、方五間、高さ十餘丈、此の他水屋、額堂、御供所等の如き結構あ  
り、本社ハ東照公の遺命より、元和九年藤堂高虎、天海僧正と議し、高虎  
の別邸を献し、忍丘に神殿を造立し、神靈を勸請せんことを建言せしよ  
り、造營あましものひて、正保二年に宮號の宣下あり、慶安二年、後光明  
帝宸筆の勅額を神殿に賜り、同四年、第三世大猷公更に本社拜殿を始  
め、勅額門を造營せたる、勅額門ハ慶應三年回祿に罹る、勅額ハ僅に免れ、  
今日東照宮の拜殿に掲ぐるものは是なりと、社前を横ぎり、杉樹森鬱の間  
を出れを、一望皆櫻樹、々下に茶亭あり、櫻餅を賣る、櫻葉を以て餅を包み、  
風味殊に佳かり、予等市賣と別を、動物園と見る、園ハ教育博物館の左方

にあり、珍禽奇、大抵畜養し、衆庶の縦覽に供す、其の一二を擧ぐれば、

- 象(北牡、暹羅國寄贈) ○シフバツ(黒龍産) ○鹿、虎(北、親の印度ベ
- ンガラ産、神田よて分産) ○ヤギ(北牡、西郷從道寄附) ○綿羊、○驢
- 馬、○熊(朝鮮産) ○猪(北牡、越中産) ○豺(北) ○琉球ガメ、○カラクン
- テツ、○シヤム、○ツル、○水牛(澳國寄贈) ○ムール、グ、(獨乙) ○テ
- ンヂク鼠、○大蝙蝠、○鶴、○尾長鳥、○オホカワホリ、○栗鼠、○珠數
- 掛鳩、○白鼠、○孔雀、○鶴、○鷲(富士産) ○全上、(北海道産) ○キンケ
- イ、○ハンカン、○高麗雉、○猿、○カンガル、

此より園は後ある寛永寺に至る、本寺の維新後は再設るまで、境内閑然  
固く門を鎖せ、抑も寛永寺の徳川氏累世墳墓の在る所に、開府の初  
め、亦藤堂氏の邸地を上地とあし、僧正天海命して、山を壘き、天台の梵  
刹一字を創建せしめ、西京の比叡山に比し、東叡山寛永寺と號し、伽藍根  
本中堂の巍峨として、深林は間お聳え、吉祥樓閣の屹然として、欄干蒼空  
に懸せ、回廊輪堂の鐘樓層塔と、金碧班斲、壯嚴の美、結構の麗、都下の寺院、

に冠し、加之三十六の僧房、薨楹相接し、丹彩交々輝き、劃然と去く一城の  
靈塲をなまぶるが、戊辰の兵火お罹り、全宇蕩然、憐むべき焦土となりし  
と云ふ、行く數十歩、東に向ひ豁然眺望せし地あり、淺艸區を眼下お見落し、  
萬戸の屋瓦、鱗次際を無し、時又夫婦手を携へて來るも、れり、予等の傍  
らお躡けて眺望せ、叔翁問ふて曰く、君等何地の人か、曰く伊勢の國な  
り、近年東遊し、淺艸區に住めりと、予が爲めに指示して曰く、彼の深樹  
蒼々として、且つ密なるの淺艸公園おし、薨瓦は巍然たるの觀音堂お  
り、尖塔は空お聳ゆるの五層塔おし、左方お白雲は起るが如きもの、  
木製富士あり、亦以て一遊の資と爲せ、足れ、己にして同人と別れ  
く、東南の隅に至る、兩大師堂あり、寛永寺の開山慈覺大師、並お圓光大師  
の像を安置す、都鄙群參殆ど虚刻ありと云ふ、櫻岡に抵き、美術展覽會  
あり、標札を掲げて云く、四月一日開場、同月三十日閉場、又追書して云く、  
五月十五日迄延期と、時己に夕陽、觀覽他日を期せ、去る、一坂を下り、不  
忍池の邊お出で、辨財天社に詣んとす、競馬未だ畢らば、觀者通路を埋む、



半途より之を望見、社の池の中央、斗出た處、石を、香渺、畫くが如く、岸に沿ふ、茶肆、酒壺、鱗、次櫛比し、天光、水色と相映、帶す、小西湖の名、海に、虚し、からざるに似たり、嗚呼、予已に、櫻花の候に、遅れ、而も、亦、蓮花の候、未だ、至らず、東台、一刻、千金の觀、の、向ながら、失ひ、空しく、追想し、ついで、千萬、の、遺憾を、抱きて、歸る、此は、夜本郷通の夜市を見る、両側に、飾り、連綿し、草花、の、黄紅紫、白、相銜ひ、一、層、の、美觀なま、

十三日、霧、午前九時、余等、腕車と馳せて、北豊嶋郡に至り、高田御邸に伺候す、此より、車と轉つて、牛込區市谷、陸軍士官學校の前を過つて、四谷區に入り、又、赤坂區に出で、舊、紀州邸たりし、赤坂假、皇居の旁らを経て、大久保、參議院、徒の、及、又、最期を、遂げし、紀尾井町に出で、麴町區に入り、新宮城南東の外郭を、巡覽す、道、舊、彦根邸たりし、參謀本部の前を経て、櫻田門に入る、水府浪士、井伊大老と一擊の下に、僵せし處、即ち是なま、己ふ、去て、車と下り、宮城正門、入口ある橋、際、に、抵る、橋、の、溜池、に、上、架す、世に、二重橋と稱せ、橋上、電氣燈を、設け、正門、に、左右に、の、衛兵、對立せり、城内、の、敢

て拜觀する能はず、遠く、宮殿、の、幾を、仰ぎ、見るのみ、外郭、に、結、搆、の、頗る、宏壯、威嚴、にして、城垣、若々として、若生、と、濠、水、碧、と、た、い、へ、て、細波、激、漚、た、ま、而して、西は、一大丘陵、に、據り、常磐、を、ま、松ケ、枝は、千歳、の、色を、保ち、東は、正門外、の、ひろ、か、た、る、平地に、臨み、其の、周圍、に、の、元老院、など、粉壁、峻、々、たる、官厦、あり、世、又、傳ふ、往時、康正二年の頃、太田道灌、江戸に、城郭を、興さん、とて、地と相するに、當り、某處に、足を、留めて、土人に、地名と問ひければ、此の邊、の、千代田村、祝田村、寶田村と云へると、答へり、道灌、の、手、を、拍ちつゝ、千代田と云ひ、寶田と云ひ、又、祝田と云ひ、目出度名の村々かな、城郭、の、此の地に、築くべしと、直ちに、三村に、かけて、經營と、始め、け、を、ば、所謂、庶民子來、不日、成之の、有様、を、て、長祿二年に、落成せり、是、今、の、宮城の、基礎、あり、其の後、小田原、北條氏の、番城と、さ、す、長祿二年の、新築、より、百三十年の、星霜を経て、徳川氏、關東に入り、此の、城、に、大破を、補理し、居城と、さ、す、世情一變、幕府將に、瓦解せんとするに、方、ま、あ、い、や、江戸城、の、官軍、に、爲めに、襲はれて、終に、一塊の、焦土に、歸せんとせしに、當時、官軍の、參謀、西郷、隆盛、急

に襲撃の命を止めしより、城郭の萬死の中に一生を得たるが如く、辛ふして其の姿を留めたり、此の他道灌れ新築以來、さしゝる戦争殺戮などのことなく、明治の新天地に移りて、此に皇居を定められ、其の後炎上の不幸ありしも、其の基礎の依然舊の儘ありしを以て、工事容易に竣功し、本年一月十一日、赤坂假皇居より萬民祝辭の中に鳳輦を還させらる、御溝の水、御丘の松と共に、萬世不朽の帝國宮城とあり、余等九拜敬仰之、久し、南行霞ヶ關を望み、陸軍教導團、外務省、魯伊公使館の前を過ぎ、午下芝區琴平町に出で、某店小就き、午飯を喫し、車を馳せ、愛宕山下に至る、歩いて支徑を上る、山上に西京愛宕神社と勸請せり、今公園地となす、茶店軒を併べり、後の樹木列立し、前の眺望悠長にして、東京三分の二の觸目の中にあリ、時に千里鏡を出し、喋々指説するものあり、予乃ち鏡に對し、規ひ且つ問ふ、曰く、西南に當り、芙蓉碧空に挿む如きもの、何ぞや、曰く、富士岳なり、北に當りて馬耳雙び聳える如きもの、何ぞや、曰く、筑波山なり、遠く内海を隔て、蛭起伏疊みて、波濤の如き

の、曰く、房總の諸山あり、近く府下まで、高樓大厦の屹然たる、曰く、海軍省なり、新橋鐵道局なり、新富劇場あり、三井銀行あり、第一國立銀行あり、驛郵便局あり、千歳劇場あり、淺草本願寺あり、余更ふ問ふて曰く、灣内處々相並ぶ島嶼の如きもの、幕府の築きたる砲臺なるか、曰く、然ど、江流一碧、遠く西北よ、來り灣内に注ぐもの、墨田川の下流なるか、曰く、然ど、問答未だ畢ふ、市謙促し去る、社前に石段あり、壁立六十八級、上より下は鐵索を張る、人之に縋して升降す、之を男坂と云ふ、樹木左右に聳え、坂頭を覆ふ、叔翁獨歩降り去り、意氣自若なり、又旁より石段あり、之を女坂と云ふ、其れ急なる男坂の如くあらす、坂下に石華表あり、車此に至り待つ、乃ち又轉輪して三線山増上寺に至る、増上寺の關東淨土宗總本寺にして、人皇百一代後小松院の勸願により、大蓮社西譽上人の開基、中興の普光觀智國師にして、徳川氏廟墓の地あり、本寺も堂宇屹然美麗と極め、數百は學寮軒を交え、支院三十餘宇あり、一大寺院なりしが、本堂は祝融の災に罹り、烏有とされ、境内頗る廣くして、深樹蒼々

其の背を繞り、本堂は已に再建せしと雖も、舊觀に復する能はず、本堂の右に、有章、惇信二公の靈殿と、文昭公の靈殿あり、本堂は左に、廣大、台徳二公の靈殿と、東照公の祠あり、余等北門より入り、先づ有章、惇信二公の靈殿に至り、寺僧に請ふて、殿内を見る、其の結構善美を盡くし、彫刻彩色の巧み、殊に眼目と驚かせり、寺僧前導し、一一説示す、其の他各靈殿も、寺僧に請へり、縦覽するを得る、然れども大同小異、其の一を見せ、他を類推すべし、故に各靈殿の外部の結構のみを見つゝ、東照宮に詣り、社の左に丘あり、緑樹背を覆ひ、花木腰を繞り、小坂蜿蜒して頂に達す、頂上に西京丸山稻荷を祀る、茶店數椽、丘に架して、庵を開き、遠廓眇忽、人を去く心惚び目怡やしむるの觀あり、日方に下り、春く、予等頂を登らざして去る、華表を出で、本堂前なる山門の外を過ぐ、山門の東、而し、其の壯大の東都に冠たり、門前に松樹横逸し、枝を交えり、今や境内方五丁許、草莽を開き、或と高塙を崩し、縦横に新道を通し、逍遙散步の場となり、昔時に比すれば、稍々繁昌の地とみれりと、所謂芝公園是なり、園旁は東京府

勸工場あり、場内廣く、縦横に曲折し、陳列する所の千種萬品、我の得んと欲するも、一と去る有らざるの如く、荷くも此れ内に入れば、東京土産も立る、小調ふを得べし、府下勸工場の如きも、少からざるも、本堂を以て第一とす、余等勿々巡覽して出づ、直ち小車を馳せ、裁判所、鹿鳴館、印刷局、内務省、大藏省、農商務省、文部省等の前後を経て、九段坂に抵る、叔翁先づ車を下り、坂を攀ぢ、毫も沮色か、去、車夫相附つて、曰く、嬰、鏢たる哉、此れ翁、猶ほ能く一方は將、小充つべしと、坂頭に靖國神社あり、維新前後匪躬の節を盡くせし者の亡靈を祀る、俗に云ふ招魂社是なり、銅華表に入る、華表高さ五六丈、前は石燈籠、兩基對立す、右は揚輝、左は照闇、其文字を鐫る、社殿に至る、殿宇宏偉、内は一大神鏡を安ず、一拜して社旁を見せ、巧み、小園池を製し、園は花明か、小樹美しく、池は水清く、魚躍り、風致最も佳なり、境内は遊就館あり、古今の武器を藏す、日本水兩曜に縦覽するを得る、他日に譲り、車を驅りて去る、寓小達する比、已に點燈、此の夜市中を散歩す、

十四日天氣濛々、再び上野公園に遊ぶ、道本郷六丁目と過ぎ、帝國大學、及び第一高等中學校と見る、大學の舊加賀邸にあり、不忍池に至り、池沿ふて辨財天社と詣る、社前小石橋を架き、之と渡り門に入る、左に佛の銅像あり、右に護摩堂あり、又銅造の琵琶を倒し石臺の上に据え、表面に縁山と記き、山岡鐵舟の筆、石臺小琴三講社の四字を鐫る、明治十九年琴三講社の發願により、献納せし所なり、本社に額を掲げ、天龍山辨財天と曰ふ、寛永年間僧正天海近江琵琶湖の竹生島小擬して、池中に小嶋を築きて、辨財天を安置せりと、巡りて社背に至る、佳樹列立し、芭蕉の碑、其の間に在り、余等石に踏みて、樹間より、不忍池を望む、宛然身の畫中の人に、似ふと、己にく此を去り、櫻岡に至り、通券を求めて、美術展覽會場に入る、其の尤も珍品に属するものなり、

- 山水屏風、(傳云周文筆、毛利元德出品)○地藏畫像幅、(巨勢金岡筆、原善三郎出品)○千鳥香爐、(徳川義禮出品)○四季山水畫幅、(傳云李龍眠筆、井伊直憲出品)○片輪車手箱、(松平忠禮出品)○香盒、

- (毛利元德出品)○御厨子、(全上)○黒棚、(全上)○辨財天畫幅、(探幽筆、松平親良出品)○馬畫幅、(巨勢俊久筆、福岡孝悌出品)○設色山水畫幅、(其尙親王贊、土佐光起筆、田中信行出品)○人丸畫像幅、(飛鳥井雅章贊、全上)○觀音畫像幅、(巨勢金岡筆、前田恒太郎出品)○人物屏風一雙、(古永徳筆、佐野常民出品)○蓮畫幅、(探幽筆、水野忠弘出品)○水墨山水畫幅、(元信筆、全上)○山水畫幅、(元信筆、全上)○雪中山水畫幅、(竹洞筆、出品者不詳)○四季山水畫幅、(大雅堂筆、鈴木利三郎出品)○睡猫畫幅、(在明筆、出品者不詳)○鹿嶋踊屏風一雙、(一蝶筆、全上)

見畢、會場と出で、園内を逍遙し、偶々大佛と見る、所謂上野の露佛是あり、尋で彰義隊戰死の塔を見る、願ふに今を距る二十餘年、上野一帶櫻花錦繡の地、何を圖らん、戊辰の修羅場とならんとは、當時彰義隊の徳川氏は、城地兵仗を納るゝを大恥とし、慨然藉を脱ぎて、此地小據り、祖宗の廟を守り、輪王寺に宮を奉て、官兵小抗去、終小敗を取、肝腦地に塗る、

官兵其の屍を聚めて、園の一隅に埋む、其の後某々等官許を得て、普く献金を募り、其れ埋地に就きて寶塔と安き、即ち是あり、嗚呼、徳川三百年の覇業、其の亡滅、不常ぞ、や、能く拒戦死と致すもの、唯、彰義隊は、一黨あるのみ、此より公園を下り、下谷區に至り、某店より小憩し、又公園より上り、櫻岡を過ぎて、明年を以て開設せる第三回内國勸業博覽會々場を見る、工事稍々緒お着くもの、如し、博物館に抵る、博物館は輪王寺宮に舊地おし、煉瓦造りの一大館なり、館の表門は舊門おて、更に博物館は三字を畫する類と掲げり、門に入れを、館前お一大圓池と作り、池中に噴水器あり、噴水飛騰晝夜絶えせ、而して、雜木衆艸、館外を擁し、四時花は開かざる日無しと云ふ、余等通券を求め、館内お入る、毎室は間、長架重層し、低欄曲折去、古器新珍、雅俗和洋とに論さく、凡そ天地間は萬物、網羅遺を無く、整齊陳列し、人智と實見に長せまむるの益、蓋し亦大あるものあらん、予匆卒の間、其の概要を記し、他日の記憶に供す、

○第一室、大鼓、神田重助製) ○第二室、農業山林部、農馬具類、動物、造

具類、有益動物、有害動物、有功動物、蠶種類、生糸類、赤白珊瑚樹類、油類、○第三室、全部、植物圖類、諸木片、炭類、淡藥類、艸菜類、竹類、染料、硝皮料、油蠟脂漆類、纖維及紙料、藤細工類、畜類、食料、澱粉及元質、游娛及香料、穀菽及製品、蔬菜及鹹菜、食用菌、菓類、有用水藻類、香蕈、○第四室、全部、木材類、植學用花葉根幹放大摸形、○第五室、天産部、サヘゴ類、海艸海綿類、海魚類、海石類、介虫類、蟲類、貝類、貝肉類、蝶類、○第六室、全部、貝類、○第七室、全部、諸蟲、蜂、巢類、○第八室、全部、魚類、虫類、介虫類、龜類、鳥類、○第九室、全部、鳥獸類、鯨骨、(長さ十三足強)熊類、猿及蝙蝠類、(天竺産)虎、(亞細亞産)九雀、地球上人種畫像、(亞細亞各地人種、南海諸島人種、亞米利加各地人種、歐羅巴各地人種、阿弗利加各地人種)

以上二階下右

○第一室、工藝部、電信測量數學醫學諸品、時計及製造順序、支那製時計、絹織物、組紐、粧飾、携帶諸品、剪採花、及玩弄物、毛織諸品、帽子、羊

毛見本、○第二室、全部、日用雜品、○第三室、工藝藝術部、各種織物、銅花瓶、彫刻品、○第四室、藝術部、金銀銅鐵彫刻品諸器、○第五室、全部、更紗類、諸織物、器物、○第六室、全部、石刻類、金屬彫刻、嵌鏤品、硝子製品、寶石見本、○第七室、全部、古樂器、舞衣、茶器、盆石、蹴鞠、燒物製、○第八室、史傳部、能裝束、狂言面、能樂面、檳榔毛車、腰輿、風箏、幕府船、天地丸、麒麟丸、雛形、○第九室、工藝部、古金銀貨、扇面、洋額、衝立類、○第十室、史傳部、大名內室所用、大名用品、女乗物、○第十一室、全部、甲冑、刀劍、馬具、槍弓矢、○第十二室、全部、古衣裳類、○第十三室、全部、法隆寺獻納諸品、○第十四室、全部、清涼殿御帳臺、御冠、御袍、御下裝、○第十五室、全部、法隆寺獻納物、諸紙幣、○第十六室、全部、雛類、初岡諸品、古器物、○第十七室、全部、德川氏軍用金塊、(厚さ五寸、堅一尺許、表面に行軍守城用、勿作尋常用、萬治貳年正月に文字を鐫る)刀劍類、堀出古物、(肥後玉名郡内田郷江田村、池田某所有地より堀出せしと云ふ古物、亦數種あり)

以上二階上

○第一室、工藝部、本邦及西洋各國陶器類、○第二室、全部、建築用材、瓦、鐵具、室內粧飾品、家屋土藏、建築雛形、諸工機械雛形圖說、皇居謁見所、試製雛形、宮殿粧飾見本、天守閣雛形、舊小田原城雛形、○第三室、史傳工藝部、古瓦、大嘗宮諸殿舎雛形、○第四室、史傳部、支那人形、米國土人所用品、北海道土人所用諸具、支那物品、朝鮮物品、沖繩物品、獨逸領ニユ一ブッテン島土人所用品、台灣人所用品、埃國兵裝諸具、○第五室、工務局諸品、○第六室、陶器類、

以上二階下左

歸路雨大に至る、乃ち倉皇車を馳せて去る、十五日午後雨歇む、本日の水曜に属せ、乃ち市謙と共に九段坂靖國神社より詣り、遊就館の古器物を見る、其の重きあるもの、  
○第一室、名護屋城天守雛形、慶長十五年本城建築の際、製作せしものと云ふ、○第二室、難波沿革古圖、古今鐵砲類、(加藤清正朝鮮分

取の品あり(一)第三四五室、鐵砲彈丸類、熊本籠城の圖○第六室、西洋各國製鐵砲、古代甲冑、馬具、○第七室、全上、朝鮮元帥の甲冑、立花、宗茂朝鮮分取の甲冑、○第八室、有栖川宮初め、方今各武將の油繪、頼岡崎城郭の雛形、刀劍具、○第九室、拔身の槍并刀、拵付れ刀、眞田幸村の甲冑、木製製の馬お馬甲と着せしもの、宇多勝國の刀、小乱及、五尺九寸一分、今と距る四百年の物と云ふ(本多平八郎の野太刀並お矢、三箇眞田幸村所持拔身の振、備前勝光、宗近兩名の作)○第十室、佐久間象山の佩刀、加藤清正の槍、平三角長さ四寸六分、父清忠、清正の爲めお作りて與へしものと云ふ(拵付並に膚身の刀、後醍醐帝より楠公へ賜り、短刀、(月山作)鐵笠、(宮内省出品)備前景光刀、(稻剪と號す、長さ二尺七寸五分、金ネ二分半、反り六分半、亂焼樋あり、細川忠興公の所用にて、本多政勝へ贈與ありしもの、傳に云ふ、稻を負ひし野夫無禮と爲したるゆへ、忠興公一刀に斬りたまへは、稻共お見事お斬れしゆへ、稻剪の號ありと)水戸烈公

の作一振、會津正之の甲冑、茅野和介の矢、七個齋藤立本の甲冑、井伊直政着用摸造の赤具足、○第十一室、伊勢神宮神寶の影打大小鉢三本、(長さ壹尺六寸五分、全壹尺、全九寸三分、兼次作、徳川三河十六將の一人服部半藏お大身槍、長さ五六尺、鋒の折共にあり)長曾我部元親お槍、(秀吉より賜ふ所と云ふ)安南國武器類、

十六日曇、午前十時余等三車を連結て、湯島天神社お詣る、社へ太田道灌お創立と云ふ、一拜して去り、下谷區を過ぎて、淺艸區に出で、十二時金龍山淺艸寺お至る、本寺お千有餘年お古刹おして、境域最も廣く、東京六公園お一どなる、觀音堂お正南お面し、堂宇十八間四方にして、玉繩寶帷、金碧相映す、内に一寸八分お尊像を安置し、燭光赫灼として、香火お氣亦自ら人と蒸蒸す、堂前お仁王門あり、丹碧交々輝き、東位お淺艸神社あり、華表外に二天門、又輪藏、五層塔、雁行並び立つ、五層塔は高さ十餘丈、尤も壯觀あり、西位に虚空藏堂あり、堂前の二小祠に、惠比須、大黒二神を祀る、弘法大師の作と云ふ、一小池、其の外を擁し、石橋之に架す、又、一大池、お、長

橋其の上に誇り、蜿蜒龍蛇の如し、蓋し竹を編みて之を造る、名けてさる  
はいと云ふ、池邊に佳花、美木を列植し、自ら四季の觀あり、就中梅、櫻、柳、  
楓の如き、殊に多く、春の芳雲、秋の彩霞、一層愛すべきの風致を呈せん、念  
佛堂の本堂の後、數十歩に在り、其の他六十六佛堂、釋迦堂、地藏堂、青板石  
の古碑あり、碑面に釋迦像を刻む、今を距る七百餘年、鎌倉將軍頼嗣に仕  
へし鎌田三郎入道西佛の建る所なりと、仁王門と出づれば、左に傳法院  
あり、當寺の本坊にして、巍然たる淨舍なり、右に二露佛あり、佛に隣る石  
像を久米平内と云ふ、元祿年間、人にて捕吏たり、在世の罪消滅の爲め、  
己の像を石小刻み、後世に遺せしと云、旁らの辨天山と云、天女廟を安ず、  
又鐘樓あり、晝夜時を報ず、東西十八の子坊と軒を併べ、東なると正智院、  
吉祥院、長壽院、妙音院、壽命院、無動院、法善院、金剛院、智光院、是より西なる  
に梅園院、勝藏院、延命院、實相院、自性院、金藏院、觀智院、醫王院、日音院、是な  
り、昔に雜商其の廡下、小肆を連結しが、明治十八年の秋、洋風に摸し、煉瓦  
石を積みて、二層の樓閣を設け、一棟の長さ概十間にして、二三の肆店

を開く、各棟連続し、毎戸繁榮、争ふて新品を飾り、競ふて奇物を列結、舊よ  
比まれ、一層の面目を加へると、而して園内各處、茶舗あり、寫眞店  
あり、蕎麥庵あり、楊弓場あり、洞窟亭あり、或は藥師の花園あり、門に入  
れを、千花萬草、奇を闘ひ、玄異を競ふ、青の愈々、青に紅の愈々、紅も亦、  
架上に陳し、石莖の石に粘りて、三寸秀で、蟠松の竹も傍ふて、一尺抽んづ、  
万年青は不老の壽と保ち、百兩金の子孫の富を表するに似たり、現んや、  
梅の清潔、牡丹の富貴、菊の隱逸、各々其の時を以て、錦綿雨も織り、綾羅風、  
に飄る、而して五層の樓閣あり、奥山閣と名けて、休息所も充ち、其の結構の  
美なる、遠く望めば、人目と炫耀するが如し、世に稱し、花邸と云ふ、抑も  
金龍山淺艸寺の本尊、觀音大士の往昔、推古天皇三十六年三月十八日、  
宮戸川より漁父の網に罹りて出現あり、當時神童相集ひ、梨を以て堂を  
營み、尊像を安置せり、其後、孝德天皇大化九年、勝海上人更に一寺院  
を興し、女德天皇は時、慈覺大師更し規模を大にし、法教と敷行を爾來  
帝王相將の崇敬厚く、時々田園等の寄附あり、徳川氏の世も至り、寺



領五百石境内拾壹万三千餘坪と有するに至れり、又伽藍の如きの數度の同祿に罹ると雖も、其れ都度再興あり、現在せる堂塔れ如きの徳川第三世家光の再建不係る、都鄙に賽人晝夜絶えず、都下香火の地、實に本寺を以て第一とす、予等已に境内と巡覽し、西折して外郭に出づれば、活入形、手品、輕藝、其の他諸凡の技と售るもの相聚り、熱鬧湧くが如く、其の間屹然と蒼空に聳え、形ち紫螺、不摺、碧嶺を流したる如く、半は白く、半は淡黒なるものあり、予乃ち車夫に問ふて云く、彼の何ぞや、曰く、淺艸の木製、富士なり、頂上より四望をば、豁然として、都下の繁昌、目中に萃る、登臨する者、日に數百人、夜間と電氣燈を點し、尙ほ客を招く、實に近來の繁昌、おて頗る巨利を占めり、壇那若、宏意あかむ、試みに登臨して、一興を爲さる乎と、予曰く、然り、然り、去日、上野公園より白雲の起るが如く、見えたる、果しく是れなる乎と、至り見をば、木屏を繞りて、一場を設け、場は正面、又丈餘の燈籠を並べ立つ、恰も銅燈籠の如し、蓋し、聖土製なり、所謂、富士の木と搦へ、竹を聯結、く形と摸し、塗る、白聖を以てす、高さ、十丈、八

尺板を敷きて、登降二路を造る、予等登料を投し、曲折紆迴し、登る、市謙目眩き心慄き、未だ頂上不至、かすして、下り去る、予叔翁と漸く頂上、不達を、頂上に觀望臺の設けあり、已不登上より四方を望んとする時、しもあむ、大雨俄不至り、強風俄よ起る、將に一身を吹き去らん、とす、是に於てや、復た曲折紆迴して、匆々下り去り、遂不眺望を畢らせ、己む、某亭に至り、午食を喫し、又車を馳せて、淺艸寺雷門跡を横ぎり、吾妻橋不至る、吾妻橋は墨田川に架せる、東京第一等に位する鐵橋にて、廿年十二月の竣功なり、西の淺艸橋にて、輪蹄塵を飛ばし、東は墨堤に、く水樹瀟灑、仙凡の界、此の橋と以く、全く分る、橋の下流、舊と宮戸川と稱す、即ち淺艸寺の本尊出現ありし所、あり、橋を渡り、車を下り、く沿養園に入る、園廣さ、數百畝、亭前に一大池あり、清泉泌沸、假山其上、お峙ち、嘉石、參差、奇樹、其の間を、縫ひ、或を池中に出嶋を拵へ、或を出嶋に、石梁を架し、石燈籠を各處に點在し、躑躅花の一時に爛發し、鳥聲、啾々として、水聲、珊珊々々、一小園丁の目營心匠に出づると、雖も、已ふ幾多の星霜を経て、稍々天然の風趣を存

せり此れ園の元と幕府は執政水野越前守は所有して蓋し其れ望み厭  
かいて製作せるもれあま其の後佐竹家に譲り今高野山の所有とな  
れど子等假山泉石の間と道遙しく後門に至る車夫己に車を控えく  
待り乃ち車輪を帳かしく枕橋を過ぎ墨田川に沿ふく上る墨堤壹里許  
兩畔皆櫻樹三圍の里を經く堤稍々舞狀を爲去長命寺に至り一折す櫻  
樹最も多き處たり樹々枝を交え葉を接し香と去く際涯無きが如し想  
ひ見る花候方お至れば蜿々長堤一望花きららざるに無く雲あど怪  
めハ雲おあす雪あると疑へる雪にあふ淡紅濃白歩に隨ひ人に媚ひ  
遠き者招くお如く近き者語るらんと欲し況んや滾々たる清流に  
たる碧崎の左右に映帶し西南に芙蓉の尖兀萬仞なるを仰見東北に  
と筑波の秀黛拭ふが如きを望み其の景狀の絶觀たる低徊望去る能  
に都に於ける墨堤を第一とす上野の單澹紅ある彼岸櫻の如きは東  
に其の下に位す故に平日の幽邃閑靜にして鳥啼き魚遊ふも花時  
則

ち都人士女先と争ふて出遊し或ハ雅人の紅袖翠環を携へるわ  
貴客の嬌人侍女を伴ふあり八將公ハ黒帽銀筥にして貧書生ハ短衣高  
履あり兵隊ハ洋服瀾歩に馬車に乗り或ハ自轉車を輾かまわす而  
り或ハ馬小跨るあり或ハ馬車に乗り或ハ自轉車を輾かまわす而  
して茶肆の花下に露牀を設けて氈席を展べ櫻花湯を賣るあり櫻餅を  
鬻くあり又酒を煖免蓋を倚むるあり其れ趣向一ならん花時の雜沓亦  
東都の第一なぞ子之を聞き忽ち謂つて曰く咄紅塵十丈此れ櫻花と此  
の墨水を汚がす嗚呼是眞小厭ふべきなぞと時己お車轡々として木  
母寺お遠き木母寺の墨堤盡く處お在り境内お梅若社お殘柳一株  
僅ま古塚を蔽ふ碑石點々歌或は發句を刻し吊意を表するわ世に傳  
ふ梅兒と京師の人吉田惟房の子あま人の掠賣する所とあま織弱籠楚  
お堪えず此に至り遂お死す時に貞元元年三月十五日あま土人憐みて  
之を葬り標をるに柳樹を以てす其れ事史傳に見えざと文明中萬里  
居士の著る梅花無盡藏と云へるお載せられたれは其れ傳亦已は久

い、毎歲三月十五日、微雨あれば、主人之を涙雨と謂ふ、或人の句に、

黃昏一片、驟雨、偏向王孫墓畔多。

と、嗚呼梅兒一少年、敢て世に功あるに非ず、獨り凶手を斃れ、花下骨を埋めて、魂魄尚ほ香しく、永く世の美人才子をして吊らしむ、亦何を幸なるや、余聞く墨堤と小田原北條氏の時築く所にして、徳川第八世吉宗始めて櫻桃柳三種を植ゑ、里長命じて之を護らしめ、随つて枯るれば随つて植ゑ、桃柳己に種を絶ちて、櫻獨り盛んあり、天保中水西川口樓の主婦亦嘗て秋色の寂寞と憂ひ、資を捐て、楓數百株を植ゑしも、今一一株の存せるものなく、遂に櫻花をして美を擅ふるに至らしめたりと、墨水に瀕して名所多く、世の稱する所と列舉すれば、廿四景と得る、曰く東橋の曉、曰く嬉林の酒旗、曰く枕橋の春月、曰く筑波の秀黛、曰く三圍の驟雨、曰く待乳の夕陽、曰く牛祠の新緑、曰く長命の晴雪、曰く弘福の香煙、曰く秋葉の霜楓、曰く柳圃の蟲聲、曰く蓮華の斷碑、曰く寺嶋の梅花、曰く白鬚の松籟、曰く橋場は浮鴈、曰く水神は涼颺、曰く梅塚は殘柳、曰く庵崎は。

暮霞、曰く丹頂は芙蓉、曰く綾瀬は遠帆、曰く鐘潭は秋月、曰く牛田は歸馬、曰く關屋は寒草、曰く墨堤は櫻雲。是なり、予等一一其れ境を探討する能はず、轍を回し舊道を取り、墨堤に沿ふと東に下る、矮松行と成し、中一徑を通ず、是を三圍社と名、社南に其角堂あり、俳歌師永機の建る所と、古雅簡撲、瀟洒愛すべし、社側に碑を立つる頗る多し、彼の其角山人の

ゆふだちやたをみめぐりのかみならば

の秀逸の神も其の至誠を感應あり、まよや、塵々十七言の功德を以て、倏ち油然雲を作り、沛然雨を下し、則ち苗勃然之に起るの爽快ある結果と顯らし、幾百蒼生の眉を開き、美名を末世に遺し、り、車を轉じ、葛飾郡ある村落田疇の間を、或は南し、或は東し、一小流に沿ふと龜戸村に至り、天満宮に謁せ、本社亦正南に向ひ、社殿甚だ大なるも、締拂精整、殿宇も龜戸神社の額を表す、階を歴ぐ殿上る、殿内静肅、神威あるを覺ゆ、神前亦一額を掲げ、赤心方寸惟性幣の七字と書す、三條内府は筆、筆法適美にしく、墨色濃潤たり、社殿の前に、小社相對す、一は老松社と云ふ、一は紅梅

社と云ふ此より直徑數十尺を経て樓門あり、瓊門と云ふ額堂其の左右  
 あり、宛も鳥は兩翼を張るが如し、瓊門と出づれば、一大池にして、水、緑  
 又魚躍、池の中、二小島あり、木橋、圓曲形に、瓊門より、第一島に、跨る、次に、  
 石橋、直線形に、第一島より、第二島に、亘り、又、木橋、圓曲形に、第二島より、池  
 塘に、跨る、蓋し、太宰府、天満宮に、大鼓橋に、摸する、あり、而して、池、は、四、周、の、  
 皆、棚を、架し、藤、蘿、架上に、縱、横、延、蔓し、紫、花、點々、珠と、綴り、千、條、萬、垂、參、差、艶  
 妝を、競ひ、窈、窕、嬌、態を、盡くす、家、君、藤、花、は、吟に、

連珠露滴垂如落、  
 婀娜態從雨霽、

流冕風翻亂欲飛、  
 嫵妍嬌態逐春歸、

ど能く此眞景を寫すと謂ふべし、處々に茶店を設け軒半の棚上に架し  
 紫藤花を軒内に取入れ且つ軒頭に張燈を連下し故か小風姿を飾り  
 客を引く余一店に入ると茶を喫し境内の圖繪を求め再び圓曲橋上へ返  
 り佇立して社殿に而して望む左右前後紫藤花をあらざるの無く花影  
 水面に落ち水亦紫色を帯べて殊に第一島に末社を祀り作木を植ゑ

るあり第二嶋に白藤花亦架上よりまた古松偃蹇龍の蟠るが如き  
 あり而して三個の橋梁一層は風致を添え宛然圖畫の如く余をして戀  
 々已まざらむ當社の寛文二年十月廿五日の創建にて法印菅原信祐  
 の開基なり初先信祐諸國を遍歴し遂に武州葛飾郡に至り龜戸村に古  
 來存在せる菅神の古祠を村長小乞ひ假りに社殿を設けて奉仕せり爾  
 后信徒日多、當時の將軍家より新に荒蕪の地を賜はる、後數年を経  
 て、其の地、筑紫太宰府に摸して宮殿を造營せ、今の本社是なり、境内の  
 東北、小尊意社あり、御嶽山の額を掲ぐ、比叡山十三代の座主尊意阿闍梨  
 の靈を祀る、其の他花園社、白石牛龜の井戸、筆塚あり、花園社の菅公の北  
 の方、並小公達の靈を祀ると、土人云ふ、梅屋敷此を距る一二町、臥龍梅あり、  
 老幹鐵枝、幾百年の物あると知らずと、金烏方に傾くを以て行かず、表  
 門を出で車と飛べして龜戸村と去り、右折松代丁小田で、本所區小入り、  
 某園の牡丹を見る、園内稍々廣く、縱横に區劃して、牡丹、或は花、菖蒲を、群  
 栽す、牡丹花、己小零落し、花、菖蒲、の、候、未だ、至らず、目と放て、心、管々、滿園

蒼々たるを見るのみ、時に天頻りに雨意を催す、勿々園を辞し、己に元丁なる同向院に至る比、大雨盆を傾くるが如し、乃ち車を下り、同向院の門内に避く、本院の明暦三年の大火に焼死せし十万余人の迷魂供養の爲め創立せし所に、豊國山無縁寺と號す、本堂の左右は、阿彌陀佛の銅像を安す、三佛堂、辨財天祠、圓光大師の坐、及び鼠小僧の墓、亦境内に在り、鼠小僧の墓の香火常絶えず、蓋し鼠小僧陽に盗名を博すると雖も、其の實一身の私欲に非ず、諸人の窮厄を救ふ一点の義侠心より出づ、故に陰徳の積む所、世に捨てられざるもれあるか、毎年兩度勸進相撲あり、今亦興行中に係る、觀客常に塙を埋め、立錫の地なりと云ふ、頃くありて雨稍々歇みぬ、又車を馳せて兩國橋に至る、本橋の舊と武蔵の堺に屬す、故に兩國は名あり、萬治三年は創架して、明治八年に改架す、長さ九十餘間、人行絡繹、諸橋不冠とぞ、毎年五月の末、川開きと稱し、煙火戲あり、觀者群集し、近傍は舟宿之が爲めに巨利を得ると、橋を渡り、吉川丁の廣小路に出で、益々西す、叔翁は、乘車、誤りて、轉覆す、叔翁、驕然、車外に直立し、旁人

覺えず、喝采を發す、叔翁、竊に語笑して、曰く、是、青年、講武の餘、徳なりと、神田區に入り、神田神社に詣つ、地勢高峻、第一華表入り、石礎數十級と攀ぢ、第二華表に入る、樓門あり、門は矢大臣、及び白黒は製馬を据えり、社前に至れば、二個は巖塊對立し、上に石刻の唐獅あり、左右相睨む、手工眞に通る、本社の大已貴命を祀る、規模宏壯、府下の一大鎮社なり、神前小神田大神は額と長さ五六尺は拵太刀を掲げり、將門神社の本社は左にあり、平將門を祀ると云ふ、右に社務局あり、舊と徳川氏の守護神なる永田丁の日枝神社と隔年の祭奠にて、相頷して頗る賑ひへるとぞ、六時三十分五分寓に歸る、此は夜講談場に至る、講談師交互演壇に上り、得々然と口角を尖らし、人情談を爲す、音調拙劣、耳を煩ひすに足らず、予等場を畢らすして去る、

十七日曇、午前十時卅分、市議と同行して、萬有館に至り、物品陳列を見る、尋る上野公園ある教育博物館に至る、亦結構壯麗なり、専ら教育上に係る品物と網羅し、縦覽と許す、構内に東京學士會院、並に圖書館あり、學士

會院の毎月日を期して學士の講演あり、圖書館と古今萬國の圖書を藏す、借覽或の騰寫を許す、予等通券を求め、先づ教育博物館を見る、館内不陳列せる品物の概畧、

○第一室、寫真並に教授圖、昌平校講堂摸形、實物教授用掛圖、(獨逸刊行)有用動物示教圖、(英國刊行)工業示教圖、家庭玩具、幻燈映畫、農事圖解、(博物館出版)幼稚園玩具、職業示教圖、(獨逸刊行)生徒製作品、幻燈器械、實物教授用具、○第二室、物理器械、○第三室、全上、○第四室、艸花標本、○第五室、動物摸形、第六室、金石類、輝安質、母尼鏡、伊勢國新居郡市の川鐵山の産、(黃硫銅鐵、阿仁鐵山局贈付)○第七室、動物摸形、小學生徒手製作品、

以上二階下

○第一室、書學用摸本、○第二室、氣象器械、星學器械、地學用具、○第三室、各國製卓子、○第四室、金地佛書函、(暹羅國寄贈)○第五室、木工器具、旋盤製作品、佛國小學生徒製作品、和蘭國、職業學校生徒製作品

品、○第六室、外國學校生徒製作品、

以上二階上

又圖書館に至り、通券を求め、縦覽場に入る、或の書を開する者あり、或の字を寫す者あり、或の目錄を調べて書籍を請求する者あり、余亦二三本を借覽して出づ、時に午後二時卅分あり、市謙館外に在り、鶴首不堪えず、先ち歸る、予下谷に至り、車を買ふて日本橋區に出で、蠣殼丁を過ぎ、水天宮に詣る、門を鎖せ、社内に入るを得ず、直ち永代橋に向ふ、馳せ、永代橋の墨田川の下流より、内海に接する所にあり、元祿元年に創架にて、明治八年に改架す、長さ百四間あり、此の河に架せる橋凡そ五つ、最上流なるの即ち吾妻橋にして、次を麻橋とせ、次を兩國橋とす、次を新大橋とせ、次を永代橋とす、而して、永代橋に至れば、兩岸尤も濶き、故に五橋中、第一長橋たり、橋を渡せば、則ち深川區とせ、車已に不動堂に至る、兩旁に茶肆を構へ、饗客常に絶えき、富岡八幡社の不動堂に隣り、社殿横長にして、太だ高からせ、舞殿あり、樂殿あり、社前の大鳥居あり、高く社宇の上

又出づ、余一拜して境内を見る、境内の亦六公園の一にして、池を穿ち橋  
 を架し、花樹數百株を植ゑり、本社に鎌倉鶴岡八幡宮を勸請せしむれよ  
 て、足利氏及び太田道灌は崇信せし所と云ふ、已に樓門を出で、車を馳せ  
 て去らんとき、偶々雨大に至る、乃ち雨を侵して洲崎辨財天社に詣り、社  
 此右旁に長堤あり、海に瀕し、東西小丘、天氣霽るれば、房総の諸山一  
 目小在りと、蓋し亦一勝地あり、雨益々強く、已に傘を張る能はざり、乃ち母  
 衣を穿ち、猝々車を回らし、再び永代橋を渡り、小網丁に至り、鐵橋を見る、  
 本橋の鐵橋よて吾妻橋に換して造れり、世説に此の地往古の海濱にて、  
 八幡公東征の時、風波荒く渡り難きを、龍神に祈誓し、鐵を海底に沈め  
 られし古跡と云ふ、舊とて鐵の渡しと云ふ舟渡ありしと、此より日本橋に出  
 で、萬世橋を経る、時己に四時あり、雨夜又入り、猶ほ臥せ、  
 十八日晨起、窓を開けば、天色藍の如し、叔翁曰く、好天氣、日光行、今日、借  
 り、將た何の日ぞと、予等即ち之に應じ、忽々結束し、寓を出づ、腕車を驅  
 る、上野停車場に至り、乗券を購ひ、午前六時四十分發の汽車に乗る、數

弊の流笛を會圖に同處を發し、王子、赤羽二停車場を経て、一鐵橋を渡り、  
 又浦和、大宮、蓮田、久喜、栗橋の五停車場を経る、此の間の原野空漠にして、  
 往々樹林を見るのみ、武蔵の界に至るを、利根川あり、亦鐵橋を架き、本河  
 の八州第一の大川あり、坂東太郎の稱あり、上野武藏の際より來り、源  
 よと海口に至る七十餘里と云ふ、古河停車場を過ぐ、乗客子が爲め、不語  
 りと曰く、此の地、源頼政の墓あり、頼政守治に自裁、其の臣渡邊唱、其の  
 首を奉り來り、此の葬る、古河橋爲めに、專祠を建つると、小山停車場に至  
 る、已に下野の國に入る、右顧せば、遙かに一山、馬耳雙び聳え、如く半  
 天、小なるを見る、筑波山是なり、此より石橋停車場を経、十時六分、宇都  
 宮に達し、汽車を下る、行程二十七里、宇都宮の舊戸田候の治所ありし、居  
 民武萬四百、市肆繁盛、本國に冠たり、即時馬車に上る、未だ數丁あり、馬  
 車頗る動搖を、市謙下と去る、馬丁曰く、三人同乘にあり、せんを行く能と  
 せと、叔翁市謙小向つと頻りに乗と勸め、市謙固く執り、可か走直  
 ちに腕車を買ふと馳す、予等亦代ふるに腕車を以てし、之に繼ぎて馳す、

已に市謙の跡を失す、市街を出づれを、長松道を夾む松間より三峰西北  
 隅小屹立するを見る、車夫曰く右小位して最も高き者即ち日光山なり  
 と、上金井村、徳次郎驛を経て松本に至る、日光此を距る五里、此より日光  
 山小面して馳せ、又大深、今市兩驛を経て、七里村小至る時、小一簇の雲、煙  
 日光山頭を封せ、恰も新婦の新婿に對して、顔を覆ふに似たり、日光鉢石  
 町に達する比、六時十分なり、大澤驛より鉢石町に至る、數里の間、地勢  
 漸々と高く、道と夾む皆叢杉、直立數十丈、一齊小列植し、翠色隠々として、  
 天線僅に通ず、慶安元年、松平正綱、日光廟造營の砌り、寄献せしものと云  
 ふ、道旁皆流泉噴薄し、或は路に溢れ、泥濘軌を没す、氣候頓小變、ト冷々然  
 として、一身粟を生ずるを覺ゆ、此の夜油屋に泊る、市謙此に在り、予等を  
 待つ久し、油屋の鉢石町逆旅は巨壁にて、旅客群集、殆んど空室あり、蓋し  
 亦日光廟參に係るもれなり、宇都宮を距る九里、  
 十九日曇、午前六時四十分、往て日光廟小遊ぶ、旅舎附するに、導者を以て  
 す、道に通覽券を賣る家あり、各々一葉と求む、大谷川小至る、是より導者

口角泡を吹き、一事一物、予等れ爲め小喋々指説す、予且つ聞き且つ見且  
 つ筆す、抑も大谷川の源を中禪寺湖小發し、華嚴瀑と名せ、深谷の間を流  
 れ來り、雪噴き珠濺き、澎湃の聲、鐘、鈞耳に震ふ、二橋を架す、一を神橋と云  
 ひ、一を假橋と云ふ、神橋十四間、其れ表を朱あり、其の裏を黒にし、勾欄擬  
 寶珠、鏤むるに鍍金を以てし、兩岸の柱趾ハ、大石を削りて之を支え、橋端  
 小柵と設けて、通行と禁せ、傳に云ふ、神護景雲元年、勝道上人登山のとき、  
 此の川に橋なし、深沙大王忽然と現れ、青赤れ二蛇を放ちて橋と爲し、上  
 に山菅を生せしむ、上人乃ち橋と渡り、北岸小達するを得る、故小山菅の  
 蛇橋と唱へしと、大同年間、朝廷日光權現の宮殿を改造あるに及びて、  
 國司橋利遠、勅を稟け、神司にして工匠を兼ねる山崎大夫と云ふ者に  
 命し、大橋を架せり、爾來八百餘年を経て、東照宮遷座後、寛永六年、小修  
 繕を加へ、十三年に新造せらる、今の橋即ち是也、假橋ハ神橋の下流に  
 架す、橋柱を用ひず、兩岸より木材を組み出して構成す、往來の人馬皆之  
 に依る、本宮社之假橋前面の丘上にあり、祭神之味相高彦根命にして、日



光三社に一あり、老杉鬱々として、社殿と擁繞す、予等假橋を渡り、左に折  
を、長坂へ登らんとす、右の山際に深砂王社あり、神橋に守護神なり、長坂  
と東照宮へ詣るの本道ふく、左右は杉樹陰森、登る一町半あして、平地あ  
り、是より中山を過ぎて右に折れを、左方の舊殿地、右方と本坊は表門、中  
間は大道は、東照宮の正面に當り、道に石華表を見る、舊殿地と往時將軍  
登山は駐在所にて、本坊と即ち満願寺なり、本坊の表門に入り、左に巍然  
と峙つ者の三佛堂、元と金堂と稱す、當山第一の大堂にして、銅葺總朱塗、  
金具之滅金あり、千手觀音、馬頭觀音、阿彌陀佛は三大坐像を安置す、鐘樓、  
兩大師堂、相輪檣、皆三佛堂咫尺の地に在り、相輪檣は方形の石垣を高く  
築き、上に石籬を廻らし、中央に輪檣は銅柱を建つ、高さ地盤石より四丈  
四尺、上部は金に瓔珞二十七連と、金鈴二十四箇を粧飾す、副柱四基亦銅  
製にく、皆擬寶珠を冠す、檣の左右に、唐銅の燈籠二基と建つ、長崎糸商は  
寄附に係る、己よして東照宮に至る、石華表と表門前あり、花崗石に  
て、高さ二丈八尺、額面東照大權現の四字あり、後水尾帝の宸筆あり、黒田

長政自國にて削成し、南海と運らして、元和四年此に建てり、石燈籠四基  
石華表の左にある二基あり、有馬忠頼の献ありて、表門の左右ある二基  
は、酒井忠勝の献なり、又石華表の左に五重塔あり、高さ十七間三尺、柱は  
金襴卷、外部は總彩色、承塵の上圍は、十二支の彫刻あり、五智如來、及び須  
彌の四天を安置せり、慶安元年、酒井忠勝の寄附に係る、表門の兩邊は石  
垣にて、左右は滑海藻、阿房丸と稱する二大石あり、石燈十八級を登り、表  
門に入る、前面四間、横二間餘、銅葺惣朱塗の極彩色にして、門の左右に金  
獅子を据えり、行く數歩ありて、三神庫相並ぶ、中の一庫は南の面あり、前後  
の二庫は西に向ふ、亦銅葺總朱塗極彩色を施す、其の左方に廡あり、素木  
造りありて、猿猴花實の彫物あり、廡の側に金松樹あり、周回一丈餘、弘法  
大師高野山より移植せしものなりと、番所の廡と相並ぶ、查官更番して  
社内を警衛す、番所の西方に水屋あり、水盤は鍋嶋勝重の献なり、花崗石  
ありて、盤底より清水噴溢す、覆屋は唐破風造り、破風下の浪に飛龍の彫  
物あり、柱は亦花崗石にして、一隅三柱、四隅合せく十二柱、處々に金具を

施せり、唐銅華表水屋の前にあり、高さ二丈餘、笠木の前後も金紋を附せ、大猷公の献なり、又輪藏あり、一切經を藏す、前も傳大士、左右も普成普建、二佛の木像を安置す、里俗笑佛と云ふ、石燈十數級を上る、右も鐘樓あり、左に鼓樓あり、羽目も銅張あり、鍍金の鉞を打ち、榊れ端も龍頭と彫る、鼓樓は西に本地堂あり、柱も金襴卷にして、虹梁は上も虎と彫る、長押通も亦華麗ふして、花鳥と彫り、金銀と鏤む、内殿は天井に、蟠龍を畫く、狩野安信の筆、正面に三州峰樂師の摸像を安置し、左右に日天、月天、十二神將、四天王、其他諸佛の像と倍列せり、鼓樓の前も鈞燈籠、迴燈籠あり、鈞燈籠は荷蘭國の献にして、主柱に枝釘を附するものと三段、毎段に燈釘各々十個あり、迴燈籠は朝鮮國の献にして、穗屋は九角、黃銅と以て作る、回轉自在なり、網も鐵線、正中に主柱を建て、之に枝釘兩段を附す、毎段も燈釘各々九個を設けり、鐘樓の前も虫喰鐘、蓮燈籠あり、虫喰鐘は亦朝鮮國の献にして、龍頭の下に一竅を存す、故も此の名あり、蓮燈籠は琉球國の献にして、唐銅製、主柱の上端に一釘あり、其の下を三段とし、毎段の釘釘

各々十個、台下は六個の蜻足、おて之を支へり、右方石垣の下も南變鐵燈籠二基對立す、元和三年伊達政宗の寄附に係る、此の燈籠は、額内三年の租税を要せり、と云ふ、此より、又石燈を登り、中段より正面も高く仰ぐもの即ち陽明門あり、一も日暮門と稱す、門は南も向ひ、前面三間半、側面二間餘、三手先造り、四方唐破風、垂木は二重扇垂木とし、四隅の簷頭も金の大鈴を掲げ、破風下も二頭の麒麟を刻す、正面なる東照太權現の扁額は、後陽成帝の宸翰あり、文字は純金とし、外は紺青を以て填む、四隅の柱も添ふく金の雲龍を掲げ、手先もは數頭の金龍を組み出し、外組の間もは、桐に鳳凰を彫る、直下の象鼻は白色の龍馬、中央に亦白龍と刻し、俗に目貫龍と云ふ、高欄の手摺は、臘色も金物と粧ひ、欄間は、唐子遊の九彫り揚げ高欄の下には、三尺間毎に牡丹に金獅子を彫り出す、外組の間は、正面の三區は、周公聽訟の圖、左右の四區は、琴棋書畫の人物、西側は、商山、四皓、虎溪三笑、東脇は、遙思逸、四廬、福人、張良、後面は、琴高、費張、房王、商、鏡、柳、等、栴、皇、の、白、獅子、と、彫り、其、れ、間、も、の、亂、獅子、柱、の、十二、本、皆、樟、の、圓、柱、に、

いて、白地に雲菱の地紋、處々の圓紋に、鳥獸草花を彫刻す、裏の左なる、  
 一柱む、地素を倒し彫む、俗に魔よけに柱と云ふ、羽目、牡丹、唐草の透し、  
 彫り、左右の天井には、天人を書き、兩間に昇降の二龍を墨畫せり、探幽守、  
 信の筆と門の左右の表面に、隨人を安じ、裏面に、金獅子を置けり、觀客殆、  
 んと還るを忘る、日暮れ稱真に空しからざるなり、回廊と陽明門は袖屏、  
 お續き、羽目は大彫物と、松竹梅孔雀鳳凰鶴水鳥の浮彫あり、門の西に神、  
 輿舎あり、前後に唐戸口を設く、神樂殿は門の東にあり、殿内に神巫束裝、  
 して正坐せり、神樂殿と並び、社務所あり、往時護摩修法の處とす、唐門、  
 の陽明門の正面に當る、前一丈一尺、横七尺、四方唐破風造り、前破風の、  
 棟に唐銅の恙蟲あり、鎖と以て繫く、破風下の許由、巢父、河骨杜若、帝堯の、  
 百官、後の破風下と、波お兔、竹林の七賢、西脇の七福神、東脇と七仙人等の、  
 彫物、門柱と昇降の二龍に梅竹を添え彫りし、天井の白地に、天人、彈琴の、  
 圖、兩扉の梅菊牡丹等を彫刻せり、唐門の左右よと瑞籬と以て拜殿本殿、  
 を圍み、欄間の上なるの山鳥、下あるの水鳥共に籠彫り、おく極彩色あり、

欠

MISSING

して、寶物拜觀所に至る、荒々筆端に留めしものり、

○神輿、○櫛(東照公)○兜(全上)○香爐(琉球王獻)○駕(東照公)○燈籠、  
(琉球獻)○遣訓懸幅(東照公筆)○堪忍二字懸幅(全上)○合幅(織田信  
長、豊臣秀吉、徳川家康、成瀬隼人、安藤帶刀、外二名筆)○上棟式工器  
○劔(東照公)○拵太刀(全上)○久國の劔、○海中出現の劔、○國正の  
太刀、○國行れ短刀、○渾天儀、○前世界大象牙、長さ壹間餘、猿樂  
舞面、並小樂器、

見畢、坂下門に至る、唐門の東、小當る迴廊の承塵上に、丸彫の睡猫あり、  
飛彈甚五郎の作と、猫形真小逼り、名工の伎倆、造化を奪ふを見る、是奥院  
の口あり、石階を曲折して登る、二百餘級、左右の老杉陰森として、雲間に  
緯え、日光を蔽遮き、唐銅華表小至きと、後陽成帝の宸翰、東照大権現の  
扁額と掲げり、是より右、小向ひ、石階十一級と歴く拜殿あり、其の正後に  
石籬を廻らし、黄銅の寶塔を建つ、高さ一丈許、前小石卓を据え、三具足々  
供ふ、即ち東照公の遺骸を斂る處あり、正面に、唐銅鑄拔の門を設け、左

右に唐銅の獅子蹲居す、一拜して下り、表門前に返り、假殿に至る、假殿の石華表の東、老杉陰森する處にあじ、唐門南に向ひ、前に唐銅の華表あり、左右より瑞籬と廻り、拜殿、本殿と圍む、亦壯麗あり、本社修造の時、假りに遷宮の所と云ふ、抑も東照公は天文十一年十二月、參州岡崎に生れ、身と兵馬の間に委する五十八年、遂に天下の争亂を一統し、官三河守よじ、太政大臣に累進し、元和二年四月、駿河城を薨せらる、同國久能山に葬じ、同三年二月、勅命によじ、東照大権現と尊稱し、翌月正一位を追贈せらる、是より於て神靈と下野日光山に遷し、正保二年十一月、又勅して宮號と賜じ、明治維新の後、別格官幣社に列せらる、と、表門より西に折れ、二荒山神社へ詣る大道あり、新宮馬場と云ふ、長さ二町許、唐銅華表あり、高さ二丈二尺、二荒山神社五字の額を掲ぐ、有栖川左府の筆なり、社務所は華表の北に在り、其の西に拜殿あり、南に面き、本社と拜殿と咫尺す、五間四方八棟造り、銅葺總朱塗あり、正面の三扉を黒塗あり、前は唐門あり、左右の瑞籬と廻りて、本社の後、小達す、俗に化燈籠と稱する唐銅の燈籠

欠

MISSING

て、波、稻、妻、形、に、鳳、凰、の、高、彫、り、門、扉、の、唐、艸、左、右、の、袖、羽、目、の、樺、の、一、枚、板、に、  
 秋、の、七、色、を、刻、す、是、よ、り、廊、を、設、け、席、を、敷、き、て、直、ち、に、拜、殿、に、達、す、瑞、垣、の、  
 門、の、左、右、よ、り、廻、折、し、て、本、殿、の、後、に、至、る、拜、殿、は、東、北、に、面、す、正、面、九、間、側、  
 面、三、間、半、階、段、五、級、千、鳥、破、風、向、拜、わ、り、千、鳥、破、風、の、枇、杷、板、の、獅、子、に、牡、丹、  
 向、拜、の、破、風、下、の、雌、雄、の、金、獅、子、簷、下、に、升、組、の、臘、色、に、七、寶、流、し、れ、金、具、を、  
 施、し、欄、間、及、び、虹、梁、上、は、松、よ、り、鷹、の、彫、物、手、挾、の、菊、の、籠、彫、り、あ、り、軒、頭、に、釣、  
 る、二、十、四、筒、の、金、燈、籠、は、阿、部、忠、秋、松、平、信、綱、の、献、と、云、ふ、殿、内、六、十、三、疊、折、  
 揚、格、天、井、よ、り、紺、地、に、金、の、蟠、龍、の、高、彫、り、四、邊、の、長、押、上、に、花、鳥、を、刻、す、  
 正、面、の、羽、目、の、金、泥、に、し、て、左、は、狩、野、守、信、彌、子、を、書、き、右、は、狩、野、安、信、獅、子、  
 を、書、く、又、兩、傍、に、朝、鮮、國、よ、り、献、せ、し、釣、燈、二、個、を、粧、置、き、本、殿、へ、續、く、處、に、  
 合、之、間、あ、る、廣、さ、十、八、疊、兩、邊、に、徳、川、三、家、の、献、に、係、る、金、の、柳、梅、蓮、の、立、花、  
 及、び、鶴、力、士、等、の、燈、臺、を、排、列、せ、り、殿、の、内、外、惣、く、金、の、押、箔、を、以、て、修、飾、し、  
 亦、品、々、と、し、て、眩、曜、す、本、殿、は、佛、殿、造、り、よ、り、二、重、屋、根、な、り、周、圍、の、悉、く、彫、  
 物、に、金、彩、を、施、し、正、面、に、唐、戸、を、鎖、し、前、に、一、脚、の、机、を、置、き、上、に、金、の、天、蓋、



を懸く、椽の黒臘色、拜殿の前面より合之間の側面と過ぎて、本殿の後背を廻り、本殿右側は潜門と入れば、皇嘉門に、即ち奥院の口あり、奥院之大猷公の遺骸と斂る處に、東照公は奥院と大同小異なりと、余等本殿れみを拜して去る、當山の日光、又二荒、或は男體、黒髪と稱す、山中瀑布多く、其れ著名なるもの、瀧尾瀑、含滿瀑、若子れ七瀑、霧降瀑、布引瀑、觀音瀑、般若瀑、華嚴瀑、龍頭瀑、湯瀑にして、幸湖、湯湖は二湖、亦其れ間あり、叔翁脚稍々疲れ、登臨は意なく、余等遺憾を含みて止む、嗚呼我邦天工美術は秀靈あるもの、人造美術は精華を蒐めたるの、日光に過ぐるの、無し、往時徳川氏は華奢想ふべし、雖も抑も亦今日にありては、東洋の一壯觀とし、世界に誇稱するに足れり、洋人の我邦來るもの、必ず筑を曳くと云ふ、此の九時四十分、鉢石町逆旅を發し、勿々腕車を驅り、十二時松本に達し、午飯を喫す、午後二時三十分宇都宮停車場小抵る、發車の刻未だ至らざり、乃ち某店に休憩す、四時十四分瀧車に上る、轉輪矢の如く、七時二十六分、上野停車場小着し、直ちに寓と指して歸る、此の夜寢

牀猶は麗宮彩門の間小彷徨を覺ゆるあり、廿日朝陰、神田小川丁浴集館小至り、陳列品數種を購ふ、歸路に各書肆と巡覽す、廿一日朝陰、此れ日叔翁千歲座觀劇の興あり、予市謙と尾す、千歲座は日本橋區久松町に在り、新富座と韻頗りて、都下屈指の劇場なり、午前七時腕車を聯結して發す、己に千歲座に至る、時刻猶は早し、濱町細川御邸の前を經く、新大橋に至り、橋上より眺望せむ、墨田川の下流滾々溶々とて、上下小兩國永代の長橋跨り、舟船其の間と來往せむ、十時廿分再び劇場に至り、中等土間西邊第二席小入る、漸々と觀客場内小填咽し、左右の棧舖の惣て赤籠と前面に垂を、恰も彩霞の、翳くが如く、今や序幕を開く、かど衆眼の皆演技臺に注げ、此日の本藝題は、千時近江の名所を温浴て、鏡山若葉の紅葉とある、己小時針器チン々々と、第十一時を報むるや、否や、一時に雉を調子につまて、開き初め、第一幕の法會の靈場、小老女の折檻、落花を厭ふ、三井の晚鐘、第二幕と、奥殿の長局に不義の密會、瀧

初を誓ふ幸崎の夜雨第三幕は中老は部屋に流涕の玉章啼音を忍ぶ  
田の落馬第四幕と筑摩の大河に水馬の乗切危難を掃ふ粟津の時嵐第  
五幕は俊臣の新郎と位牌の意見清光を願ふ石山の秋月第六幕は鶴川  
の岸邊小天命の投網得物を悦ふ矢走の歸帆第七幕は山路の楓下老  
臣の閑話積悪を算ふ比良の暮雪第八幕の大家の役所に笠傘の落着入  
日と迎ふ瀬田の夕照此日の骨役は市川左團次尾上菊五郎中村福助市  
川團十郎澤村源之助中村權十郎中村芝翫と云へる都下秀出の俳優  
よししく左團次は政尾の年の比四十左右と見え大家の老女不恥ちる  
の威格あるも胸に挟む一物はどことあく自づき小顔のれ観客の注  
と引きたるも菊五郎の大月藏人は舊とは賤しき身ふれども己不執政  
の位おあまは人品衆おすぐれ舉止従容として毫も間然する所を見ず  
國家と乱すの逆意其の方寸みわらんとい誰も豫想の外に出でたる趣  
向の亦得意の存せる處か中村福助の中老玉笹と優美おして愛敬する  
政尾の手中に陥ちておへなく死お就くと雨にうたれし海棠の切なき

憂を予見せにける團十郎は戸田大炊と年の殆んど古稀あるも國家を  
思ふは精神の老いて拙けを惡逆れ心の底も諧謔の中お見でとる有様  
いさすがに團十郎の妙技とあそひ知られけれ源之助の於慶の方權十  
郎の佐渡守と更に措くべき評なきも左團次再度の安宅郷右衛門の悪  
よ與ミする程ありて紅葉狩場の荒手より詮議の場を中幕は源平不  
屈の妄言と人をして其の面に唾くの想ひあかしめたり中幕は源平不  
引の瀧小野村の假にて瀬尾兼氏と左團次齋藤實盛と菊五郎にして執  
れも非常の出来はへかり結幕の藝題と墨田川へうづる筑波山よそ  
ふも遠女達江戸紫の昔摸様三國一の曙對の遠染となん時己に夜に  
入り電氣燈と満場を照かし白晝の如し西の花道より黒羽二重の衣  
裳に大の定紋を著け一刀を腰おし高履を穿ちて出でくるもの男達  
團十郎の山王山星五郎福助の道灌山松五郎小團次の飛鳥山碑文治芝  
翫の御殿山浦右衛門菊五郎の上野山鐘四郎左團次の愛宕山段九郎權  
十郎の待乳山聖太郎東の花道より白縮緬の衣裳に花鳥の繡を散らし

同玄く大の定紋を著け、一刀を腰におし高履を穿ち、出でくるもの、女  
 遠源之助は角田川於浪、松之助は神田川於柳、秀調は根岸川於元、八百藏  
 の木下川於松、鶴藏の宮戸川於勘、壽三郎の瀧の川於弁、松助の江戸川於  
 登羽而、去て東西各々相對して、一聲々々互に自巳は履歷を述べ、役名  
 を呼べる、一際目立ち、観客は喝采を博し、演技臺に菅原傳授手  
 習鑑車引の段の書看板を掲げ、あしむ、此れ幕忽ち一變して、車引の段  
 とあり、團十郎の舍人梅玉丸、菊五郎の舍人櫻丸、芝翫の舍人松王丸、左團  
 次の時平公と願ひ、出で、又滿場の喝采を博せ、己にしく、矢櫓、大鼓の  
 ドン々々と耳を穿つや、臺上己に閉幕となる、時己に九時なり、群衆雜沓  
 し、先を争ひ劇場を出づ、腕車場外に詣り、客を引く、予等亦之小  
 乗ト去る、

廿二日半露、午前九時、予叔翁と瀧車小く上野停車場を發し、十分間にし  
 て王子停車場に至る、瀧車を下り、小市と過ぎ、先づ製紙場と見る、尋で  
 王子神社に詣る、神社の地勢稍々高き處にあり、石階數十級を攀ぢて神

前に至る、境内杉樹鬱森、風颯々聲あり、一拜して稻荷社に至る、路にて聞  
 く此を距る二三町にして瀧ありと、乃ち稻荷社の石段と下り、行く二町  
 許、忽ち表札と見る、記して曰く、左なぬいの瀧と、余等如何なる瀧か、ん  
 と想ひつゝ、足を疾めて至れば、道己に窮し、遂に瀧を得ず、一莊園を得た  
 り、家に二三娘茶葉を拵るあり、予瀧の在る所を問へ、一娘指して曰く  
 彼なりと、兩三の笥を架して園上の山よと水と取る、水滴々笥を注ぐ  
 て降るのみ、復た見るに足るものあり、予叔翁と竊に抱腹して曰く、是な  
 むいの瀧なるか、と、勿々園を辭して去り、舊道を取りて稻荷社内と過ぎ、  
 瀧野川を尋ねて至る、路傍に小門あり、古木と交互して造る、宛然隠者の  
 窟に似たり、亦表札と掲げ、園内縦覽を許さ、いと記す、門に入り、一長徑  
 と過ぐれば、兩畦壁立し、一川其の下に流る、水色藍の如く、流を頗る緩  
 り、是瀧野川の流あり、漸々屈曲しく、畦を下り、水邊に至る、左右皆櫻樹  
 と植ゑ、一橋斜に前畦に跨る、而して處々畦を墾き、水に臨み、小亭を構へ、  
 務め、雅體を取り、少憩、諷咏の所とす、地固より幽陰小して、石古く、苔滑

に、樹木蒼々として紅塵至らば、眞に隠者の盤旋する所あり、橋を渡り、復た屈曲して前畦を上まば、園主人の家あり、庭内日覆せ、設けく、数百種の盆栽を配置せり、乃ち巡覽して表門に出づ、門前に額して、鶴巢園と云ふ、予等圃らずも此れ奇地を得なぬ、一の瀧を探ぐるの勞是に於て、脂ふと謂ふべし、是より辨天社小詣る、社後の畦下の即ち瀧野川にて水蜿蜒しく流れ、兩畦の楓樹は水面を覆ひ閑靜ある一勝地なり、二三、茶店あり、紅葉の候、遊客殊に多しと云、小憩して去り、復た鶴巢園に表門前を過ぎ、て正受院に至り、瀧不動を見る、瀧不動の亦瀧野川の邊あり、小瀑、懸り、不動尊を瀑の上下に安せり、此の地や鶴巢園に隣り、亦幽陰にして愛すべし、歸路畦間を左右し行く數町にして飛鳥山に至る、府下を距る一里許、亦六公園の一、小屬せり、一堆の芝山に松櫻相交り、音無川の支流、其の北麓を迴り、頗る遠眺も富め、山頭小象山、佐久間翁櫻賦の石碑あり、春時の觀亦想ふべし、道瀧山、日暮の里、此を距る遠かきと云ふ、山と下まば、則ち王子停車場あり、乃ち十二時十九分發の汽車小乗り、上

野停車場に至り、市中と逍遙しく歸る、

廿三日雨、余等十一日、夜を以て始めて都下に入り、本日に至る、已に十有三日、其の間日光行と爲せと雖も、都下有名の地の、大畧探討せり、今按るに、東京の武藏國、豐嶋郡に在りて、南の荏原郡、北の五反田、東の葛飾郡に跨る、東西三里、南北四里、街市を分ちて十五區とせ、古への蔓草、茫々として、空しく狐兔の場となり、泥淤沮滯、車馬の通ふも、海頭貧瘠の、野店、僅に斷煙の底に見えしに、過ぎざりしと、古歌に

むさしのつきのいるべきくまもなし

亦以て當時の狀を追想すべし、今や百萬の人家、櫛比して、滿都繁昌を極め、皇居あり、中央政府あり、商業の中心とあり、工業の焦點とあり、人才の淵藪となり、日本全國の首都、亞細亞洲中第一等お位すべき都府となり、元とは徳川幕府居城を、茲に移せしに、職由せざる、いほら、家康の江戸入城の實に、天正十八年八月お、本年八月正に、三百年に當ると、

云々、此の日明且天氣霽れば歸縣の途お上り、迂迴して横須賀鎌倉等巡覽に決き、會々市謙の知己内田某來り訪ふ、某數々同地に往來し能く其の地理と暗ず、乃ち予等れ爲めに横須賀造船所への昔書と、道路は圖面を贈る、

東遊日乗中の巻終

東遊日乗下の巻

東肥 龍巷散史 著

廿四日宿雨頓み霽る、午前八時結束歸縣の途に上る、宿郷年六十左右、滞留の間、周旋頗る勤む、發するお臨み、叔翁お謂つて曰く、君れ壯健羨望に堪えず、請ふ一筆の別を留めよと、叔翁乃ち歌一首と録してあたへたる其の歌に、

やどりまてきみがなさけのゆたかさよ

おはたちかぬるたまのうてなと

途より腕車に乗り、宮城の外郭を経て、芝區愛宕下丁より増上寺の後路を通り、三田町を過ぎて高輪泉岳寺お至る、門前よ表石あり刻しく曰く、播州故赤穂藩四十七義士之舊跡と、門額に之萬松山の三字を録し、門内左右お松樹五六株直立す、一石橋を渡り、山門に入る、二層樓なり、又額を

掲げく泉岳寺といふ山門の内、また長松五六株あり、これより直徑數十歩にして本堂あり、予等山門内より左に折れて義士の墓道に入る、石燈籠對立し、義士常燈明の五字を刻せり、行く數歩にして右に瑤池梅あり、故淺野内匠頭れ后室瑤泉院殿より堀部妙海尼に賜り、元と盆栽れ梅ありと、其の旁々に首洗井あり、又數歩にして石碑あり、義商天野屋利兵衛浮圖の十字を刻せり、石燈數級をのぼり、觀音堂と相對する一小室に一老爺正坐す、同向料と取ど、線香圖面などを賣る、此より墓地門に入り、冷光院殿吹毛立利大居士淺野内匠頭長矩、及び瑤泉院殿長登正澄大姉の二石塔婆あり、石籠とめぐり、出入と禁せど、又石燈數級を拾ひ、義士の墓所に入る、墓口は二大松樹對立し、四周も亦樹木森々然として日光を蔽遮す、墓石之皆尖額形にして、大石良雄の墓石稍々大なり、而して其雄父子の墓石と覆ふ小祠と以て、香火常絶えき、名刺と附結まる頗る多し、予等亦香火と點して、墓石を巡拜す、墓石配列の順序と左のおとし、

大石良雄

大石良雄  
大石信清  
矢田助武  
奥田重盛  
赤地重賢  
早水重義  
堀田高教

吉田兼亮  
原元辰  
片岡高房  
間瀬正明  
小野寺秀和  
間光延  
磯貝正久  
堀部金丸  
近松行重  
宮森正因

永代常燈明

堀部正房  
堀部武藏  
堀部正政  
堀部正行  
堀部正忠  
堀部正信  
堀部正雄  
堀部正實

堀部正房  
堀部武藏  
堀部正政  
堀部正行  
堀部正忠  
堀部正信  
堀部正雄  
堀部正實

寺坂中衛門

妙海法尼

義士碑銘

大石良雄  
堀部正房  
堀部武藏  
堀部正政  
堀部正行  
堀部正忠  
堀部正信  
堀部正雄  
堀部正實

同願をれば元祿の昔大石良雄等四十六人憤を一撃に下は洩れし主仇  
れ首を馘して此に至り長矩の墓前に供し靈魂を慰め從容罪と埃ち遂  
ま法の爲め死を受く其れ精忠義氣萬古卓然宜ある哉香火の常に絶  
えずして名刺の附結彼が如く多きや此を去り右折して小坂を下り木  
像堂に至る一老嫗亦堂内に坐しく之を監す正面に内匠頭長矩の像  
其の左右には大石父子を初め義商天野屋に至るまで凡そ四十八人の  
像を羅列し各々夜襲の装ひおく或は刀を按ずる者あり或は弓矢を執  
る者あり或は槍槌を提くる者あり其の意氣の勇壯なる人として當夜  
の状と想像せしめり寺門を出で茶店に小憩し又一小丘に上る品川  
灣一目の下に在り市質送まで此に至り袂と分ちて去る予等腕車を馳  
せ海沿ふく品川停車場に抵る時十一時あり乃ち乗券を購ひ十二  
時廿八分發の流車を以て横濱に向ふて發し午後一時十分同地に達す  
予等初め夜と以て此に至り其の状と審うおさる能とす今大船へ發車  
まで一時餘の猶豫あり近傍を徘徊するを得たり此の地と開港場第一

に位する程ありて道路も正しく街衢も整ひ外國人の商館の市中の南  
半及び南方の岡上にありて鐵閣石樓皆高大に造營なり二時廿五分又  
流車お投し同五十三分大船お達す此より左折しく鎌倉路に入る鶴岡  
八幡宮の此を距る一里餘と云ふ腕車二輛あり叔翁市謙之に乗る予足  
力を試みんと欲し腕車より前後して馳す山内村と經るや余圓覺寺建立  
寺を見る圓覺寺は瑞鹿山と號す五山の第二なり北條時宗は建立さ  
り其れ後火災に係り足利義滿再建す開山の宋佛光禪師諱の祖元弘安  
二年來朝せり建長寺は巨福山と號す五山の第一なり北條時頼の建  
立なり開山は宋の大覺禪師諱の道隆覽元四年來朝せり山静に水清く  
松高く苔滑にいて物皆古りさるさる流石お名高き寺ありけり已に腕  
車お遅る乃ち路人お質し跡と追ふて走る未だ數丁ならざり叔翁市謙車  
と駐めく待たる此より新田義興脇屋義治鎌倉お攻入りし時基氏方の  
兵集りて堅めり巨福路坂の切通を打過ぎり四時五十分鎌倉鶴岡八  
幡宮お詣り鎌倉の相模國は名里ありて地勢南面の外海お臨み其れ他

三方の皆岡陵を負へり、往昔大織冠鎌足公鎌子と稱せし比、宿願あまて  
 鹿嶋參詣の時、山比里に宿りせられたる夜、靈夢を感し、年來所持の鎌を  
 大藏山松ヶ岡に埋められしより鎌倉と稱せ、其の後玄孫染屋時忠、文  
 武 聖武両帝の間、鎌倉に住し、關八州總追捕使として東夷を平治し、其  
 の後平貞盛の孫上總介直方守護として鎌倉に住す、源賴義相摸守にて  
 下向せし時、直方の婿となり、八幡太郎義家と出誕し、遂に源家相傳の  
 地とあり、治承の頃源賴朝兵を東國に舉げ、鎌倉の地に據り、木曾を伐ち、  
 平家を亡し、遂に天下總追捕使となす、關府を開きしより、北條足利兩  
 氏相繼ぎ、此の地に居る三百年、故に名所遺蹟最も多し、八幡宮の雪下  
 村に鎮座あり、宮居山の中腹に據り、いと高し、此の山は元と大藏山と稱  
 せしを後、大臣山と改免と云ふ、蓋し鎌倉の稱、鎌足公より起り、云な  
 れば、大臣山も公と指したるなるべし、宮殿は極めて壯麗に、去て南遙か  
 に海に面す、同廊の樓門に續きて、宮殿の四位を圍み、西に七箇の小神  
 輿を据え、東に社務所を置けり、樓門を出で、石階上より眺、囑をせば、大

鳥居と此と距る二十町許、山比ヶ濱の波打際あり、而して大鳥居より、  
 二の鳥居までの間に、青松列植す、古の所謂琵琶小路あり、二の鳥居内、  
 と左右に民家櫛比も、所謂段葛若宮小路なり、三の鳥居前に、石燈籠對立  
 し、其の内、二橋を架す、一橋は虹の如し、所謂赤橋なり、橋の兩方に、  
 一大池を構へ、池の周圍は、又青松列植す、四の鳥居内、小拜殿あり、其の左  
 に、若宮、白旗神社あり、若宮は、義經の妾、靜の舞袖を纏せし所なり、白旗神  
 社と源二位は、靈廟なり、豊臣秀吉鎌倉に遊び、汝は我友なり、徒手天下  
 と取るは、唯吾と汝とあるのみと、其の昔を撫で、戯れし塑像あり、即ち本  
 社に祀ると、石階六十三級と下り、茶店あり、小憩を、旁に銀杏樹あり、相傳  
 ふ、公曉銀杏樹の下に身を潜め、寶朝を弑せしと、蓋し是か、抑も八幡宮  
 は、賴義安倍貞任征伐の時、即ち康平六年八月、山城國石清水の神靈を由  
 井郷に勸請し、其の後賴朝祖宗と崇めんため、松ヶ岡の山を拓き、寶殿を  
 構へて遷座あり、舊に依り、鶴岡八幡宮と稱せり、本社是なり、明治十五  
 年國幣中社とある、此より導者と履ひ、畦間を経て、鎌倉宮に詣る、本宮は



八  
護良親王を祀る、鶴岡の東十町許、二階堂村の山麓にあり、明治二年朝  
廷新に社殿を創營せられ、六年官幣中社に列せらる、傍々に二小社あり、  
右あるは南の方、左あるは村上義光と云ふ、三社の後方に親王を定めま  
つり、土窟あり、予等社務所に至り、拜觀を乞ひければ、神官名簿を携へ  
出で、姓名を録せし先、直ちに導きて其の處に至る、石階十數級を経て、上  
に板圍あり、神官錠を透きけせば、其の内に入ると得たり、此より窟内を  
拜觀する、小窟と暗く去て、さぶか小見えきども、一丈三尺を下り、八  
疊敷許りの廣さありと、實は土窟に、くも住みさる如くにて、常人の寸時  
だ小住る、は、此に、あら、太平記に建武元年五月三日、大塔宮を足利直  
義受取、鎌倉へ下り奉りて、二階堂谷に土籠を塗て、予置參せける、後小乱  
起るに及びて、直義淵邊義博命を去て云く、始終誓とあらせざるべき、  
兵部卿親王なり、御遊の急き樂師堂谷へ馳歸りて、宮を刺殺し進せよ  
と下知すまば、義博畏りて、承り候とて、建武二年七月廿三日、小弑を奉る  
とあり、あふりを見るに、昔のと滑かに、去て、今も血に染まらるるが如く、

九  
て、當時の想像するさへか、こけれ、且つ又御首をを戴の中へ投げ入れ  
たり、去所とく、石階と下りて左方にあり、玉垣にて圍り、其の右手ある  
理智光寺の山上に五輪の石塔あり、理致光院の長老が御首を葬り進  
せ、去所とく、歸路徑柄天神社を拜す、當社と頼朝時代の古祠に、菅丞相  
東帶の像を安ず、五臟六腑と作し入せ、内に鈴と掛けて舌と云、頭内は十  
一面觀音を作り込むと云ふ、和田胤長の屋敷跡は、分明なうざれども、東  
鑑は胤長が屋敷地、徑柄の前小在りとあれば、此邊なうんと察しつ、嶋  
津忠久、大江廣元、及び頼朝の墓に至る、三墓と頼朝館址の比なる法華堂  
の山上に在り、忠久と廣元の墓と、相隣りて、岩穴の中小在り、頼朝の墓  
は五重塔なく、塔前小石燈籠對立す、繞らざる石の玉垣もあれば、其の  
他にたく荒を果て、見るかげもなし、頼朝の館址の方八町をかりて、  
今の田圃と云せり、東鑑に治承四年九月十日、千葉介常胤申云く、當時の  
御居所要害の地小非ず、速に相摸國鎌倉へ出しめ給ふべし、常胤門客等  
を相率て御迎ひに參向すべし、同十月六日、相摸國小若御あり、同九日大

庭平太景義奉行と去て、大倉郷に御亭は作事を始めらるゝとあるは、即ち此れ地よて、三代四十箇年の間、此に館せしと云ふ、絹張山、屏風山、横さま小館址の南に亘る、絹張山は、頼朝大藏山に居まるとき、夏に此れ山に絹を張り、雪の降り掛るか如く小して眺望せらる、故に名くとき、梶原屋鋪、基氏屋鋪、文覺屋鋪、北條屋鋪、高山屋鋪、和田屋鋪、土佐坊屋鋪などの跡あり、おもとも、返照己に収り、喉煙四毛に合ふを以て探らず、相摸入道が闘犬の地なると云へる、鳥合原を過ぎて、八幡宮東の鳥居に入り、流鏑馬場を見つゝ、下村丸屋に至ると泊す、嗚呼鎌倉の三代は、將軍、九代の執權、春の花咲けば、秋の紅葉と變り、數百年の繁華、繁榮を保ち去も、今や極目荒寥と去て、人家稀れ、ま、麥穂秀で、波門米翁の所謂

新主堂榭空田晴、日暮寒草臥黃牛、  
の觀あり、余を去て、覺えず、箕子の歎あり、去めり、

廿五日、午前七時丸屋を出で、八幡宮二は鳥居に至る、此より東寶戒寺小路と經て、寶戒寺に至る、門前小表石を刻去て曰く、北條九代屋鋪

並頼經已後代々將軍屋鋪と、本寺は金龍山と號す、開山の法勝寺の長老五代國師に、二世普川國師の足利尊氏の二子なりと、徳宗權現社あり、高時を祀る、北條五代記に、平家は亡魂共恨とある、すよ一申に因り、高時が屋鋪の跡に寶戒寺を建立し、平家の亡魂を弔ひ、高時を徳宗權現と號し、此れ寺は鎮守小祝給け、ま、さてあるしづま、ぬとあり、今や境域大半田圃となす、堂旁に棟に、小學校を設けあり、一老農子が爲めお語して曰く、所謂北條は屋鋪跡の、横壹町、緊三町程なりと云、太平記に、去程に餘煙四方よと吹懸ると、相摸入道殿の屋形近く火懸りける、今朝までと奇麗なる、大坂高塔の構、忽ち灰燼と成るとあるは、此地は事あり、老農又寺後を指して曰く、彼の山の屏風山とて、其の下流るゝ水と坐禪川の下流にて、處によりく名を變り、一川によりく六名を有し、所謂青戸藤綱が錢と搜せし、滑川の坐禪川は上流ありと、子等田圃の間と徑り、岸上より川を臨めば、幅凡を三間位にし、水も亦多からず、衆草兩崖よと水上に簇出せと、又曰く、此川を越えて、東南の谷と葛西谷とす、山下に

青龍山東勝寺の舊跡ありと、太平記に、相摸入道殿千餘騎にて葛西谷に引籠り給ひければ、諸大將の兵共は東勝寺に充満たり、是を父祖代々の墳墓の地なれば、爰にて兵共に防矢射させて、心間か小自害せん爲め也と、又相摸入道殿も腹切給へば、總して其の門葉たる人二百八十三人、我先にと腹切、屋形に火を懸けたれば、猛火盛に燃上り、黒煙天を翳めたど、後小名字を尋ねれど、此は一所に死する者、總て八百七十余人也とあると、是なふんかと思ひつゝ、田圃の中央に還るに、老農又西を指さく曰く、遙く龜谷の中央に當りて、一山突出し、三松樹山頂に列植せるは、所謂源氏山とて、亦一勝地なりと、鎌倉九代記に、源氏山と申ひ、古へ八幡太郎義家、東國征伐の爲め、小下り給ひ、鎌倉に打入りて、此山に旗を立て、終に強賊阿倍貞宗任を滅去給へば、或は旗立山とも名くとあり、頃くしく老農と別れ、舊路を取りて、復た二の鳥居前に至り、若宮小路を南へ行くこと一町許にして、一老翁路傍の民家より突然走り出で、予と謂つて曰く、乞ふ檀那の手荷物を負ひ、途中の舊蹟と案内せんと、是に於て三人の

荷物を託し、之に尾を去り行く、此より舊蹟小過ふ毎に、一一指示す、若宮小路の西、遙かに一林を見る、林中鍛工正宗の屋敷跡ありと、正宗と行光が子にて、行光の貞應の頃鎌倉に來り住すと云ふ、三の鳥居の右手ある田圃は、亦尊氏屋舖と云ひ傳へて、此の邊を龜谷の内と云ふと云へ、東鑑に、仁治四年正月九日、足利大夫判官龜谷は亭とあり、此は尊氏先祖の屋舖と見え、此の他大藏公方屋舖も、尊氏代々の宅地あり、又長壽寺は南郷も尊氏屋舖ありと云へば、三所とも尊氏の舊宅あらんか、已にして西に折れて鎌倉時代の刑場を過ぐ、小碑あり、世蒸の發句を鐫る、なつくさやつわものとものもめのと  
と、廿二明神の前を經る、亦表石に八幡太郎義家氏神の八字と刻す、社と此と距る一町許、神輿嶽の麓に在り、天照大神を勧請せると、北支徑に入ぎ、淨泉寺に至る、行くこと數百歩にして、疾ち大佛の半身宛如として、樓門は上に懸れ出づると見る、余愕然直ちに門を進む、門には大異山の額を掲ぐ、又表石に刻さく曰く、聖武帝御創東三十三箇國總國分寺と

大佛の坐像に去く、佛身青銅、總高さ五丈、周圍十六間二尺、面長八尺五寸、  
 横壹丈八尺、白毫周一尺三寸、眼長四尺、眉長四尺二寸、耳長六尺六寸、鼻長  
 三尺八寸、口廣三尺二寸五分、肉髻高八寸、髻二尺四寸、螺髮高八寸、髻一尺  
 其の數八百三十顆、膝經六間、佛手大指周三尺餘、眼睛之精金小去て、白毫  
 と白銀、其の量三貫六百口と云ふ、大佛の創立は賴朝の發願不起り、四  
 條帝の勅を奉玄、賴經、賴嗣、及び宗尊親王の外護に依りて、建長四年上總  
 國大野五郎右衛門の鑄造にして、明治廿二年と距る六百四十四年、南都  
 の大佛と頗頗せりと、寺僧乃ち香火と取ど、余等と誘ひ佛は腹内に入る、  
 腹内空洞にして數百人を容るべく、賴朝の護持佛吞龍大菩薩を安ず、階  
 子あり之を上る二十級、佛背小硝子窓二個を開き明を取る、佛の面内を  
 仰げを面内に金色の佛像を安ず、又肩内も當りて三體の佛像と安ず、萬  
 里居士の詩に曰く、

兄在南都弟東福、  
 寶跡塵無堂宇、

可憐佛亦去年貧、  
 腸瘦縫容數百人、

と亦其の狀と見るべきなり、此を去り、長谷觀音堂に行く、堂の高壇地  
 お棟る、石級と拾ふて上り、寺門入り、堂は前に遠す、所謂觀音大士の堂  
 の後に安ず、寺僧余等を導きて堂の後より至り、戸を開て入る、戸内暗黒に  
 して人を辨せせ、寺僧乃ち燈火を點し、綱を引きて燈火を上下し、觀音は  
 像を示し、且つ其の來歴を話す、觀音と金色の立像にして長け三丈三寸、  
 和州長谷の觀音と一本の楠木にて、同じく佛師春日の作、和州長谷より洪  
 水の爲め不流され、馬入へ流を寄り、上りて飯山ありしを、此所  
 に移せしものありと、見畢り、復堂の前不出づ、山井の邊、三浦岬、一望の  
 中におり、煙波淪漣、白帆來往、亦一の佳景なり、石級を下り、右折して景政  
 社に至る、即ち鎌倉權五郎を祀る、社前に弓立の松株あり、朽腐して僅に  
 古形を存するのみ、又社旁に二箇の圓石あり、一は手玉石と云ふ、重さ十  
 六貫目、一は袖石と云ふ、重さ二十八貫目、子一喝して兩掌に唾き、試に手  
 玉石を擧ぐ寸分地を離せ、此より本道に出で、西に折を、極樂寺の切通  
 小上る、右旁小一井を見る、一婦人水と茶碗を盛り、行人に供す、所謂星月

夜の井是みず傳に云く昔は井中に晝猶ほ星影見ゆ故は星月夜の稱起りしが奴婢水を汲み誤りて菜刀を井中に落しきより星影見えざると、余等一碗を飲む水質和らかにして茶に適すべく覺えたま切通間に五重塔を見る導者云ふ大館宗氏の墓と又極樂寺あり本寺は鑿山山と號し南都西大寺の末寺にして忍性は開基陸奥守平重時の建立なり此の切通は忍性は切開きしと云ふ太平記に新田義貞の大將大館次郎宗氏十萬餘騎して極樂寺の切通より向ふとあるは此は所あるか導者指して曰く極樂寺の地内西の方月影谷小阿佛屋敷ありと十六夜日記に東へくすむ處は月影谷と云ふある浦近江山本にて風いとあらし山寺の傍なれば長閑にすくくて浪の音松風たへせとあるは是なふんきと語りつゝ已小切通と出離せて左を顧みれば極樂寺村の南端小當り海小瀬去て稻を積きたる如きの山あり其の岬角は所謂稻村崎なり太平記に新田義貞廿一日の夜半小此處へ打益み明行く月に敵の陣と見給へば北へ切通まで山高く路險きに木戸を構へ垣柵と搔く數萬の兵陣

を雙べく並居たり南の稻村崎まで沙頭路狭きに浪打際まで逆茂木をまげく引懸て澳四五町が程に大船共を並べて矢倉をかき横矢射させんと構へたり誠に此陣の寄手叶はで引ぬらんも理也と見給へば義貞馬より下り給ひ海上を遙々と伏拜し龍神小向て祈誓し給ひ自ら佩給へる金造は太刀を抜き海中に投入し給ひければ其夜の月の入方に前々より更なる事もかかりける稻村崎磯に二十餘町干上りく平沙渺々たり横矢射んと構へたる數千の兵船も落行潮にさそはせて遙の澳に漂へると服元喬の詩に

稻村回岸海水高 旌旗閃々通州島

と旌旗閃々通州島の觀なきも稻村回岸海水高を觀せば自ら人をく追想不堪えざらまむ日蓮袈裟掛松及び大館宗氏主従十一人打死の場あり石を建て之を表せし補浦の茶店に踞けく小憩す時小十時あり稻村崎の海濱形も補の如し故に此の名なり此より七里濱も出づ七里濱の稻村崎より腰越の間小く右小童山あり山高からざるも連亘起伏

せど、左之沙濱一道波打際に沿ふ、所謂七里濱を、舊道の此沙濱を往  
 來せしも、今や沙濱は上ノ新道を築き、行人に便せど、其は七里と云ふ  
 者は、其の實は四十二町にして、古へ關東道は六町一里を以て計へしな  
 ど、此は地の古戰場に、後世まで刀劍の折、或は骸骨など、砂中より出  
 づることありしと云ふ、義貞、鎌倉を攻むるときも、新田の猛將、此の濱、手よ  
 り乗入せり、余等新道を取り行く、山海は、明朝を弄ぶれ、ならず、此  
 は地の歴史、多少の關係あるを以て、余一層は興味を覺えしめ、況  
 んや潮聲地を動し、般しく雷の如き、抑も亦余一層の愉快を與へ  
 たり、已にして一橋を過ぐ、水山手より道を横ぎり、流る、是を行合川と  
 す、日蓮龍口にて難く遭ひ、去時、奇瑞多き、因り、其の山を鎌倉へ告ぐる  
 使者と、又時頼は赦免の使者と、此の川は行合ふり、故に此は名を存せ  
 り、腰越お至せり、一簇の民家道を夾めり、北に向ふて支徑あり、極盡き地  
 勢稍々高き所、佛堂を見る、滿福寺と云ふ、此の寺地は昔源廷尉宿せり  
 れし處と云ふ、東鑑、元暦二年五月二十四日、源廷尉義經思ふ如くに朝敵

を平け訖ぬ、剩へ前内府と相具して參上せ、其の賞兼て疑はざる處に、日  
 來不義の聞へ有るお依りて、忽御氣色を蒙り、鎌倉中に入られず、腰越の  
 驛に於て、徒小日を渉るの間、愁鬱は餘に、因幡前司廣元に付して、一通の  
 款狀を頼朝へ奉るとあり、其狀の下書なりとて、今猶は寺に藏す、蓋し辨  
 慶の筆跡と云ふ、支徑の傍に石を建て、之を表せり、或は云ふ、是真筆に  
 非ず、滿福寺の西に當りて、又一佛堂を見る、龍口寺是と云ふ、堂内に日蓮首  
 の座の石あり、又堂西の山の根、日蓮の土籠と云へる巖窟あり、是よ  
 り先き途上、於て遙か、樹木森然たる、一孤嶋の海中、突兀するを、見  
 る、導者云ふ、是江嶋なり、此に至りて、左に折きて、浪打際に出づれば、白砂  
 一條、蜿蜒として、龍蛇の如く、蒼海を横ぎ、江嶋に至る、其の間、凡そ十  
 一町許、若夫を風濤相逐て、餘波沙上、小進り、行人或は衣裳を濕すと云  
 ふ、東鑑、建保四年正月十五日、相摸國江嶋、明神詫宣ありて、大海忽ち道  
 路に變き、仍て參詣人船の煩ひなしと云れ、其の以前は潮の退く處と  
 稀よし、今の如き砂道もなく、舟楫を須て參詣せしむらん、余等跳して

歩す、歩まるおとに足砂も没まる五六寸、嶋口に至り、石華表に入れば西町とて、地勢漸を以て高く、両側には市店併列し、婦女軒頭に臨み、異口同音に呼ぶて曰く、オヨリナサイ何屋デアリマス、々々々々々々々々々々々々々々々々と、喧然聞くに堪えず、余等一店に投し、荷物を託し、石級を攀ちて邊津宮に詣る、田寸津比賣命を祀る、建永元年僧良真將軍實朝を請ひ、社壇を創建せり、道に無熱池、蝦蟇石、福石かとあり、又宮の後、小碑石あり、高さ五尺許、廣さ二尺七寸、厚さ四寸、篆額は小篆に粗大篆を兼ね、大日本國江嶋靈迹建寺之記と三行に刻し、四傍に雲龍を彫り、極めて古雅の奇物なり、碑文の刻缺して分明なき、俗に江島屏風石と呼ぶ、相傳ふ土御門帝の御宇に、僧良真宋國に至り、慶仁禪師に見え、此の碑石を傳へて歸朝せしと、此より迂回して又石級を攀ちて中津宮に詣る、宮の嶋の絶頂より、西に下り、龍穴に至らんとす、右方の巖下に碧潭あり、海水湛えり、藍の如し、所謂兒淵是あり、昔建長寺の廣徳菴、小自体藏主と云へる僧あり、奥州志信の人あり、江嶋へ百日參詣れ時、雪下相承院に白菊と呼べる兒小邂逅し、忍びよるべき便りと云ひけれども、絶て諾せず、猶ほ切に聞えければ、白菊一夜忍び出で、此に來り、我をたづぬる人あらば見せよとて、

文の頃の創建なりと、此の間往々茶店を設け、名産具細工品を賣る、奥津宮より、西に下り、龍穴に至らんとす、右方の巖下に碧潭あり、海水湛えり、藍の如し、所謂兒淵是あり、昔建長寺の廣徳菴、小自体藏主と云へる僧あり、奥州志信の人あり、江嶋へ百日參詣れ時、雪下相承院に白菊と呼べる兒小邂逅し、忍びよるべき便りと云ひけれども、絶て諾せず、猶ほ切に聞えければ、白菊一夜忍び出で、此に來り、我をたづぬる人あらば見せよとて、

まらきくとまればさどれひと、は  
おもひいりえのままとこたへよ  
うきおととおもひいりえのままかけに  
すつるいのちはなみのまたくさ

と云へる二首の歌を扇に書き遺し、渡守に託し、此の淵に身を投せり、自体さづね來りて、此の山を聞き、亦詩歌を詠して、同一く此の淵に沈むと云ふ、己小磯邊小下まば、怪巖假塞たり、手等巖上と飛歩して磯邊を廻

り龍穴に至る龍穴と海岸の巖窟にて、若屋辨財天即ち是あり海水窟口に  
 に侵入去深然と聲おき左の巖脚を沿ふて道板を架去人行を通せ、窟  
 口南に向ふ番人むか窟不入るもれよと必き導者と燈火を附き予導者  
 よ尾まぐ先づ窟中不入る市兼叔翁睡き至る窟中暗黒咫尺辨せを頼む  
 所と僅か一點の燈火のみ窟中界あり左右に分き左の奥あり天照  
 皇大神須佐之男尊を祀り右の奥に市寸嶋比賣命多紀理比賣命田寸  
 津比賣命の三神を祀る窟口より左右に分る所まで深さ四十一間夫よ  
 り左の奥まで廿九間右の奥まで十四間あり左窟に入り少許にして清  
 泉湧き出づ亦橋を架して人行を通ず毎年一兩度海潮打入て窟中と  
 浸し汚物と洗ひ流すとす窟中に弘法大師の臥石あり嶋口より窟口に  
 至る長さ十一町十二間餘と云ふ窟を出で復さ磯邊に至る魚板石あり  
 石面平ホ一て魚板の如し石上よと眺矚れば海山の勝限りなき風致  
 を呈せり二碑あり服部南郭佐羽淡齋此詩を鐫る淡齋の詩小曰く、

瓊沙一路截波通、孤嶼峻峭峙海中、

漁者數人あり余等を擁一と曰く晴ふ海に入り石決明と捕へて進めん  
 と蓋し其の意金を要するに在るなり已に一と捷徑を取りて西町不出  
 で岩本樓に登り午飯と喫ま樓上亦風景不富む天朗なるときり富士は  
 高峰や烏帽子岩大巖小田原より箱根まで一目も望むべし本島は鎌倉  
 那の南端に位し海水四周を環り巖巖絶壁磯礁邊海に陸續し内地と林  
 巒峻峭として平坦の地なく東北の方海邊に民戸鱗比し之と東西に分  
 ちく東町西町と呼ぶ居民概ぬ旅泊漁業を以て生計を營めり江島譜不  
 云く、開化天皇六年四月江頭の南方に當りて海面一夜鳴動して碧空  
 に注ぎ黒雲騰騰として洋々たる百灘天地を分たせ中翌既に驚濤長く  
 静り暴風逼く盡きく孤島海上に涌き出づ今は江島是奇と抑も亦此  
 の嶋の開基は役小角及び泰燈道智空海等不末て養和二年文覺辨財天

潮浸龍王宮、寒月、花香天女廟、前風、  
 客樓新繪絲々白、神洞燒燈穗々紅、  
 幾入蓬萊諸秘蹟、不須幽討借仙僮、



と勸請し、頼朝之を信仰ありしより、鎌倉府將士の参拜も盛にあり、且つ海山の風光明媚なるを以て、遂に著名の靈場となしと云ふ、勿々樓を辭し、前砂路を經く、導者に別れ、腕車も乗り去る、午後二時卅分藤澤停車場に至る、乗券を購ひ、三時十二分發の流車も乗り、七時二十六分静岡に着き、此の日天氣濛々、富士岳雲烟の裏も埋没し、遂に其の姿を望む能はず、甚だ遺憾とす、紺屋町大東館に泊す、館は巍然たる洋風の新製にして、此の地旅館の玉弊なき、夜半大雨雷響交々至る、廿六日、天氣快霽、早起、樓上より東望すれば、富士岳、突元と、群山の表に出、白雪皚々、半峰以上を擁し、其の風致の瀟灑、酒おし、愛すべき、余として、萬金を抛つも敢て惜かざるの感、あふ、西行の歌、

ひくらしにやまぢのきのふまをましは  
ふとのたかねのゆきにぞありける

とは能く今朝の實景と詠せしと謂ふべし、朝食の後、淺間社に詣づ、本社には富士淺間の新宮なり、隨身門を入り、舞樂殿あり、次に奉幣殿あり、重樓

宏壯、環ふす、回廊を以てす、石階十餘級と拾ひ二社殿あり、一は大己貴命を祀り、一は木花開耶姫を祀る、輪換綺麗、丹碧輝煌、社右は則ち公園あり、奈古屋社あり、大歲御祖神を祀る、背後の山は、青葉岡、賤機山と稱せ、古人の詠多し、又麓山社あり、此の山に上をば、静岡市の内外一目の下に在り、今川義元の首塚、及び臨濟寺、此を距る遠かず、臨濟寺之頗る巨刹にて、東照公幼時此に在り、書と讀み字と習ひしと云、乗車の時刻己に逼るを以て行かず、歸路静岡の城郭を迴覽し、停車場に至る、抑も静岡の縣治の在る所おして、古の國府の地あり、足利氏の時、今川氏世々守護たり、徳川公此も老ひ、其の後城代を置き、鎮せしめ、府中と曰ふ、維新の後、静岡と更め、本國及び遠江伊豆二國を治む、市坊七十、居民三万六千八百、繁盛愛智縣に亞ぐと云ふ、午前七時卅五分、流笛一聲、車轡を軌道と走る、車窓より願望すれば、富士岳の道程益々遠さかるも、猶ほ其の白雪皚々、の姿と隠さず、宛も東海の美人故か、み粉装いて、別情依々我が行と送るもの、如し、九時四十五分濱松を經く、十二時廿三分岡崎を過ぎ、午後一時四

十五分名護屋より若す、名護屋は本州に愛智郡に地を占めて、市坊九十、居民十三万四千四百、街衢四七に達し、百貨輻湊す、本町と全區の中央にあて、東は縣廳の高度、峻々と聳え、西に停車場の益、笛時々に聞え、三府を除くの外、繁富殷盛、此の縣を第一とす、慶長中東照公侯伯に課して城を築かせ、第七子義直を封せしむ、爾來子孫相繼ぎ、維新の後名護屋縣と置き、後より愛智と改め、本國及び三河と治す、余等蕎麥店に至り、蕎麥を以て午食より充て、市謙と共に腕車と馳せて、名護屋城を見る、壘壘依然、所謂天守閣の巍乎として、雲を撃ぐるが如く、莖頭安まるに、金鱗を以て、す車夫曰く、男鯨一丈一尺、女鯨一丈五寸なり、往年金鱗三葉、盜難に罹る、以後の鐵網を以て之を掩ふ、故に飛躍遠きと射る、舊時の如く、あらずと、予始めて、曩日疑念を散す、徳川氏侯伯に課しく、此の城を築くや、加藤肥州請ふく、天守閣を築かる、開地は抜く凡そ廿五間、其の基石を疊みて壁とあり、高は一丈餘、築まるは五層閣と以てし、初層より上頭に至る、凡そ十七間、初層廣さ廿間、横少しく之を減し、二層亦同トく、三層似上稍々減し、五層濶

さ九間、横亦稍々減し、葺くに銅瓦と以てし、閣下の基石に加藤肥後守の字を鐫ると云ふ、我が熊本城の結構雅致ありて、雄偉宏壯なり、一と及ばざるも、流石と屈指の名城とるは負かざるなり、城郭を出で、小性橋と渡り、田徑を西に馳する一里許、上中村に至る、豊太閤加藤肥州の桑梓なり、先づ妙行寺に至る、乃ち清正の故宅よりして、本堂は公の靈像を奉ず、石碑あり、加藤肥後侯舊里碑の八字と刻し、其の下に公の功徳を記す、尾張儒臣秦鼎は撰あり、此より二町許にして、太閤山常泉寺あり、寺門に入れば、榕樹一株あり、太閤の手植せしものと云ふ、又古井あり、蓋し當時の物なり、石欄を以て之を縁し、札を掲げて曰く、秀吉公誕生水と、本堂に示公の肖像を奉ず、寺の近旁に太閤祠あり、近年創建せり、車夫祠右の藪林を指して曰く、傳へ言ふ太閤の臍帯を埋めを所と、嗚呼一郷小二英傑と出す、亦奇なる哉、物茂卿豊公は舊宅に寄題せる詩あり、

絶海樓船震大明、  
千山風雨時々惡、

寧知此地長柴荆、  
只作當年叱咤聲、

と、勿々車を廻り、暫の蕎麥店に還る、叔翁鶴首之に久し、直ちに停車場に至り、五時十分發の嵐車に投去、熱田驛に至り、鹿島客舎に泊る、此の夜隣室に書生四五名あり、戯談雜談、屢々吾眠を破る、廿七日晴、朝餐後逆旅主人前導し、熱田神宮に詣る、石橋を渡り、下馬鳥居に入る、旁々大石燈籠あり、佐久間大膳亮の獻する所なり、本社に官幣大社に、結構宏壯頗る古色あり、土用殿は宮簀媛命神劍を齋き祀り給ひし所なり、又西に並び、正殿に、天照皇大神、素盞鳴尊、日本武尊、宮簀媛命、建稻種命を合祀せり、拜殿内に一大明鏡を安坐、光芒四もに射る、多少の末社、本社に四周を擁し、亦皆古色を帯べり、本社歴年の久しき一目して知るを得べし、社旁に明年改造の標札並に圖面を掲げたり、史を按ずるに日本武尊東征の歸路、尾張に於て宮簀媛を娶り、近江膳吹山に妖賊ありと聞き、發せらるゝに臨み、草薙劍を解きて媛に授けて曰く、我異日必ず汝を迎へん、汝此の劍を寶とせよと、土用殿に齋き祀り給ひし神劍是なり、拜去畢り、八劍宮に詣り、八時十五分海津に至りて

端艇に乗り、九時嵐船共立丸に入る、船長さ十六間許、同室五六人、二客あり、島津某と云ふ、東京の人、雄辨湧くが如く、叔翁と利談史話、相得て舊れ如し、十一時四十分伊勢四ヶ市港を經る、午後一時十五分、余叔翁と甲板の上に出づ、東岸白砂一帯、蜿蜒迂曲して、數里に亘り、を々青松列立し、風光の明媚、宛然舞子濱の如く、余をして愛觀措かざらしむ、是間鼓ヶ浦とす、二時津港に休輪す、本船に乗りしもの、過半四ヶ市、或は津より上陸す、時に市諫突然來り、半ば階子を攀ち、遽ま呼ぶて曰く、予は津に上陸去て獨行せんと、勿々端艇に乗ら去る、蓋は波濤の險を避くるなり、船再々淺熊山に向ふて馳す、四時二十分神社港に達す、海上異狀なき、叔翁嗟然とて曰く、此の好天氣何ぞ波濤の險を憂ん、市諫の大早計亦何れ心ぞや、此より小舟に乗りて、今一色に渡り、青松併列の間を行く、凡そ十八町、路は御搦殿あり、太神宮、餌料は堅菰を焼きて納むる所なり、五時四十八分度會郡村に至り、松坂屋に投す、江村は一小市あり、二見浦に屬し、立石崎は即ち其れ、岸あり、此の夜一老嫗來り、喋々土産を賣る、

廿八日早起立石崎へ赴き、旭日の景色を望んとして、濱邊に沿ふて歩をす、いむをば白沙雪をふさげりて、清き渚の名をわらはし、青浪風にたいよ、ひて荒き濱邊の岸を驚かし、伊勢の三郎物見の極は、右手の山上に聳え、其の眺望いと佳かり、已おして第一華表を経て、第二華表に入れば、旁に石山元立し、山麓に一巨竇を穿ち、呼びて天岩戸とす、戸口に神扉を設けて、拜展せる所とす、第三華表に入れば、旁に一室を構へ、守札圖面なとて賣る、此と過ぎて、巖石海中に斗出の處に至れを、又華表を設けて、拜展所とす、所謂夫婦巖之海中に並立し、相距る四五丈、一の高さ一二丈、一は之の半と、注繩を以て環らし、他の奇状ありし、興玉石の二巖の間は位まで、八町斗の沖にあぞ、沙滿れを見えず、世俗之を神とし、拜せ、或は云ふ興玉の沖の蟹の意なりと、烏帽子巖、鼻巖、トサカ巖、屏風巖、獅子巖、來迎巖等、亦其の四旁に突出せり、天氣霽るゝに隨ひ、富士、白根、白山、御岳、駒嶽の諸峰、海外に浮ぶが如く見え渡ると云ふ、此は晨陰雲開くが如くして、開けず、遂に旭日の景色を望む能はず、憾みと抱き、旅舎に歸る、此の地

亦貝細工を賣る、而も其の工は江嶋に譲るが如し、五時卅分旅舎を發せ、腕車を馳する三里、古市に至る、一大市あり、予以爲く古市の油屋の、熱田宿より指定せし所あり、市諫或と投宿せんと、乃ち車夫を命じ、油屋に向ふと轉輪せしめ、已に至り、市諫の容貌を狀し、之を質す、一人曰く、本店昨夜は小松宮御泊より、一切他客を謝絶せりと、已にしく又一人曰く、今晨松嶋屋の手代來り、二人同行の客を尋ぬ、曰く一人は圓顔にしく七、十左右、一人の洋装にしく三十左右と、蓋は貴客あるらん、時に査官二人、速しく來り、昨夜は小松宮御泊の外、一切他客を禁せしやと尋ねつゝ、叔翁の帽章を見、突然叔翁に問つゝ曰く、君は熊本ある乎、叔翁曰く、然と、査官乃ち手簿を檢し、更にお叔翁及び余に質して曰く、君等の某なるや、叔翁曰く、然り、予亦曰く、然り、査官曰く、然らんば松嶋屋の旅客市下貴謙の君等の同行あるらん、君等の蹤跡を失ひ、探索を依頼せりと、是に於て直に車夫と走らせ、松嶋屋に至り、市諫の來車と促せり、油屋之家屋宏壯にして、古市旅舎の巨壁あり、予等室内を巡覽す、莊飾美麗と尽くし、屏風懸幅の如

き、殊に愛すべきものあり、已おして市譙來る、乃ち油屋と辭し、内宮お詣る、一大橋あり、之を宇治橋とせ、所謂五十鈴川源と神路山に發し、滾々といく來る、第一華表に至るを、老杉喬木鬱々葱々、其の幾百株あるを、知らば、皆是千年以外の物、倭ち人といて、悚然たらしむ、乃ち五十鈴川の流よ盪嗽去、第二華表を過ぐれば、御饌を調へる忌火屋殿あり、御輿宿りの外幣殿あり、其の他各殿、賽路と聯せり、冠木鳥居より第四門に入らば、又華表あり、玉串門に至り、賽客額突九拜す、玉串門の内に、番垣門と瑞垣門あり、四周は瑞垣を以て擁繞去、正殿中央に在り、東寶殿、西寶殿は正殿の左右お併列去、正殿の天照皇大神、相殿は天手力雄命、万幡豊秋津姫命を祀る、殿宇崇高き、葺くに茅茨を以て去、儉徳文らず、上古の遺風と存す、本殿は旁ら舊殿に摸去、新お殿宇を築き、半ば落成せり、土人云ふ本年之廿年おと再營の期に當れりと、史を按せるに、崇神天皇六年、皇女豊鍬入姫を去て、神鏡靈劔と倭笠縫邑を遷去て、天祖を祭らまゆらる、其の後、天祖の教およりて、豊鍬入姫國々を宮所を求先給ふ、年老給

ひ去によきて、垂仁天皇二十五年、皇女倭姫を去て、豊鍬入姫お代きて、天祖を祭らまゆらる、倭姫祭地を求先、菟田篠幡と詣り、轉去て近江に入り、美濃を経て、伊勢に至り給ひ去、適々神誨をきて曰く、吾是は國に居らんと欲すと、乃ち大和は笠縫邑より、此國の宇治お遷し奉りて、皇大神宮と稱せ、予等己に九拜去畢りて、境内を徘徊去、前路は出で、古市を経て外宮と詣る、此は間一里許、人烟稠密にして、毎歲四五月份、賽客群集し、旅舍商座、頗る繁昌せると云ふ、豊川橋を渡り、賽路に向ひ、第一華表お入れば、右お神庫あり、第二華表と過ぐば、傍ら小玉串所、及び手洗場、御池等あり、第三華表に進めば、正向お第四門と、又華表あり、玉串門に至り、賽客額突九拜す、番垣門、瑞垣門、其は他社殿は結構、内宮と同しく、神代は風趣を存去、巍然とあり、史を按するに、雄略天皇二十二年、大佐佐命を遣去、丹波與佐郡、眞名井原に在ます所の、豊受大神と奉迎し、之を伊勢山田に祀り奉ると是なり、相殿の天彦々火瓊々杵尊、天太玉命、天兒屋根命を祀る、境内亦清淨にして、老杉鬱々、蒼猶ほ暗きが如し、嗚呼、二宮の

歴代帝王の尊奉して太廟と爲し給ふ處、小く其の儉素なる彼は如く、他は神社佛閣の坊麗を窮極し、流俗の目と焜耀するに似せ、反つて其の崇敬すべきを覺えたり、時に雨脚點々衣袂を敲く、九拜去て境内を去り、外宮前なる宇仁館に至り小憩せ、抑も山田宇治、居民合せ二万二千餘、皆兩神宮を待ちく生活を爲せ、幕府の時、山田奉行を置き、神宮の事を司ふまむ、維新の後度會縣を置き、九年廢去、三重縣に併す、己小く馬車に至る、予等之に乗り、松坂驛に向ふ、時に二時三十分あり、宮川橋と渡る、此の川一名の度會川、或は豊宮川と云ふ、水源の伊勢大和紀伊の界、大臺原巴淵と發し、淵は二町、長さ三十里にして、頗る巨流あり、上野齋宮兩村を経て、櫛田川と渡る、時、雨頻り降り、松坂驛より遠し、馬車を下り、某店小休せ、此の地の飯高郡に屬し、山田を距る五里許、聞く此の地、故城あり、天正十六年蒲生氏郷の築く所にして、壘壁猶ほ存せりと、此より腕車小乗り代へ、轉輪二里許にして、雲津川の長橋と渡る、史に云く、延元三年北畠顯家、賊將高師重と雲津川に敗ると是なり、伊勢の國たる狭く去て長

し、故に勢南勢北、此の川を以て界と爲せと云ふ、午後六時津の岩田橋南詰客舎に着す、津の安濃津の省語にして、市坊八十餘、巨商家軒と並べ、本州の一都會なり、舊藤堂侯の治所にて、今三重縣廳を置く、藩國の時、前津坂孝純の墓、後に齋藤謙、土井恪等あり、文學最も盛なり、結城神社の八幡町に在り、宗廣と祀る、近年祠を建て、別格官幣社に列せ、社後、公の墓あり、文政中藤堂侯石を疊みて壇と爲し、上に穹碑を建て、碑面、結城神君之墓の五字を題すと、暮色已に暈るを以て往かき、此の夜醉客隣室に群集し、放歌雜談、喧嘩殊に甚し、蓋し參宮の歸路、一興を催すあり、廿九日霧、午前六時腕車に乗り、左に折せ、津の城郭と過ぐ、陸壘猶ほ依然たり、此は城や富田知信の築く所なり、知信と六万石を領す、故に城稍々小なり、藤堂侯の本城の伊賀上野に在り、此の地繁盛なるを以て、此は城に移り居りしと云ふ、轉輪、梓々、窪田を経て、豊久野に至る、錢掛松あり、或の云ふ、雄略天皇の時、丹波より豊受大神を勢州へ遷し奉るとき、鈴鹿は神戸よりして、此の野に行宮を作し休むらせ給ふ、其の跡を失は

ざる爲りて、去るしの松を植ゑたゞ、其の後に人々此より來て、大神宮を遙拜し、御供料として松の枝を錢を掛けて、米穀の榮へを祈りしへ、錢掛の名ありと、又云ふ、昔此の野に豊斟淳尊の社ありしが、後此の社の失せしゆへ、其跡へ松を植ゑて錢掛松と成りたるなまじと、又云ふ、小野篁の命姫故ありて此の松を錢を掛けし、其の錢化去て蛇となりしと、其れ説孰れか真なるを知らず、今一小堂の内は數尺の枯木あり、錢を掛け去もの最と多々、此より、標本、楠原を過ぎて、關驛不出づ、古の所謂鈴鹿關是也、往古相阪關を近江に、不破關を美濃に、此は關を此小堂く之と日本の三關と稱す、驛右小地藏堂あり、之を關地藏と謂ふ、一休禪師の開眼は係る、世説小文明年中、尊像再興の時、一休の開東下向を見かけ、開眼を請ふ、一休をゆるる尊像の一段臺の上と、佛は首へまゝ、か溺りし、開眼のすみたりとて、直ちに去れど、衆人驚き水をろ、ぎ清めければ、倏ち物怪起せり、人々再び驚き、速く一休の跡を追ひ、まか々々の事を述べて歎きける小僧、一休乃ち賴鼻樞を脱し、之と與へて曰く、地藏の首

小纏ひ置けよと、初の奇特に懲りて教の如く纏ひしを、物怪の怠りしと、一休灑落の風亦以て見るべからず、腕車を捨て、徒歩し、市の瀬村に至る、一老翁あり、突然來り曰ふ、鈴鹿嶺甚だ險なり、請ふ貴客の荷物を負ひんと、乃ち之に託す、行く數町おして、一溪水を隔て、岩振山あり、山お對して一亭を構へ、山を望む所とせ、或る人此の山を狀去て曰く、石身土を戴き、雜樹横生、旁ら怪巖錯互、狻猊の巨口を張りて、屹んと欲するが如し、猛士の足と跛て立つが如し、或は大石上俯下嵌中に、觀音佛を像す、或は飛崑突出十仞ばり、藤蘿其れ腰を纏繞し、佛跣坐お類する者あり、家屋傾顛の如き者あり、奇體異形名狀すべからず、俗に之を狩野筆捨山と謂ふ、眺睨の間、幾んど竊愁と忘る、予亭前より佇望す、山他の奇狀、かく、所謂羈愁と忘る者、筆を捨る所以の者と、何點に、あるを知らず、或は雜樹横生、其の眞を没する歟、杳掛村に至る、已小峰巒重疊の中に入る、予靴を脱して、草鞋を穿ち、進みて坂下驛に至り、平野店に投して、午食す、時よ午下一時を、行く數町許鈴鹿河あり、河の鈴鹿山下より出づ、俗に八十八

瀬川と謂ふ道と夾みて流れ、或は右し或は左す、已おいて一峰前に當る、又一華表を見る、鈴鹿神社是なり、磴道數十級あり、旁ら小坂下驛の人、孝子萬吉の記念碑、建築の標あり、予市談と磴道と攀ち、社頭に至る、老杉森々を去て社を擁せり、一拜して社後より木道又出づをば、身ハ已お高地に位せど、華表前より地勢益々急峻にして、鈴鹿峠に至る八町の間、二十七曲と成せりと、是と多津加美坂と云ふ予、等勇を鼓して登る、歩々來路を下瞰すをば、初め仰望せし峰巒ハ、皆脚下に在り、谷深く樹茂と、冷風颯然と、其の間よど起り、人の衣袂を襲ふ、道峻にして、體勞もるも、流汗背を、濡まに至らず、峠に達せ、坂將軍の祠あり、又茶肆十數家、道の両旁に併列せ、此の峠を伊勢近江の境界とす、抑も鈴鹿ハ名稱たる、清見原天皇、大友皇子小築はれ、吉野より鹿深を経く、鈴鹿河に至り給ふ、時に山中に燈火の見えけるが、忽ち一人の翁現とれく、天皇に謁し、我ハ此の山の神大山祇ありとく、案内又添ひけるに、水増りて渡りがたし、偶々鹿來りて天皇を負ひ、驛路の鈴を付けて渡しぬ、是より鈴鹿と號すとなん、峠より漸

を以て下る、山間往々開墾して茶樹を植ゑり、製茶所兩三家あり、甲賀郡山中、猪鼻兩村を経て、蟹坂に至る、名物蟹鮓あり、昔此の谷に大なる蟹あり、妖をなし人を害ふ、旅僧之に遇ふて佛經を説き、偽りて之を殺せ、其の塚を築きしとぞ、某店又小憩し、一茶して出づ、田村河を渡り、行く數十歩にして、一徑北と指して通ず、兩側杉檜森然、直立數十丈、銅華表に入らば、殿に至る、額あり大名垂宇宙の五字を記す、又進みて、木華表に入れば、木橋あり、谷川の上に架す、之と渡り、石級と上をば、一樓門あり、門内と本社とす、是亦坂將軍と祀る、將軍剛勇衆に超え、敵々與賊と誅伐せ、又逆臣仲成と射殺し、鈴鹿山の群盜と誅し、遂に天下の憂を除く、其の靈を此に祀る、蓋し亦以へあるなり、一拜して去り、土山驛に至る、四時四十分なり、是より腕車と馳せ、水口驛を経て、横田川を渡り、田川驛小出で、夜に入り、石部驛小着し、扇屋小投宿せ、

卅日露、午前六時四十分、腕車と發し、栗太郡六地蔵、小野目川各村を経て、草津驛小抵る、此の間三上山を見る、一名蜈蚣山、俗に藤原秀郷蜈蚣と射



る事を傳ふ、此の山嶺然峭峙、形ち富士峰に似たり、堯孝法印の歌よ、

おもひたつふじは縁とはきおもかけを

ちかくみかみのやまればのくも

と、草津驛より中山道、木曾海道の岐路あり、石を建て、之を標す、予等腕車を下り、某店に小憩す、此地に名物乳母餅あり、昔近江源氏の正統、佐々木義賢永祿十二年九月信長に滅さる、其の遺孫寛永の頃まで、郷代官の如きものあり、まが事よりて、誅滅せらる、其の時幼兒三歳あるあり、最期に臨みて、其の乳母に託せり、乳母其の子を抱き、背戸に藪より切り抜け、身を潜むること月あり、さきと養育のたよりあり、餅を製し、往還の道に持ち出さ、大名高家の乗物などにすべり、懐きたる子と由緒ある子あり、其れ養々さよとて打歎きけを、自ら其れ信實を感て、之を買ふもの多く、後に、小店を開く、之を求むること往來に例とあり、乳母が餅とぞもてはやまけるとある、又腕車を乗り、驛を出づ、道傍に野路玉川に古跡あり、日本六の玉川の一あり、俊頼の歌に、

あすもこんのぢれたまがはさぎこえて

いろなきなみあつきやどりけり

と、今之僅に寸池を遺せるのみ、此の間長松道を夾み、左に琵琶湖を見る、神前村を過だて、橋本村に至る、一長橋を湖上より架き、長さ九十七間中嶋より又一橋を架す、長さ三十六間、勢田の橋是なり、琵琶湖に水此の橋南より、溪流とある、橋は左に龍神社、秀郷社あり、大日本史に壬申の乱、諸將進みて瀬田に至る、帝衆と悉くして橋西に陣し、板と撤し、之を拒むと、此れ時己に板橋ありしものか、橋を渡れを鳥井川村とす、一小市あり、市中より南折數十歩ありて大友宮あり、又十二三町あり、石山寺あり、一徑山に隨ひ水あり、石山寺大門より通き、門前稍々廣く、石燈籠兩基對立す、予等腕車を下り、大門に入らば、左右に房院あり、道の中央に石を疊み、兩旁に楓樹を植う、此を過り、山下に石骨突出、參差排立し、其の色青黒なり、所謂胎内くわいと云ふ者あり、其の旁に石段六十六を築ち、上平地あり、面あり、巨石紛錯して、排列するを見る、大なる者、厦屋の

如く形ち奇にして、娟麗なり、石山は名を得る所以、此に、ある乎、御影堂、  
 毘沙門堂、其は他一二棟併列し、其は北石燈十九級を攀ちて、本堂あり、頗  
 る闕偉あり、中小房標あり、紫式部源氏之間と云ふ、式部此の寺、小參籠  
 して、源氏物語を草せし所あり、本堂より右折して十一級を上る、又左折  
 して十一級を上る、又數歩にして二十二級を上る、此の間經藏、經塔、紫式  
 部塔、願朝塔、寶塔等あり、寶塔の東、稍々平地に、玄て、月見亭あり、亭下、  
 則ち斷崖に、玄て、湖の下流に、枕、玄、前岸、岡、阜、鼓、隨、其の北、小、聯、綿、玄、勢、  
 田の長橋水、ふ、跨り、虹、竈の如く、橋北、の、大、湖、渺、漫、時、に、白、帆、來、往、玄、鷗、鷺、の、  
 波、間、に、逍、遙、する、か、と、疑、なる、若、夫、れ、之、に、加、ふる、に、月、夜、の、景、を、以、て、す、れ、  
 ば、所謂、石、山、寺、の、秋、月、猶、ほ、一、厨、の、見、も、の、なら、ん、式、部、の、物、語、を、綴、り、玄、と、  
 き、湖、れ、方、は、る、々、と、見、渡、され、て、心、澄、み、様、々、れ、風、情、眼、に、遮、り、心、お、浮、み、  
 ける、を、取、あ、へ、ず、大、般、若、の、料、紙、の、内、陣、に、ある、と、申、請、て、思、ひ、あ、ぬ、風、情、  
 を、書、つ、い、け、たり、玄、と、實、お、斯、く、や、と、想、像、玄、つ、い、石、級、を、下、り、て、鐘、樓、お、至、  
 る、鐘、樓、の、中、壇、の、地、お、り、石、山、の、古、説、に、此、の、鐘、の、昔、龍、宮、より、あ、がり、玄

と、又石級を下りて、御影堂の前、又出で、大門に至りて、茶店、小憩す、抑も  
 本寺は石光山と稱し、聖武天皇の御願、良弁僧正の開基あり、本尊の二  
 臂如意輪觀音、長け六寸の金銅にて、聖德太子の持尊あり、良弁靈佛を恐  
 め、て、丈六の巨像と造りて、其の腹内、お本尊と藏めしと云ふ、腕、車、と、廻、ら、  
 せ、て、前、路、と、取、り、湖、水、に、沿、ふ、て、上、り、粟、津、の、原、お、至、る、粟、津、の、列、松、と、翠、步、障、  
 の、如、く、し、て、清、風、颯、然、たり、昔、の、木、曾、殿、粟、津、の、終、り、お、と、心、の、猛、く、思、へ、ど、  
 も、連、の、極、め、の、悲、し、さ、の、主、從、二、騎、に、うち、か、さ、せ、兼、平、の、勤、め、も、實、に、や、と、  
 て、向、ひ、の、岡、の、松、と、さ、し、薄、氷、張、り、深、田、あり、玄、と、も、知、ら、で、馬、を、颯、と、馳、  
 入、ま、て、今、井、の、何、如、と、思、ひ、つ、い、見、返、を、け、る、と、過、た、す、石、田、爲、久、が、能、く、引、  
 ら、攻、つ、矢、に、額、を、射、させ、く、最、期、を、こ、そ、は、遂、げ、に、け、を、兼、平、今、は、是、ま、で、と、  
 さん、々、に、戦、ひ、く、日、本、一、の、剛、の、者、の、主、君、の、御、供、に、自、害、する、手、本、に、せ、  
 よ、や、東、八、箇、國、の、殿、ら、ら、と、太、刀、の、鋒、と、口、に、銜、み、馬、よ、と、落、ち、貫、か、せ、て、  
 ぞ、失、せ、に、ける、今、や、田、間、遙、か、お、一、墓、石、を、認、む、是、なん、兼、平、の、塚、と、ぞ、腕、車、  
 轉、帳、し、て、膳、所、を、過、ぐ、舊、本、多、候、の、治、所、に、玄、と、城、趾、今、の、監、獄、と、なる、又、若

宮八幡宮、新羅神社の前を過ぎて、馬場村に至り、義仲寺にて車を下り、義仲墳に謁せ、碑あり、大學頭林衡の文を鐫る、其の文、義仲と以て、項羽に比す、義仲の墳、小隣とて、芭蕉墳、及び芭蕉堂あり、堂内、其の木像を安ず、又門下三十六人の秀句とあつめ、門下の血脈をたづねて書せしめし、小額を列掲せし、一歳芭蕉西國行脚、お趣かんとて、大坂に下り病没せしかば、門人、其角を初、先十輩をかり、難波よと棺を擔きて、此處に葬る、是兼ての遺言なりしと、此を去り、忽ち一松樹市中に偃蹇たるを見る、札と掲げて呼次松の三字を記せ、蓋し幸崎の松と呼び次ぎしものあり、十二時十分大津停車場に至る、西京發車は刻猶早し、是に於て市中を逍遙し、長等神社の旁より石燈百六十級を拾ふて三井寺に至る、余初め三井寺の飛閣を湖上よと仰ぎしが、今や飛閣上よと流所すれば、比叡比良諸峯よと遠近大小の山嶽重疊、蜿蜒して大湖の周圍を擁し、時は、海船煙を噴く、去と、白帆風を含みて來り、其の光景愛を割くに忍びざるものあり、眺望の快裕なる未だ此の地よ過ぐるものあらざるなり、境内頗る廣く、所謂辨

慶鐘は、此と距る二町許あり、高さ五尺五寸、厚さ三寸五分、龍頭一尺一寸五分、口徑四尺一寸、此の鐘の奇説、人口小、階爰する所なき、當山の原と大友皇子の殿舎より、莊園城邑は地をを、古へ園城寺と號し、古來兵革あり、地あり、境内を出で、疏水工事を見る、是近年に起工にして、湖水と西京小引き、運輸は便を計る、唐崎は孤松と、大津を距る北一里半許あり、予叔翁と腕車を買ひ、將小行かんとして、市謙袂を振ふて去る、是に於て行くを果さず、又前路を踏みて停車場に至り、遙かに湖水を隔て、唐崎の孤松を望み、つゝ、明智光俊が山崎合戦敗せ、坂本城へ落ち行く時、大津よと羽柴方堀秀政に圍まれ、詮方なく、馬と湖水に乗り込み、狩野永徳が書せし雲龍の陣羽織に、三つ山の兜を穿ち、威風凛々として、湖上を渡り、唐崎松の汀に達せしは、古今の雄將なりと、敵味方賞嘆せざるは、あかりいことと想ふ中に、深笛駁船已に發車の刻を報す、乃ち瀧車に乗り、三時四十五分を以て轉輪し、四時四十五分、西京東六條烏丸通伊勢客舎に投す

三十一日晴、午前七時より巡覽す、先づ大和大路なる瀧尾神社に詣ふで、  
 惠日山東福寺に至る、本寺の五山の第四にして、開山の聖一國師諱之辨  
 圓、峻州藤科の人など、境内は景清齋庭鳥燈籠、小野小町玉章地藏尊並に  
 百歳井、通天橋、月輪殿下兼實の本廟等あり、通天橋は溪上に架せる廊橋  
 にして、溪と洗玉欄と云ふ、楓樹列植し、季秋の候は紅葉霜に飽き、滿溪錦  
 を織り、一層の奇觀ならん、旁らに石を建て刻して曰く、安政丙辰仲春、植  
 楓千株、以供於虛白禪師之靈と、此と去りて蓮華王院三十三間堂に至る、  
 後白河院御願平愈の御願として、平忠盛役と董し、千體御堂を建立す、即  
 ち是なり、堂の東に向ひ、南北六十六間、二間を隔て柱を立たせ、三十三  
 間堂の名あり、本尊の千手觀音は坐像にして、一丈八尺康慶の作なり、二  
 十八部衆各々壇上に安置せ、千手觀音一千體は、堂内左右に星列し、作の  
 運慶洪慶ありとぞ、堂前に夜泣泉あり、傍らに池あり、燕子花を植ふ、本堂  
 大矢數の濫觴は、新熊野觀音寺の別當梅坊、射術を好み、八坂の青塚は、的  
 場へ通ふ歸るさに、當寺の後堂に休み、射初めより、連年諸候は家臣出

る、射術の譽を争ふ、尾州よりの星野勘左衛門八千箭を通し、紀州の佐  
 和大八郎は總矢一万三千五十三、通矢八千百三十三と得たり、此の二人  
 を五壁とす、其の他矢數を額面に録し、堂の前後に列掲せしもの幾個と  
 知らず、尋て見真大師をば、くい眞影開帳場に至り、眞影の開帳を乞ひ、此  
 より豐國神社に至る、本社と方廣寺大佛殿の境内に在り、豐臣秀吉を祀  
 る、維新後の建築なり、社前の唐門の伏見舊桃山城の門に、豊國大明神  
 の額と、舊豐國神社と掲けたりし、後陽成天皇の宸翰なりと、廟の背後  
 阿彌陀峯に在り、社の側は、大佛の半像を安ず、又豐公の護持尊大黒天、鐘  
 樓等あり、平相國清盛六波羅の館の、大佛殿の地を中央にして、北は五條、  
 南は七條を限り、大和大路を門前とす、殿舎に、珠玉を鏤め、樓閣に、香  
 木を聚め、一時の繁華を極めたぞ、滅亡の後も、此第ありて、北條泰時、同時  
 房こゝに來りて、政道を行ふ、正慶二年五月、千種忠顯、赤松良忠、大軍と以  
 て六波羅を攻め敗る、北條時益、仲時、後伏見上皇及び、新帝を供奉し  
 て、關東へ逃げ趨る、此の時六波羅の館斷絶せしと云ふ、西大谷と經る、眞

宗開山親鸞聖人は廟所あり、門前ふ石橋あり、華剛石を以て架設し、橋下  
 小水路二穴を鑿り、石橋を渡り、境内を経て、烏邊山に出づをば、墓碑累  
 々たり、一寺を過ぐ、寺中ふ於俊傳兵衛は墓あり、音羽山清水寺に至る、仁  
 王門の次は西門あり、西門ふ入をを、三重塔、隨求堂、經堂、田村堂、朝倉堂、大  
 黒堂等羅列す、藏橋を渡り、中門に入る、即ち本堂なり、十一面千手千眼觀  
 世音菩薩と安坐、脇士は毘沙門天、地藏尊なり、堂の崖は據りて構へ、飛檐  
 霄と拂ひ、眺眺は美あり、堂後の山頭に地主神社を祀る堂と出で、歩と  
 進め、右に折るをば、釋迦堂、阿彌陀堂、奥は院あり、亦崖は據りて構へ、其の  
 基礎本堂と同じく最も高くして、下を臨み、目眩き、戰栗は心地せり、石  
 級と下り、崖下は至れを、所謂音羽瀧あり、石鏡三個と架し、水鏡口より下  
 り、落るのみ、他は奇狀なを、復た石級と上り、本堂に至る、時に寫眞眼鏡を  
 据え、喋々觀と勸むるも、れあり、叔翁一見去て予は謂つて云く、見山瀑布  
 此景、宛然其の境を踏むが如き、汝も亦一見往日、遺憾を償へよ、予乃ち  
 眼鏡に對きて之を見る、第一鏡の、兩岸皆巨石に、去て、水其の間と貫き、躍

て、激し、激して、怒るの狀あり、鏡主曰く、含滿淵、第二鏡の、瀑口に、巖あり、  
 飛泉之に、觸れ、分れて、二道となり、飛沫四も、不散じ、烟れ、如く、霧れ、如く、曰  
 く、霧降、瀑、第三鏡の、水數級と、かき、巖面を、奔注し、宛然、布と、引く、よ、似たり、  
 曰く、若子、瀑、第四鏡の、峻壁、峭絶、形ち、窺突に、類し、瀑、其の間、懸り、噴、怒、奔、  
 瀧、白虹の、下、飲するが、如し、殊、不、觀、背の、勝あり、曰く、裏、見、瀑、第五鏡の、水、盛、  
 に、絶巖の、中央を、飛下し、匹、練、製、曳の、如く、大聲、鞞、響、山谷に、震ひ、潰、珠、跳、擲、  
 天空、不、飛び、山中、第一の、偉觀と、呈するもの、に、似たり、曰く、華嚴、瀑、其の、他、  
 慈觀、瀑、般若、瀑、方、等、瀑、龍頭、瀑、湯、瀑、中、禪、寺、湖、等、見、山の、勝、一、眼、鏡、の、中、に、網、  
 羅、い、寸、歩を、勞、せ、せ、して、其の、概を、領、せ、い、む、何、を、圖、ふ、ん、此の、地、に、於て、見、  
 山の、遺、憾を、償、い、ん、と、い、一、一、觀を、盡、く、して、去る、抑も、清水寺の、今を、距る、  
 千八十三、年、即ち、大同二年の、頃、征夷、將軍、田村、磨の、建立にて、其の、後、應仁、  
 の、兵、變、不、羅り、文明、年中、本願上人、再、建、又、寛永六年、炎上、の後、徳川三代、將、  
 軍の、造、營あり、今の、諸伽藍、是なり、仁王門、摩利支、天堂、鐘樓、馬、駐の、西、筒所、  
 の、應仁、後、再興の、儘、不、て、寛永の、炎上、不、免る、所なりと云ふ、此より、八坂塔

及び慶長年中に太閤の北の政所建立の菩提所なる、鷲峰山高臺寺を見  
て、八坂神社に詣つ、本社と素盞鳴尊、稻田姫八王子と合祀す、一大石華表  
に入せば、樓門あり、社殿宏偉にして、塗るに丹雘を以てす、攝社末社多く、  
賽人絶えき、本社の裏門より順路を以て華頂山知恩院に至る、本院は淨  
土宗の本山なり、宏壯なる山門を構へ、前路の一簇の松林にして、賽路翁  
鬱たり、石級を攀ちて山門に入り、又石級を攀ちて本堂に至り、寺僧に乞  
ふて堂内を巡覽す、襖の畫、其の他、夕絳の間筆、錄せしものあり、

- 後奈良天皇宸筆の額、○圓光大師の像、○鶴畫、狩野尚信筆、徳川氏歴代神牌、○家光は愛庭、○御成殿据置の小屏風一雙、狩野信政、訥又平畫、○三方真向の猫、古法眼元信筆、○雪中山水、狩野永徳筆、○五葉媛小松、庭前、○花頂宮玉座、雪中の畫、尚信筆、○家康家光靈屋、○十六羅漢畫像、信政筆、○血天井、手足の痕と存老、○山水人物、(元信筆)、○白菊拔雀の畫、○鶯張複道、○堂檜の破傘、

鐘樓の本堂の東南に在り、巨鐘厚さ九寸五分、高九尺五寸、長さ壹丈六

尺、廻り二丈八尺五寸、口方二万貫、之と撞けば、其の響洛中を徹して西山に達すると云ふ、歸路京極通誓願寺に至る、此の地や、西京第一繁昌の處にして、演劇、歌曲、輕業、手品、其他珍禽奇獸、苟くも世に觀物となるものは、皆此に群集し、太鼓三絃等、其聲日夜喧囂として、觀客山を爲す、予等双手之を排き、僅に線路を得て、六時四十五分客舎に歸る、六月一日薄曇、午前七時予市議と曉車に乗る、竹田街道に出づ、道傍に一川あり、高瀬川と云ふ、所謂高瀬船送りと云ふ者、續々絶えず、伏見町に至り、觀月橋を渡り、宇治川を沿ふて上り、九時三十分、平等院に達す、客舎を距る三里許、平等院は宇治橋の南より、初め左大臣融の別荘なり、陽成院此の地に行宮を建て、宇治院と號せらる、長徳四年、御堂關白此院を得て山莊とし、子息宇治關白頼通、梵刹と号し、平等院と號せ、院の入口に所謂扇芝あり、源三位頼政自畫の地なり、石欄を以て繞らし、旁に二石を立つ、一は和歌を刻す、

はなさきてみとあるならばのち、れよに

ものゝふのなもいかでのこらん

扇芝に對して一堂あり、宛然大甍の佃匂をるが如し、釣殿觀音堂是るを、宇治院釣堂を建て釣を垂を給ひし所なり、又頼政は駒麿、松鑑懸松と云へるものあり、此を過ぎ、頼政の墓あり、鳳凰堂に至る、其の構造、鳳凰を象せ、左右の高樓回廊を兩翼とし、後背の廊を尾とす、棟の上には金銅を以て造り、雄雌は鳳凰とて、風ふ隨ふて舞ふ、故に鳳凰堂は名あり、永承年中頼通建立の後、曾て同祿の災なし、堂前小池あり、阿字池と稱す、惠仁僧都の穿ちし所と云ふ、旁々に一壇を構へて、製茶紀念碑を建つ、抑も宇治は里の茶の名産あり、方今貿易の一品とある、碑は明治廿年に設くる所あり、尋で本堂に至り、寺僧に乞ひ、寶物を觀る、其の大畧を、

○六字名號懸幅、弘法大師眞蹟、○鳳凰堂扉銘文卷物、左大臣俊房筆、○頼政の白旗懸幅、寂山覺阿上人筆、○頼政眞蹟懸幅、○頼政鑑兜、並に乗鞍、軍頭巾、○頼政鶴退治雷上動弓、○蜻蛉切槍、木多忠勝所持、○頼政の旗竿、支那達賴產、○頼政畫像、備前綱政筆、○全上、右

大弁行隆筆、○平等院形名號益、(古朝日燒)、○柴船香爐、○平等院古瓦、○都府樓古瓦、○平等院三字の勅額、(後冷泉天皇筆)、○天滿宮神像、(自作)、○日丸名號、源空上人筆、佐々木三郎所持、

見畢、寺僧子等を一室に引きて茶を供す、暫時談話して去り、復た宇治橋に至る、橋極めて疎朴たり、即ち頼政平軍を拒く處あり、其の後頼朝は義仲を討するや、義仲は軍宇治を拒く、義經兵を督して之に當る、時に平等院は小島崎より武者二騎、駆け出で流を乱して進む、衆目と注て之を見るに、木蘭地は直垂に、黒革威の鎧、三枚甲の緒を、玄め、滋藤弓の中を取り、廿四差たる小黒の矢負ひ、練錦の太刀佩て、鎌倉殿より賜り、る、磨と云ふ名馬、黒塗の鞍置て騎たりけるは、梶原景季と、この知られ、けを、鶴の直垂、小櫻を、黄に返したる鎧に、鍬形打たる兜と、穿ち、笛藤弓、廿四差、る石打の征矢頭、高き負ひ、臙物造りの太刀、帯ひて、同じく、鎌倉殿より賜りける池月に、黄覆輪の鞍置て騎たりけるは、佐々木高綱と、この知らせけれ、高綱後より景季と給き、起乗して、過ぎ、向の岸へ打上り、

鏡踏張り鞍馬に立ち上り、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣を、大音、  
 に名乗るか、功名を争ひ、遠き昔の縁の跡、宇治の河流と去り、盡き、今  
 猶ほ此の地を踏むものを、して、追想に堪はざらしむ、橋を渡りて、黄檗山  
 萬福寺に赴く、途上見る所大抵茶園なり、爾俄に至る、車上母衣を覆ふて  
 之を凌ぐ、寺に達する頃、雨益々急なり、萬福寺は一大寺院にして、山門に  
 入せば、天三殿あり、次を大雄寶殿とす、次を法堂とす、次を威徳殿とす、而  
 宏く各堂其の左右に併列し、殿堂皆額或は柱札を掲げ、額に、殿堂の名  
 號、柱札に、聯句を鐫る、皆木庵、隱元、高泉、千果等の書なり、加之境内清淨  
 にして、寸塵を絶ち、自ら一種の雅致を具ふ、蓋し開山隱元の明人なれば、  
 精舎の經營、異風を摸したるもの歟、車を轉し復た觀月橋に至り、茶店に  
 小憩し、車を捨ぐ、徒歩す、時、雨歇み、道路泥濘、午後二時半、寓小歸る、叔  
 翁鶴首之より久し、  
 二日微雨、午前八時、客舎を辞し、腕車を馳せ、二條城を見る、本城の慶長七  
 年、徳川家康の築造せし所にして、明治十九年に離宮となる、西陣を經る、

明徳の頃、山名細川両氏合戦時、此れ邊を西陣と名、其の名今不遺れ  
 り、所謂西陣織と云、此の地の産物あり、と北野天満宮小詣る、宮殿金飾燦  
 爛とし、香火極めて盛んなる、本社、天曆九年の創建にして、今の社の  
 豊臣秀頼の建設に係ると云ふ、後門を出で、一橋を渡り、平野社と拜し、  
 北行田間の小徑を過ぎて、鹿苑寺に至る、寺の衣笠山の麓に在り、足利義  
 満の創建せし所たり、義満、泥金一間を起し、故小又金閣寺と稱す、閣は三  
 層に、玄々高さ三丈許、第一層を法水院と號し、船院の三尊、雲慶作夢窓、國  
 師の像及び道義の塑像を安す、第二層を潮音洞と號し、岩屋觀音、(惠心作)  
 脇立四天王、茶海作を安す、第三層を究竟頂と號す、後小松帝の勅額を  
 掲ぐ、閣内の悉く泥金を粧ひ、玄々、歲月を經るの久々、金色剝落、復た目  
 と奪ふの觀か、玄々、義満祝髮して、名を道義と改め、禪理を夢窓に學び、遂  
 此、小老もると云ふ、閣前に池あり、鏡湖池と曰ふ、池廣く、群魚出沒し、  
 高山、石赤松、石丸山、八海、石夜泊、石出龜、石入龜、石等、其間に、粧點、玄、喬木、森  
 然、苑外を擁去、庭園池泉、頗る古色あり、閣上より眺、臨す、を、一層の佳致、



あると覺ゆ閣を下り苑中を巡覽き一小祠あり大黒天を祀る(空海作旁  
かに冷泉あり源々石罅より流れ出づ標して銀化泉と曰ふ義滿は茶水  
あり又岩下泉あり壺嗽に充て去と云ふ行く十數歩小瀑雖も懸り瑤然  
聲あり龍門瀑と曰ふ其れ前小鯉魚石あり勢ひ飛躍せんと欲す此と過  
ぎて左に折れ石磴と拾ふ十數級にして又小池あり安眠澤と曰ふ澤中  
に一尖塔あり白蛇冢と曰ふ此より一徑夕佳亭に通す亭ハ義滿茗譙れ  
處たり掲額にハ即休二字を書し南天の床柱ハ萩の棚等あり結構亦古  
雅なり下りて方丈に至る什物悉く各室に陳列し縦覽に供す又其の大  
畧を擧ぐむを

○常山全景懸幅、○夢窓國師の書二幅、○山水花鳥人物襖畫(狩野  
探幽筆)○山水人物懸幅壹對、(蕭白筆)○寂漆和尚真筆、○蜀棧道懸  
幅、(明休永筆)○佛像、(趙傳子筆)○柘榴に鳥を畫幅、(仙令筆)○佛像、(吳  
伯承筆)○達磨、(緒方光輪筆)○永平寺開山老元禪師書幅、○陸舟の  
松、(庭前小在り形ち殆ど船の如し、故又名く)○陸舟二字の額面、(朝

鮮海峯筆)○天下名苑四字の額面、(山岡鐵舟筆)○金地草花屏風一  
雙、(宗阿彌筆)○紺紙金泥法華經譬喻品壹軸、(百達上人筆)○元明人  
書合裝横卷、○傳教大師、智證大師、惠心僧都、中將姫、蓮如上人、光明  
皇后、弘法大師真蹟、聚張小屏風、○信濃金山寺歸道和尚書幅、○信  
濃天目山中法禪師書幅、○南禪寺開山一散國師書幅、○一休和尚  
自畫自贊懸幅、○兩脚踏地隻手指天の人物畫、(可王禪師筆)○義政  
の冠、○義滿の笏、○後水尾帝法輪和尚の合書幅、○菅公畫像、(自筆)  
○後水尾帝下賜座蒲團、○扇面散らし屏風、(狩野永徳筆)○承露盤、  
○文正元年冬至染筆懸幅、(一休和尚筆)○當寺傳來の貝類、○萬歲  
樂舞の木像二個、(大江定基作)○秦漢陽宮の瓦硯、○義政所持の菓  
子箱、並に短冊函、○太閤秀吉おもつ燭臺、

休息所に至まば、茶菓の饗應あり、此の室には古畫幅を懸け廻らせり、己  
にして此を辭し、車を馳せて又北野社前に至り、某店に入りて午飯を喫  
し、此より舊皇居の後路を経て、同志社學院を過ぎ、禪宗五山の一なる

相國寺を見る、又進みて下加茂社小詣る、官幣大社なり、樓門外、喬木森々として、中、森路を通せ、東、高野川帯の如く廻り、西に加茂川の清流あり、而して、糺森、大空、緑、常に、緑色を改めず、本社、東殿、玉依姫命を祀り、西殿、建角身命を祀る、境内、河合社、比良本社あり、比良本社の前、に、他木を植うるも、葉々皆、縫じて、比良木とある、一奇と謂ふべし、社頭に糺井の靈泉湧き出づ、夏月の都鄙の男女、此の泉に嗽浴して、暑氣を忘き、邪氣と拂ふもの多しと、拜畢り、樓門を出て、右顧すれば、連理木を玉垣の中に見る、両木の枝連りて、一枝となる、亦奇観なり、鴨川を渉り、車を轉じ、第三高等中學の前路を経て、神樂岡吉田神社に詣づ、本社、清和帝貞觀二年、中納言山蔭の勸請、一説に、ハト部兼延の造立と云ふ、本殿八角構造にして、本邦神祇三千一百三十二座と鎮し、内宮外宮、八神殿の左右、祀り、其の他の本殿の兩脇に列祀を拜し去ぎ、眞如堂よ、紫雲山、金戒光明寺、黒谷、お至る、即ち、淨土宗の本山にして、亦、正刹なり、法念上人の背蹟寺には、紫雲石と見る、圓光大師の廟前には、直實、敦盛の塚と見

る、熊谷堂に、蓮生自作の像、同、敦盛の像、蓮生所持、六字名號の白旗を見る、本堂の前には、鏡掛松を見る、方丈の庭に、鏡池を見る、蓋し、直實、法念上人の教に、歸依し、着せし、鏡と此の池水に、洗ひ、彼の松、懸け、置き、いと、なり、本堂方丈に、陳列せる什寶の概要なり、

- 法念上人、往生の畫幅、○聖光上人、眞筆、○六字名號、姿畫の懸幅、○壽老人、飛彈、甚五郎、作、○熊谷陣太刀、并に、珠數、○杵、直實、法念上人、小事へて、薪炊の勞を取りしとき、用ひしものと云ふ、○壽老人畫幅、(狩野、增實筆)、○熊谷出家得道の畫幅、(探幽筆)、○見眞大師、三拾五歳の像、(自作)、○阿彌陀佛、(自覺大師作)、○東照宮畫像、懸幅、(小野通女筆)、○秀忠公畫像、(家光公筆)、○龍骨、(勝より、頭まで、并に、角)、○敦盛法號牌、○屏風、(狩野、元信筆)、○二十五菩薩畫幅、(趙傳子筆)、○極樂導引地藏尊畫幅、(筆者不詳)、○無寬禪士、睡りて、虎に、もたる、畫幅、(明僧、北溪、明筆)、○源氏物語、屏風、一雙、(土佐、光起筆)、○阿彌陀如來、(惠心作)、○法念上人、一代畫十數幅、龍畫の襖、(久保田、令泉筆)

見畢り、禪林寺永寛堂に至る、本寺ハ南禪寺の北に隣り、楓樹池邊に列植し、秋季の候想ふべし、南禪寺と瑞龍山と號す、往昔龜山法皇閑居の地なり、堂舎宏壯、山門の前ハ大石燈籠一基あり、寛永中佐久間大膳亮の寄進に係る、山門ハ五鳳樓と號し、藤堂高虎の再建なりと、境内を徘徊し、偶々琵琶湖疏水線路寺傍を經過せるを見る、已にして車を馳せ、三條大橋に至り、伏見客舎に投ず、時に午後五時あり、三日朝陰晝霽、午前七時四十分、予市譚と三條客舎を發し、徒歩加茂川に沿ふて上る一里許、左折支經ハ入る、五六町にして一乘寺村ニ達す、經漸く仰ぐ、右ハ一小門あり、小有洞の額あり、石丈山翁の詩仙堂即ち是なり、小門に入り、進みて中門に至れば、梅關の額と掲ぐ、中門に入り、芝關に至れば、蜂窠の額あり、玄關に入り、案内を乞へば、一老尼名簿と携へ來り、住所姓名を記せしめ、予等を室内に引く、正面に木額あり、至樂集詩並小序を刻す、翁の手工あり、書齋の壁に、漢晉唐宋詩人三十六輩の豫額を列掲す、左に即ち蘇武、謝靈運、杜審言、李白、王維、高適、儲光義、韋應物、韓愈、劉禹

錫、李賀、杜牧、寒山、林逋、梅堯臣、歐陽修、黃庭堅、陳與義、右に即ち陶潛、鮑昭、陳子昂、杜甫、孟浩然、岑參、王昌齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧仝、李商隱、靈徹、邵雍、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、魯幾、尼云、丈山先生嘗て本朝の三十六歌仙に擬して撰ばせしものにて、像畫ハ狩野尚信、詩ハ先生の自筆なりと、是詩仙堂の名ある所以なり、床上の懸幅は、隸字にて朱子家訓を書す、亦翁の肉筆にて、頗る見るべきあり、翁自愛の香爐、其の他先輩の手筆ニ係る書畫帖等數品、亦床上に雜置し、椽上にて詩仙堂の額を掲げり、旁室ハ至せば、唐龕二疋、牌腕せる彫刻の扇面と粧ふ、飛彈甚五郎の作ありと、正室は七八席、扁額三個と掲ぐ、一ハ邁軸二字と書す、一ハ至樂集、一ハ松園、押入に翁の木像あり、凡に見るの狀を摸き、其の旁らに又一室あり、翁の神牌、及び佛像と宏老、天井ハ龍畫ハ剝落し、其れ狀を髣髴せし間に見る、翁八十歳は筆とぞ、其れ上ハ又一小樓あり、階を歴て上る、頗る眺矚の美あり、翁の墳碑ハ堂ハ巽位なる山上に見ゆ、天造木ハ眩掛、木崑崙ハ香几、銘云、主人名、四、銘之書之爲之、詩仙堂之香几、拂子如意等、樓中ハ飾る、階を下り正室

小坐し、茶を喫しつゝ、庭上と眺むれを、庭甚だ廣からざるも、洒然として、寸塵なく、小假山と造り、躑躅を植植し、淵水淙々、樹林幽遠、愛すべく賞すべく、真に隠君子の棲遲する所なり、嗚呼、丈山翁一たび其の萬衆を奮ふの業を投つて、翩然として、雲に吟し、月を弄ぶの筆を捲き、

わたらしなせみのをがはのあさくとも

おいのなみそふかけそはつかし

ど云へる歌を詠し、誓つて加茂川を渡らば、超然と塵俗の表に立ち、寛文十二年五月、龜鶴算以て一生を終る、其の名巍然として、詩仙の堂に數百年の後、存ま、斯の堂より昇る者、誰か其の高風を欽仰せざらんや、此と辞し、舊道を取りて本道に出で、加茂川と涉り、下加茂社の前路を過ぎ、茨橋を渡り、右折して鞍馬口村に至り、又右折して田間を経る、道は石碑あり、參議小野公瑩城碑の八字を刻す、碑文と越中金田清風の撰なり、紫野龍寶山大徳寺に至り、室内を巡覽す、襖屏風の畫は皆探幽元信一輩の筆にして、關と千利休、方丈門は明智光秀に寄進、山門は連歌師宗匠

宗長の修造せしものと、境内に眞珠庵あり、一休和尚の住せし處なり、一休自筆ある眞珠庵の額ありと云ふ、此より西に向ふて船岡山に至る、山容船に似たり、故に名く、應仁年中此の山に砦を構へ、細川山名數度の合戦あり、維新の後建勳社と山腹に設け、織田公を祀る、社頭より東山及び田野を望む、頗る佳晴たり、又田間を徑り、一條通に出で、腕車を買ふて馳せ、午後二時十五分葛野郡懸龜山天龍寺に達す、當寺は五山の第一あり、夢窓國師の開基にて、足利尊氏、後醍醐帝追福の爲めに建立せしと云ふ、乃ち車を下りて境内と徘徊し、後嵯峨院、龜山院の御廟を拜し、裏口より小徑を経て、嵐山に至る、嵐山の大堰川を帯びて北に向ふ、龜山院の御宇、和州吉野の櫻を移植せられ、今小都下の勝地たり、滿山櫻樹、簇立し、翠松相交り、波月橋は碧水漾々たる上に跨り、多少の雅致を添えり、酒樓茶舖は山に對し、水が臨みて併列し、戸無瀬の瀑や、千鳥淵は、此の川の流におり、一刻千金の春は、滿山白雲拖曳、翠松其の隙を彌縫し、澄潭其れ影を蕩漾し、

の興、あふん、今や花、候、遠く、去り、獨り、水、緑に、山、青く、風、物、蕭、條、感、極り、く、悲、  
むもの、あり、彈、正、仲、國、勅、と、蒙、り、寮、は、御、馬、を、賜、り、て、明、月、に、鞭、を、揚、げ、し、小、  
鹿、鳴、く、嵯、峨、野、は、秋、の、舊、蹟、も、何、處、か、と、問、ふ、べき、蔓、手、も、無、く、俯、仰、低、回、之、  
に、久、し、腕、車、を、回、り、し、三、條、通、に、出、る、四、時、寓、小、歸、る、已、に、し、て、叔、翁、亦、歸、り、  
曰、く、今、日、觀、劇、は、與、を、爲、せ、り、と、  
四、日、晴、午、前、八、時、三、條、客、舍、を、辞、し、三、條、の、大、小、橋、を、渡、り、右、折、し、て、寺、町、を、  
通、り、本、能、寺、に、至、る、本、堂、の、東、に、織、田、信、長、の、塔、あり、當、寺、の、初、め、六、角、の、南、  
油、小、路、の、東、今、の、本、能、寺、町、に、在、り、明、智、光、秀、叛、旗、を、翻、へ、し、信、長、と、弑、し、た、  
る、の、即、ち、其、の、舊、地、あり、と、此、より、下、御、靈、社、を、拜、し、舊、皇、居、の、外、郭、に、出、  
づ、所、謂、平、安、城、是、か、り、古、へ、左、右、二、京、九、條、大、遠、あり、今、左、京、及、び、六、條、遠、を、  
存、し、分、つ、て、上、下、京、と、も、皇、居、の、即、ち、上、京、第、一、條、に、あり、永、祿、十、二、年、再、  
修、後、は、規、模、あ、ま、と、も、紫、宸、殿、清、涼、殿、等、猶、は、延、曆、の、舊、規、を、見、る、べ、し、と、云、  
ふ、門、扉、固、く、鎖、し、縦、覽、を、禁、せ、り、恭、ま、く、惟、ま、ば、西、京、の、我、邦、の、中、央、に、位、し、

桓武帝鼎と奠め給ひしより、一千七十四年間の 皇都となす、九重天  
上儀鳳を來たし、五色雲中袞龍と拜する、最と吉祥なる土地あり、今や  
此と過ぎ、外郭を拜觀し、深く感想お堪えざるものあり、腕車と買ひ、市街  
を左右し、二條城の前と經て、神泉苑に至る、苑内に善女龍王社あり、社の  
廻り古池あり、池の廻り樹木森然あり、池と法成就池と云ふ、昔大内裏  
の時の封境廣大にして、天子遊覽の地なり、小野小町和歌を詠いて、雨を  
降し、鸞五位の爵を賜り、鶴金覆輪の太刀を得る、亦皆此の處なり、本朝  
文粹源順の文に、神泉苑の禁苑の一なり、紅林地廣くして、楚夢を胸中お  
呑み、緑池水高くして、吳江を眼下に縮むと云へ、其の一斑と想像すべ  
し、星霜漸く累り、遂に建保の頃より、荒廢に及ぶと云ふ、今僅か其の遺跡  
を見るのみ、此より壬生寺の後を過りて、東寺に至れば、忽ち五層寶塔老  
杉蒼々の間より聳ゆるを見る、此の地と大内裏の鴻臚館あり、處よりして、  
漢朝の鴻臚館を不空三藏に賜ふて、精舍を營みし例に准し、弘仁四年  
僧空海に賜ひしと云、金堂の豊臣秀頼の再建にして、洛東大佛殿を摸し、

昨日樓頭會李杜、今日樓下見揚妃、

六十四

の興、ふん、今や花侯遠く去り、獨り水縁に山寺く、風物蕭條、感極り、悲  
むもの、有り、彈正仲國勅と蒙り、寮に御馬を賜りて、明月に鞭を揚げし、小  
鹿鳴く、嵯峨野に秋の舊蹟も、何處かと問ふべき、蔓手も無く、俯仰低回之  
に、久し、腕車を回し、三條道に出る、四時寓小歸る、已にして叔翁亦歸り  
曰く、今日觀劇は興を爲せりと、  
四日晴、午前八時三條客舎を辞し、三條の大小橋を渡り、右折して寺町を  
通り、本能寺に至る、本堂の東に、織田信長の塔あり、當寺の初め六角の南  
油小路の東、今の本能寺町に在り、明智光秀叛旗を翻へし、信長を弑した  
る、即ち其の舊地ありと、此より下御靈社を拜し、舊皇居の外郭に出  
づ、所謂不安城是あり、古へ左右二京、九條大達あり、今左京及び六條邊を  
存し、分つて上下京と名、皇居の即ち上京第一條にあり、永祿十二年再  
修後、規模亦せども、紫宸殿、清凉殿等、猶ほ延曆の舊規を見るべしと云  
ふ、門扉固く鎖し、縦覽を禁せり、恭ましく惟せば、西京の我邦の中央に位し、

桓武帝鼎と奠め給ひしより、一千七十四年間の 皇都と名ど、九重天  
上儀鳳を來たし、五色雲中袞龍と拜する、最と吉祥なる土地あり、今や  
此と過ぎ、外郭を拜觀し、深く感想お堪えざるものあり、腕車と買ひ、市街  
を左右し、二條城の前と經て、神泉苑に至る、苑内に、善女龍王社あり、社の  
廻り古池ありて、池の廻り樹木森然たり、池と法成就池と云ふ、昔大内裏  
の時の、封境廣大にして、天子遊覽の地なり、小野小町和歌を詠いて、雨を  
降し、鸞五位の爵を賜り、鶴金覆輪の太刀を得る、亦皆此の處なり、本朝  
文粹源順の文に、神泉苑の禁苑の一なり、紅林地廣くして、楚夢を胸中お  
呑み、綠池水高くして、吳江を眼下に縮むと云へど、其の一斑と想像すべ  
し、星霜漸く累り、遂に建保の頃より、荒廢に及ぶと云ふ、今僅か其の遺跡  
を見るのみ、此より壬生寺の後を過りて、東寺に至れば、忽ち五層寶塔老  
杉蒼々の間、聳ゆるを見る、此の地之大内裏の鴻臚館あり、處よりして、  
漢朝の鴻臚館を不空三藏に賜ふて、精舎を營みし例に准り、弘仁四年  
僧空海に賜ひしと云、金堂の豊臣秀頼の再建にして、洛東大佛殿を摸し、

六十五

瓢箪池の形を以て名け、杜若列植せり、徘徊稍々久し、車を轉じて西本願寺に至る堂舎最も宏麗にして、賽入常に門程に充つ、當寺は草創は、龜山院文永九年、親鸞聖人の息女覺信尼公、勅を蒙り始めて、廟堂を洛東大谷に建立せり、乃ち勅願所として、龍谷山本願寺に號を賜ふ、第八代蓮如上人、其時宗義大に繁昌す、山門は衆徒之を妬みて、當寺を破却す、是より上人の北國を經回し、越前吉崎に御堂を營み、第十代證如上人、其時御堂を攝州石山に移し、十一代顯如上人、其時二品親王に勅書を賜り、門跡に號を許さる、又御堂を紀州鷲森に移し、遂に天正十九年八月、六條堀川に移すと云ふ、次小日蓮宗は本山たる大光山本國寺を見く、加藤公は廟を拜し、市街を曲折して、東本願寺に至る、即ち客月九日上棟式あるも、是あり、是亦頗る巨構にして、西本願寺と匹敵するも、是る當寺の第十一世顯如上人の嫡子教如上人、慶長七年、徳川家康の命に依りて、六町四方の寺地を賜り、新に御堂を創建せり、維新の際、兵燹に罹りしを以て、更ニ建築を、方今竣功に及べり、時方午後一時を過ぐ、某店に入きて食を喫ふ、

直ち六七條停車場に赴き、瀛車券を購ひ、二時五十分瀛車に乗り、大坂に向ふて發せ、比叡の高峰や東山と後小なり、四時十五分梅田停車場に若し、腕車を馳せて、東區淀屋橋を渡り、佐野客舎に投ず、夜に入り、市中を散歩し、心齋橋を經て道頓堀に至る、此の間、浪速第一繁華の地にして、人車の往復、肩相摩し、殺相撃つ、左右の各肆も、風姿を飾り、洋燈、白晝の如く、此は五六人、彼に七八人、或は書林に踞りて、和漢或は西洋の書籍を繙くもの、学校の生徒とぞ知られ、或は呉服店に佇みて、綺羅錦繡や縮緬、湯染などを弄ぶ、高家の婦女とぞ知らる、肉食家の如き者、洋服屋に踞り、風流者の如き者、骨董舖に佇み、道頓堀に、浪華中、角朝日、辨天座など云へる演劇場あり、四時興行互交絶えせと云ふ、

五日雲、午前九時客舎を出で、淀屋橋を渡り、腕車を馳せ、難波橋を見て、豊公社の旁を過ぎ、天滿天神社に詣る、臨時祭典あり、毎軒赤張灯を懸掛し、風姿綺麗、謁客途上に絡繹たり、昨夕當地に達するや、老弱男女一様の衣裳を裝ひ、車樂を昇ぎ、大鼓笛など打囃し、市中を巡回せると見し、本

社祭典の餘興どころの知られけき、天満橋を渡る、廿一年の改架あり、其の構造、東京吾妻橋と頗頗るに足る、又橋上より右に當りて天神橋と見る、所謂大坂の三大鐵橋の、蓋し難波橋と、此の二橋を指さならん、此より舊城郭を巡覽す、即ち豊公の築く所なり、周回一里餘、石壘高くして、障壘緑水溶々たり、雉樓猶ほ存するものあり、維新の後、鎮座第四本營となれり、尋で四天王寺に至る、石華表入り、西大門及び西重門を過ぎ、金堂の前へ出づ、其の南へ五重寶塔あり、屹然、天を擎けて、幻出する如し、予等階を攀ぢて登る、凡そ九階にして、七十七級あり、登り盡き、身を側めて、檻頭へ出づれば、四方の眺め悠長にして、近くは大坂、遠くと西京の市街、田圃山嶽の景、皆寸眸の中に萃る、佇立の間、神靈ひ目眩き、叔翁市謀の未だ佳觀を盡くさずして、下り去らる、當寺の上宮太子の創立よりして、佛法最首の精舎なり、天正中、延火お羅る、豊太閤再興せらる、又元和、中兵火お羅る、徳川家より再興あり、寛文四年尙ほ修補ありて、諸伽藍悉く舊觀に復したりと、元弘の昔、楠公正成當寺に出張し、渡邊橋の南へて、隅田高橋と

滅し、又上宮太子の未來記披見の事、杯追想しつゝ、勿々境内を出で、腕車と馳せて、難波停車場に至り、瀛車券を購ひ、十一時四十五分の發車に乗り、住吉に向ふ、天下茶屋停車場を経て、遙かに高燈籠を見る、所謂住吉濱邊の高燈籠是なり、十二時住吉停車場より、一小市を過ぎて、住吉神社に詣づ、石華表入り、行く數歩にして、一長池あり、反橋を架す、東京龜井戸大鼓橋と相類す、橋上より願胸すば、一簇の松林、鬱蒼と海濱へ互り、櫛きの高燈籠の屹然として、林中に聳えたり、橋を渡り、華表神門を過ぐれば、正面へ一殿あり、是と第三宮とを、表筒男命と祀る、其の後へ一殿あり、是と第二宮とを、中筒男命と祀る、其の後へ又一殿あり、繞らまほ瑞籬を以てす、是と第一宮とす、底筒男命と祀る、第三宮の左へ殿宇あり、是を第四宮とす、神功皇后と祀る、四宮皆壯麗にして、攝社末社併例し、神境亦弘敞にして、喬松群立す、華表四方へ立ち、瑞籬四維へ繞り、石燈籠其の間に星羅せり、底筒男三社の神功皇后征韓の役後、お祀せし所に、當社の造營の四社の位置を、八陣の法にくばり、所謂三社を、いひ、魚鱗の



備へ一社ひかくの鶴翼の園を願ひいたるものかりと、今官幣大社たり  
柿本人麿の歌に

きみがよのひさしかるへきた先しに

かほてぞうゑすみよしのまつ

又藤原爲時の詩よ、

晴沙岸上暮江干、

鬱々林藪蔭社壇、

應是神心雄苦熱、

浪聲松響夏中寒、

亦景狀の一斑と領をべし、拜し畢り、勿々停車場に至り、十二時四十分の  
發車に乗り、同然く五十分難波停車場に至り、某店小憩し、道頓堀より  
心齋橋通を経て、客舎小歸る、抑も大坂は地たるや、西成東成二郡小跨り、  
東西南北の四區小大別す、淀川中央を貫流す、市街水を引きく渠と爲す、  
縦横四達、架橋殆と二百、漕運便利小く、舟船織るが如く、全國第二の大  
都會あり、古と浪速と云ふ、神武帝東征の時、艦艦と催しこゝに至り給  
ふ、奔潮太だ急なり、故に浪速の稱あり、まゝ浪華と云ふ、後小難波と訛

る、仁徳帝之小都し、高津の宮あり、孝徳帝亦長柄小都と給ふ、豊關白  
始めて大坂城を築くや、海内の候伯亦邸第を列置す、是より百貨滙聚人  
潮轉集せり、徳川氏に及びて大坂城代を置く、明治維新府と爲し、本國七  
郡を治し、九年丹後及び丹波一郡を併治し、十四年又堺縣を併せと云ふ  
中西回漕店ハ、佐野客舎を距る數町、海口にあり、舍人腕車を馳せて前導  
す、予等亦腕車を聯結して馳せ、同店に至り、蕪州宇品港への渡航券を購ひ、  
三時四十五分、共榮社第一徳山丸中等客室に入り、五時卅五分、汽笛數聲、  
船再々動き去る、七時三十五分、神戸港に休輪す、港内船燈爛然、海面小映  
じ、風色愛まべし、八時十五分、同港を發す、  
六日晝、午前三時、蕪州高松、五時卅分九龍、六時十分多度津、九時十分備後  
鞆津に至る、甲板に出づまは、風無く、波靜かにいて、煙霞、大空、小鷗、多  
少の島嶼、海面に突起、或は近く、或は遠く、或は斷え、或は續き、船其の間  
を縫ふて、進航す、進航する、又隨ひ、一島去り、一嶼來り、奇景千變、應接暇お  
かず、十時卅分尾道、十一時五十分糸崎、午後一時十五分蕪州竹原、三時四

十分音頭各港を経て、方今新築の吳港を遠望し、五時宇品港に達せ、此の港も亦新築にして、風景頗る佳あり、即ち上陸して廣嶋藤川回漕宇品支店に投し、七時卅五分和船に乗る、嚴嶋に向ふ、此の夜、一天雲無く、星斗爛然、順風、帆を張り、弦月を載せて航せ、嚴嶋に達する比、己未十二時なり、幸町濱角研屋に泊す、本島の佐伯郡の海中に在りて、周廻八里、廣嶋を距ること五里と云ふ、

七日晴、午前六時五十分、同宿四五人と約し、導者を雇ひ、三笠濱に出で、嚴嶋神社の側背より瀧町を経て、毘沙門堂前より御山に登る、御山一の彌山と云ふ、佛徒山勢の不凡あるを須彌山と比して名くと、第一華表其の麓に在り、道の左右に、巖石突兀、樹木鬱蒼と云て、溪水深々然たり、登る一町餘にして瀧宮あり、湍津姫と祀る、白糸瀑瀧宮の山上より、數十派となりて、落る、宛然白糸と亂せるが如し、治承四年、高倉上皇石上より叙覽あり、今猶は其の石あり、御幸石の名を存せ、小逕屈曲、愈々登り愈々急ふ、行く者前後頂踵相接し、人々流汗瀼瀼、氣息喘々たり、五六町にして稍々

平地を得る、一茶店あり、名物力餅を賣る、下觀すを、嚴嶋神社の島岬左、右翼を張りし、瀧中に在り、迴廊本社の左右、長く屈曲し、大華表の廣前の平沙に建ち、加之瀧頭松陰庵の如く、無數の石燈籠、其の間に併立し、一層の光景と添ふ、導者云ふ、潮満る時の本社亦海となり、參拜の船、帆を揚げながら華表に入り、來り、濤も如ざるの風、致ありと、叔翁稍々疲勞、是に於て叔翁と別れ、力餅を口に、一群勇を鼓して又登る、一二町を経て、左に數百丈の巖壁、恰も幕を張りたる如きを見る、俗に幕巖と稱す、又數町を登り、第二華表に入る、弘法大師練行の處あり、樓門に仁王像を安置、一老爺茶を賣るあり、手靴を脱して草履と穿ち、又登る二町許にして、石と建て刻して曰く、十八町是より宮巡りと、六十六の石段を攀ぢ、蜿蜒迂曲して、危巖巨石の間と縫ふて歩す、船石、蓮花石、重々巖、干瀧巖、頂上石、摘出巖等あり、頂上石の即ち當山の絶頂あり、八十餘の末社、跡々其の間に散在せり、絶頂より望めを、蒼海本島の四周と擁し、頗る佳觀たぞ、稍々下まで鐘撞堂あり、洪鐘を釣る、銘に云く、伊都岐島彌山水精寺奉施入治承

元季丁酉二月八日施主右大將平宗盛と、又鼓殿と見る、之を敲けばボン々々として、鼓殿の稱空しからせ、求聞持堂に至る、明治廿年同祿に罹り、今假堂を建り、堂内又圍爐あり、焚火燄々、導者云く此の堂ハ弘法大師求聞持修法滿座の靈場にして、修法の行者、千有餘年の今日に至る迄、一座も絶ゆる無し、故を以て爐火ハ大師開持より傳り、火災の時ハ、首として爐火と轉移せしと云ふ、時に九時十五分なり、小憩して御山神社に詣る、市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を祀る、本社ハ三柱の姫神、本嶋鎮座の初め、影向ありし舊跡なるを以て祀ると、是より舊運と取て下る、下る太だ速よして勞少く、上るの遅して勞多きに似ざるなり、直ちに巖嶋神社に詣る、叔翁此に在り、烟と喫して待さる、社殿宏麗、御山神社と同く、三柱の姫神を祀る、素盞鳴尊の御子なり、推古帝の御宇、常國の住人佐伯鞍職大神の示現によりて、勅命を蒙り、社殿を創建せりと、社前に幣殿あり、左右の回廊ハ、長さ九十餘丈、一間毎に鐵燈籠を釣る、梁間に蜀げし繪額ハ、大小凡そ二千五百枚、古來名家の筆少からせ、今其の一二と擧ぐせば

- 三十六歌仙(實隆公書、光信書)○孔雀(宋紫石筆)○龍(杏雨筆)○鯉(探幽筆)○鷄(應舉筆)○本社の詩(丈山自題)○羅生門(尙信筆)○三福神(常信筆)○龍(伊川筆)○牛若辨慶(元信筆)○蝦蟇仙人(兆殿司)○鐘魁(藍江筆)○鶴(東洋筆)○張飛(古秀筆)○秀郷(素絢筆)○曹操(海僊筆)
- 韓信(觀山筆)○敦盛直實(丹覺筆)○宗高(丹倫筆)○松間日出(雅信筆)○三十六歌仙(楊心筆)○清正(元義筆)○仙人圍碁(岸良筆)

社の東北廻廊又續きて、客神社あり、亦壯麗なり、天忍穗耳尊、天穗日命等五神を祀る、廣前の大華表内、潮の至れる、涯りを玉御池と稱せ、御池の内、鏡ヶ池あり、蓋し潮退きて後、平沙に一小池をあすもの是なりと、抑も本社ハ平相國清盛安藝守たりし時より崇奉殊に深く、更に神領と増加し、社殿を造營し、世々罕きなる壯觀とあり、爾後鎌倉將軍家、足利氏、本國の領守、大内、毛利、福嶋、淺野諸氏よりモ、時々祈願あり、社殿に修理を加へ、祭式を行へる、明治維新の後、國幣中社に列せらる、揚水橋の旁らに、平判官康頼疏黃島より流したる卒都婆の寄り付きたりしと云へる石あり、

又康頼歸洛の後、寄附の石燈籠一基あり、頗る古雅あり、是より紅葉谷に至る、紅葉谷の社、後に在り、溪水、山腰より流し、出で、奇巖、巨石、水中に聳え、立ち、架橋の狀、最と趣き深く、一葉の舟を其の間に、泛べ、兩岸より、老楓、蔭を交えて、日影を蔽ひ、兩三の茶店、雅致を具へ、眞に、風流韻士の、尾を留むべき、最好地なり、尋で龜居山に至り、千疊閣を見る、縦二十五間、横十八間、閣内に、豐太閤を祀る、蓋し大閤九州へ發向の時、本社に詣りて、大神の冥助を祈り、翌年報賽あり、去時、此の閣と造營あり、去と、閣欄不見り、眺めず、をバ、内海及び、藝州海岸皆一日の中あり、風色殊々美なり、其の旁より五層樓あり、應永十四年七月建立と云ふ、本島の俗に宮島と云ふ、天文中毛利元就、陶全美を誅せ、去古戰場あり、其の景色の如き、古人松嶋天橋立と併せて、本邦の三景とせり、客舎小跡あり、勿々午餐と喫去、十二時三十分、又和船に乗る、戀々願望去て去り、午後三時五十分廣嶋小達去、藤川本店より小憩去、直ち小腕車を馳せて、市中を過ぎ、舊城内兵營練兵場等と巡視去、五時十五分宇品藤川支店に至る、本店を距る一里許、是より於て

中等乗券を購ひ、七時十分幸運輪丸に投じ、九時十三分馬關小向ふて發き、同室に立川某あり、熊本の人

八日晴、午前五時五十分防州福原、六時五十分三田尻を經る、是より先き三光丸、幸運輪丸と宇品港と後先に發き、此に至り、兩船一層の速力を加へ、輪麻と争ふ、我船遂先鞭を譲らず、十一時十五分馬關に達し、直ち小輪船に轉り、十二時四十六分馬關を發し、門司崎を左顧し、岸流嶋を右眺し、小倉小向ふ、余作て馬關に遊ぶ、半夜此の海を航し、時々、天宇澄妍、煙波滄溼、舟と上下す、余愛玩暇かず、今おしく之を想ふ、恍然一夢の如し、午後一時四十六分小倉に達し、某店小休憩す、三時五十分腕車と馳せ一里半許、筑前若松驛に至り、波多野旅舎小泊す、  
九日朝雨霽露、午前十時四十三分旅舎を發す、叔翁車小乗り、余等尾にて徒歩す、行く五里芦屋驛に至る、又行く三里赤間驛小達す、時より六時卅分、白木客舎に泊す、  
十日晴、午前五時五十分腕車を聯結て、赤間驛を出で、八時古賀驛に入る、

赤間を距る四里許、是より香雅驛を経て、十時二十五分箱崎に至る、青松、  
 千萬株鬱々として千歳の色を含み、敵國降伏の勅額あり、凛々として、遠く、  
 海面を射る、車を下りて八幡社に参拜す、史に稱す、在昔神功皇后三韓を  
 征し凱旋ありて、應神帝と此の地に誕生あり、後世因りて祠を建ると、  
 今官幣中社たり、又腕車を馳せて榊多に至る、市蔵立川歸志俄に通り、車  
 夫と熊本直行を約し、余等と別る、而も二日市を経、摺針驛までの車と  
 前後せり、此に至り予叔翁と車を下り小憩を、二人先鞭を著け去る、時  
 に三時二十分あり、此より徒歩二三里を経て、又腕車を買ひ、八時三十分  
 久留米に達し、平田客舎に泊す、  
 十一日寅、午前六時卅分客舎を發せ、腕車轉轍し、福嶋驛を過ぎ、兼松驛に  
 至り小憩を、十一時邊春村を経て、三楠峠を踏え、我肥州に入る、是より四  
 里許おしく、山鹿驛に達す、日脚猶ほ高し、乃ち車と代へて發せ、我家に歸  
 る比、己に八時なぞ、家人出を迎へ、無事を祝し、且つ云く、本日午下三時市  
 謙一聲して去ると、抑も此の行や、日たる三十有八日、大抵車三を取り、船

二〇を〇取〇り〇歩〇一〇を〇取〇る〇東〇都〇の〇繁〇華〇日〇光〇の〇壯〇麗〇鎌〇倉〇の〇幽〇迹〇伊〇勢〇の〇大〇廟〇西  
 京〇の〇故〇都〇殿〇島〇の〇奇〇景〇亦〇皆〇歴〇覽〇し〇稍〇々〇素〇志〇を〇償〇ふ〇と〇雖〇も〇遣〇す〇所〇亦〇少〇か  
 〇す〇然〇れ〇と〇も〇僅〇々〇の〇日〇子〇を〇以〇ぐ〇此〇の〇大〇觀〇を〇盡〇く〇と〇昭〇代〇の〇餘〇澤〇に〇あ〇る  
 〇走〇ん〇ば〇安〇ん〇ぞ〇能〇く〇此〇に〇至〇らん〇や〇余〇猶〇ほ〇春〇秋〇に〇富〇む〇其〇れ〇遣〇す〇所〇の〇如〇き  
 〇は〇亦〇將〇に〇他〇日〇に〇繼〇ん〇ど〇す

東遊日乗下の巻終

跋

我國友先師論世堂。一時稱多人才。然其最顯者。蓋三子矣。豪邁英氣。文章奇拔。不可敢測者。國友龍井也。溫良方正。文氣雄膽。不可敢犯者。古賀龍巷也。沈毅卓越。文章雄偉。不可敢識者。池邊逸香也。余竊以三子爲畏友。而如龍井逸香。或昇降于大都文壇場裡。或出入于政派湧濤之間。以逞其技。將大有爲。獨龍巷孳孳于觚翰方冊之間。以文學自任。尤慨和漢之學。萎靡不振。益究其精。旁誘掖後進。嗚呼三子。猶富春秋。鑽堅學殖之富。各出一機軸。以放負嘯之氣。篋其造詣。尙可復想焉。今東遊日乘。印刷成。余不顧魯陋。聊叙三子之性行跋之。若夫記事之密。文辭之雄。固不待余言也。明治辛卯仲秋於永邨之自邸。

同學

成松平八

謹撰

武總至肥筑。道程三百餘里。爲州居海內三分之二。巍乎秀者有富士嶽。泱乎濳者有琵琶湖。於神社。於佛閣。於名勝。於古蹟。古人之筆而傳者。蓋亦不尠矣。今也天下之形勢一變。漁船走於海。涼車馳於陸。邊鄙爲繁華。風物亦隨而異。觀矣。而發之於文。能並駕古人者寥寥矣。豈其身僕々乎風塵之中。不暇探討耶。抑亦榮情拘名。胸懷齷齪。不能心事雙清。雖遊而文不巧耶。龍卷先生后肥人。夙以維持風教。釐正名分。自任焉。嘗奉職於熊本尋常中學。尋兼第五高等中學教授。一朝有弗屑於意。斷然辭職。以己丑之春。遠遊東京。遂詣日光廟。有記曰東遊日乘。嗚呼。是先生文藻之一班耳。而所過高山大湖。神社佛閣。名勝古蹟。其他涼船之於海。涼車之於

陸。古今之異觀。亦皆載而無遺。以傳古人之未筆而傳者。使讀者不出於戶庭。而盡天下之形勝矣。抑先生廉介自持。出無官守。進退綽然有餘裕。閒放浪於山水。以散鬱勃之氣。吳越之山。巴蜀之水。亦將得先生之遊。而發其光。彪雖至愚。願又得與聞焉。

受業

武藤

彪

拜識

天下之大都三。曰東京。曰西京。曰大坂。其地既異。其俗亦隨而變矣。夫東京政教之所出。而天下之學士咸集乎此。其民俠而浮。尤敏於事。西京則歷世之舊都。而自古緇流極盛。文雅爲風。遂流於優柔。好纖巧綺麗。大坂占河海之便。顯米穀魚鹽之利。錢刀狙獮之氣。自結成矣。故欲研學術。通世務。莫如東京焉。欲明宗教。極美術。莫如西京焉。欲見商賈之機。博

有無相通之利。莫如大坂焉。抑三都之風。趨勢之自然。正德利用厚生之道存焉。此道也者。天之所以育生民。而聖人之所資以治天下也。是以三都之盛衰。即關天下之休戚。卜天下之大勢者。於此可得其概也。我龍巷先生嘗遊上國。有東遊日乘之著。頃門下諸子請附聚珍。而先生生命聖與以一言。聖與不敏。何足以汗先生之著。而亦嘗受先生之教。先生之命焉者。寧知非所以憐其沒於無聞而掖之乎。然聖與於先生之著。復何言。願余之遊三都有年矣。而半臥於病。未暇遍探名區舊蹟。及讀先生之日乘。轉有不堪感慨者矣。然於三都民俗之異同。非無所見焉。於是乎聊叙其概。以附卷尾。寓所以附驥尾而傳之意云爾。

受業

河口聖與

謹撰

己丑之春。龍巷古賀先生東遊有記。既附印刷。余嘗學文於先生。今有此舉。豈可默而止哉。夫紀遊文章之小品耳。而先生之著。其所係甚大矣。其繁華如東京。其舊都如西京。其壯麗如日光。其幽靜如鎌倉。其他山之巍然而峙焉。水之滾々而流焉。風物之於名地。史傳之於古蹟。一目一羅。屬辭精工。殆如生境。一讀使人神馳。先生之學之興才。亦可窺其一斑矣。余四五年前。辭鄉官干某縣。尋遊東京。而筆之無以紀遊。自今日觀之。茫乎如失。今讀先生之著。有不堪追想者。嗚呼。先生之爲遊。僅々三十有八日。而其紀文則永世不朽。豈嘗發一時之光而已哉。歲次辛卯白雲紅葉之節。於對山堂南軒之下。

後學

伊藤敬止

拜識



六  
熊城之東北有龍街。龍街之中綠竹猗々爲一區域處。明窓淨几。右硯左帙。尙友古人。涵養道德。旁薰陶子弟。隱然有臥龍之風者。我師龍卷古賀先生也。己丑之春。先生載筆漫遊。發我熊本。而至大分。浮海赴讚州。尋航神戶。直乘漁車。經西京。以達東京。而日光。而鎌倉。又浮海赴伊勢。再經西京。而出大坂。以航嚴島。其間英雄豪傑之遺蹟。忠臣孝子之鄉黨。龍鬪虎爭之故地。神社佛閣之壯嚴偉麗。古器珍物之名稱緣由。及山嶽河海。名區勝迹。地理風俗。凡足之所蹈。目之所觸。一一記之。東遊日乘是也。讀焉則忽而喜焉。忽而悲焉。忽而笑焉。忽而憂焉。忽而可俯仰古今焉。忽而可勃發遊意焉。其文之奇而妙。自有與先生相提携。親受其指點之想矣。嗚呼。先生之行。僅不過數十日之間。而有此著。豈不亦偉乎。頃者

同門相謀。請先生附諸印刷。以代謄寫之勞。併便同好之士。四等此舉。固非征名利。蓋爲益於後學也。抑亦有所慕先生之高風清節而然也。明治廿四年十月

門生

岸原四郎

拜撰

東遊日乗正誤表

上の卷	頁	行	誤	正
四	五	坂井	板井	
五	一三	俗に	に俗	
七	一二	應長	慶長	
一二	五	見石	貝石	
一二	六	粧	粧金	
一三	四	客舎	客舎	
一五	六	々々	々々々	
一五	八	討する	討すゝ	
一七	九	横五寸	横五尺	
一九	一四	四萬九百	八萬四百	
二〇	一	相	相抗	

中の卷	頁	行	誤	正
二一	五	吉晴	吉晴	
二二	一〇	水	湖水	
二二	一四	過だ	過だ	
二三	七	如た	如た	
二四	一	青原	青野原	
二四	一	後此に	後此の	
二四	三	應長	慶長	
二四	六	埒郭	城郭	
二四	一四	場に渡	場小至	
二六	一四	過だ	過だ	
三二	二	仰も	抑も	

下の巻	五〇	五〇	四八	四五	四四	四〇	四〇	一八	一八	一五	四	一
一〇	一二	八	七	三	一	一四	八	七	七	九	一	三
宇都宮	宇都宮	精都	紅艸	遣訓	唐木	釘釘	倍列	拔身の	宰村	九雀	奇	瓦を敷
黠く	宇都宮	精華	唐艸	遣訓	唐木寄	燈釘	陪列	拔身一	幸村	孔雀	奇獸	瓦を敷
二八	二八	二七	二七	二七	二二	一〇	九	六	五	五	二	二
一	六	一	一〇	七	八	七	八	一三	一三	九	一	一
臚吹	殿ば	出す	埋め	示	大護	剛	址の比	位を園	めた	覽元	尖額形	尖頭形
臚吹	殿は	出す	埋め	亦	大磯	田圃	址の北	位を園	めた	寛元		

五二	五〇	五〇	四五	四五	四一	三六	三四	三〇	二九	二九	二九
三	二	七	四	一	四	一〇	二	三	一四	一三	五
駒麿松	あり	匆猝	あり	慶鐘	過だ	關東	坊麗	見の極	岸	村	是間
駒麿松	あり	匆猝	あり	慶鐘	過だ	關東	巧麗	見の松	海岸	江村	是と

五九	六五	六四	五八	五四	五四	六九
一	一	六	四	一	一	一
勿々	奠め給	劇れ與	比良本	雨歌	徒歩	徒歩
勿々	奠め給	劇れ與	比良木	雨歌		

東遊日乘正誤表終

明治二十四年十一月十一日印刷  
明治二十四年十一月十二日出版

正價金貳拾五錢

著述兼發行者

熊本縣士族

古賀富次郎

熊本市東坪井町五十二番地

全

印刷發起主任

岸原四郎

全市西鋤身崎町四十七番地

全

印刷人

林貞雄

託麻郡本庄村三百八十八番地

印刷所

庚寅活版所

熊本市明十橋通二十八番地